

E 20.604
204
გერმანიის
გერმანიის



821.333.1-13

20060920
20060920



F
20.604
209R.

この物語について

ロシアの南どなりにグルジアという国があります。紀元前数百年に歴史がはじまる古い国ですが、東と西のかけ橋といわれるようないい位置をしめていたため、たえず東と西から敵にねらわれて、苦しんでいました。十二世紀の後半にゲオルギイ三世が出て国家を統一し、つづいてその娘タマラの時代にこの国はもともと強大になりました。タマラ女王は一一九二年にオセチアの王子ダヴィド・ソスラニを夫にむかえ、封建諸侯をおさえて、黒海からカスピ海、北はカフカズから南はエルゼルーにいたる大王国をきずきました。敵も手出しができなくなり、したがってこの時代に、グルジアの経済と文化がたいそうさかんにおこったのであります。

この物語はこういう時代を背景にして生まれました。国の中がもめて弱くなり、外国のあなどりをうけてはだめだ、ということがグルジア復興のおしえでしたから、物語はそれを反映し

て、国を愛する精神と、ひろく外国に目をむけて、いろいろな民族と手をつなぎあうという精神とに——つまり愛と友情という考えにつらぬかれています。作者にとってはすべての人々はきようだいであり、人類という一つの家族の仲間でありました。

中世は宗教的にやかましい制限のあった時代ですが、それにもかかわらず、この物語がのびのびと人間みたっぷり書かれていることは注目されていいと思います。とりわけ、女性を自由な、意志の強い人としてはたらかせ、女性への尊敬、男女平等をうたっているのは、当時としてはめずらしいことでした。この本がタマラ女王の後、つい近年まで、いく百年のあいだ焼かれたり川に投げられたりして、ひどいめにあってきた原因の一つはそこにあったのです。

作者シヨタ・ルスタヴェリの経歴ははっきり知られていません。生まれたのはグルジアの一方地方メスヘチアにあるルスタヴィという村で、十二世紀末から十三世紀はじめにかけて活動していました。教養の高い詩人だったようで、ビザンチンで学び、プラトンの哲学やホメロスの詩、またアラビア、その他諸国の文学にも通じていたといわれています。この物語は一一八七年ごろ、タマラ女王の注文によって書かれ、そのお礼にルスタヴィ町がつくられたとのことで

す。この町は、ただいまではグルジア共和国（ソヴィエト連邦の一構成国）有数の工業都市となつています。

作者の作品でいまに伝わるのは、この物語一つだけです。しかしこれ一つだけで作者の名は不朽となり、ときには「グルジアのホメロス」とまでたたえられています。ソ連邦の教科書には、国語の本にも、歴史の本にも、かならずこの作者とこの物語のことが書かれています。最近の八年生（中学二年）用国定文学教科書を見ると、そのために十三ページもささげられています。

これは中世のロマンチックな長編叙事詩です。六千行より成り、使われていることばは四万を越えています。これを散文の形にして訳したのがこの本ですが、内容でも、意味でも、また文章そのものでも、かなり原文に近くうつしたつもりです。この本一冊におさめたのは、古い詩によく見られる同じ意味のことばのくりかえし、同じような形容詞や形容語の重複などを省略したからです。それでもまだくどいと感じる読者もあるかと思いますが、中世の詩の気分をそこにみただければさいわいです。したがって、この本は、けっして原作の抄訳やダイ

ジエストではありません。

ソ連邦では一九三七年にルスタヴェリ七百五十年祭がもよおされました。これを機会に原作の完全なロシア語訳をめざす委員会が組織され、りっぱな仕事すすめられてきました。

この本のテキストとしたのは、モスクワの国立芸術文学出版所から一九四一年に発行されたシャルワ・ヌツビゼの訳本および同出版所から一九五三年に改訂版として再刊されたゲオルギイ・ツァガレリの訳本であります。

一九五五年八月

袋 一 平

目次

一、運命の二騎士

アラビア王ロステワン	二六
とらの皮を着たふしぎな騎士	二四
王女チナチンの秘密の命令	三〇
アフタンジルの遺言	三六
さすらいの旅路のはてに	四一

二、タリエールの物語

洞窟の出会い	五
友情のちかい	六
インド王バルサダン	六
美しい若木のなやみ	七
タリエールと王女ダレジャン・ネスタン	七
ハタイ戦争のてんまつ	六
勝利のうたげ	五
意外なむこえらび	三
ホラズム王子の死	一〇

王女ネスタンがさらわれたてんまつ……………二四

フリドンの都……………二〇

王女をたずねて十年……………二五

信義の別れ……………二三

三、アフタンジルの歌

アフタンジル、アラビアに帰る……………三七

大臣のとりなしの失敗……………二四

アフタンジルの脱走……………二〇

二騎士の再会……………二五

十一年めの旅だち……………二七

フリドンの友情……………一六

四、格蘭シャロの花

キャラバンと海賊……………一八九

ファチマのもてなし……………一九七

入江やしきの殺人……………二〇四

ネスタンが商人の妻に救われたてんまつ……………二〇九

ウセインのうらざりとネスタンの逃走……………二一六

魔天城のとりこ……………二二六

空飛ぶ使者……………二三三

三つの手紙……………二四一

五、キャラバンの道

洞窟宝库	二四九
三騎士の顔あわせ	二五五
摩天城の戦い	二六〇
沿海国の会合	二六六
ムリガザンザリの相談	二七二
キャラバンはアラビアに着く	二七九
アフタンジルとチナチンの結婚	二八七
インド平定	二九三
むすびのことば	二九七

この物語のおもな人々

タリエール

タリエール



この物語の主

人公。インドの

一領主の子で、

インド王バルサ

ダンの総司令

官。封建時代の

騎士の肉体的特

長——力と美と

をかねそなえている。そのおどろくべき力は、はじ
 めてかれが登場するアラビア王の狩りの場面で見ら
 れる。たんに強いばかりではなく、ハタイ戦争や摩
 天城攻略の場合に見られるように、天才的な戦術家

でもある。一面また人情ぶかく、心がひろい。うら
 ぎったハタイ王のいのちを助けたりする。ものすご
 い肉体の力にもすごい愛の力がこたえている。か
 れはもえる感情の人である。はじめて王女ネスタン
 を見て気を失い、またさらわれた王女をしたって、
 泣き狂う。性格のつりあいがとれていない。それは
 かれのはげしい情熱と愛の力のためである。

アフタンジル

この物語の副主人公であるが、むしろ主人公より
 も活躍する。かれは騎士の理想のあらわれである。
 アラビア王ロステワンの総司令官。タリエールの特
 長が力と美にあるとすれば、アフタンジルの特長は
 力と知恵にある。強く勇敢であると同時に、よくし
 んぼうし、よく判断する。やくそくをまもり、しょ
 うじきで、一本気である。しかし、必要があるとき

は、アスマー
もとの出会い、

あるいはフアチ

マとのかけひき

の場面に見られ

るように、外交

的手腕をもあら

わす。また星を

見て遠い人をし

うして肉体の強

調和されて、こ

アフタンジル



ダレジャン・ネスタン

インド王バルサダンの王女。タリエールはめすの

とらを見て王女のことを思い出すが、まったくこの

人には残忍と紙ひとえの大きい内部の力がある。ホ

ラズム王子を殺す一節には、政治的な考えもみとめ

られる。つまり、国の仕事にも興味がある女性であ
る。それだけにしっかりした性格の持ち主で、とら

われの長い苦し

い生活にもびく

ともしない。タ

リエールへの手

紙に見られるよ

うな、感じやす

いやさしい女心

もゆたかにある。

ダレジャン・ネスタン



チナチン

アラビア王ロステワンの王女。ネスタンとは人が

らがまるでちがう。やさしく、ものしずかで、内気

な性質である。世の中を見る目はあかるく、人にた

いするおもしろいやりが深い。父のなげきをとりのぞこ

うとして、アフタンジルをあてのない遠い旅へおく

チナチン



り出す。しかも
 かならずかれが
 婦ることを信じ
 て、いく年でも
 待っている。こ
 のあかるい性格
 がかの女をアフ
 タンジルに近づ

けるもとになっている。

ヌラジン・フリドン

ムリガザンザリの領主(王)。若く、勇敢で、宴会
 と狩りが大すきで、友としては気のおけない、しか
 もたのもしい騎士。タリエールに助けられた恩義を
 わすれず、そのかた腕となり、アフタンジルと力を
 あわせて、とらわれの王女のすくい出しに部隊をひ
 きいてはせむかう。

ロステワン



ヌラジン・フリドン

アラビア

王。かぎり

ない富を持

ち、しかも

公平な君主。

善良で、心

は大きく、

賢明で、も

のおしみし



ロステワン

ない。ただほこりが高く、おこりっぽい。そのため、おやしい騎士にはこりを傷つけられ、そこからこの物語のいとくちがひられる。客にたのまれては、いやといえないものがたさは、またこの物語をほがらかな結末へとみちびく。

アスマート

ネスタンの侍
アスマート

女（どれい）。ネスタンに献身的につかえ、後にはタリエールに献身的につかえる純真な女性。世の中のどんな



おそろしいことも苦しいことも、かの女のひとつじの気持をまげることではできない。かの女が経験した

ような生活は、おそらく世界のどんな人でもたえることはできないであろう。この物語では特に感動的な人物である。

ファチマ

グランシャロの大商人の妻。この物語ではもっとも市民的な、おもしろい人物である。かるはずみで、むら気で、とんでもないことをしかすが、本性はきわめて善良で、同情深い。また機智にも富んでいる。かの女の

ファチマ

登場は南の国の風物をおおり高くはこんで、物語の現実性と色彩をつよめている。



表^{ひょう}紙^し 装^{まう}幀^{てい}
口^{くち}繪^え 口^{くち}紙^し

林^{はやし} 梁^{やな}

川^{がわ}

唯^{ただ} 剛^{ごう}

一^{いち} 一^{いち}

とら
の
かわ
を
き
着
た
ゆう
し
士

げんさく
原作・
ルスタヴェ
エリ
いっ
一
べい
平

一、運命の二騎士

アラビア王ロステワン

アラビアにロステワンという王さまがいた。たいへんなお金持で、そのうえかしく、公平で、おきてをよくまもり、戦争には、とても強かった。

王さまには王子がなかつたけれど、チナチンという王女があった。それは太陽もその光をうしなうほど、美しい娘であつた。ひと目見て、胸をとどろかせない人はなかつた。よほどの賢者か詩人でなければ、王女をほめることばを見つけることはできなかつた。

ある日、王さまは大臣はじめ諸侯を呼び集めて、会議をひらいた。

「ばらも花のときが過ぎればかれ、それにかわつて、新しいばらが庭をかざらなければならぬ。

私の日はもうかたむいた。老いはどんな病気よりもつらい。王者の光もくらしい地獄に消えていこう



[20.604
2092

「なにをおっしゃいます、王さま！」と、大臣たちはいった。「ばらはすこしもしぼんではおりません。どんな会議よりも、王さまのおことは重い。お心にかけているとおりに——王女さまにお位をおゆずりあそばさすよう。なるほど、王女さまは女性ではありますが、王位は天からさずかるもの。それに、おせじではございません——チナチンさまは王冠をいただくにまったくふさわしいおかた。ライオンはわが子が男性であるか、女性であるかに、なんの区別をいたしません！」

まもなくアラビアじゅうりに王さまのおふれがまわった。

——神のおぼしめしによって、私はわが娘に王位をゆずる。かの女は人々すべてに幸福をあたえるであろう。かの女の即位を祝って、もれなくきたり集まるように！

アラビアの人々はこのらず王さまの宮殿にやってきた。アフタンジルもそのひとりであった。かれは諸侯の子で、軍の総司令官、いとすぎのようになりとした勇士であったが、心にはふかい傷をおっていた。かれはチナチンを見てから、たえずそのおもかげに苦しめられていた。

——しかしこれからは、あの水晶のお顔をたびたび見るおりがあるろう。私の沈んだほおにも、赤みがさすことがあるかもしれぬ。

総理大臣ソグラートが進み出て、王女を玉座に案内した。父王みずから、わが娘に金のかんむり

をかぶせ、王標を手わたした。それから王もその他の人々も数歩さがって、いまはもう女王になったその人に敬礼した。同時にらっば、ふえ、たいこがいつせいにやさしく鳴った。チナチンは目にいっぱいなみだをたたえて、黒いまつ毛をふせた。

「泣いてはいけない！」と、王さまはいった。「おまえはアラビアの女王になったのではないか。

この王国をおまえの手でかしくくまもり育てていかなければならない。太陽は雑草をもばらをもいちように照らす。身分の高い人と貧しい人とに区別があつてはならない。思いやりはどんな悪い人の心をもやわらげる。家はどんなお客にもあけはなしであるように。人に分けあたえるものは、おまえのもの、かくしておくものは、永遠に失われるであろう！」

父のおしえはふかくチナチンの心にしみた。戴冠式のあとはすばらしい祝宴となった。父王も陽気にさわいだ。歌声がひびいた。

チナチンは子どものころから親しんでいた家庭教師を玉座に呼びよせて、いった。

「お倉の封印をみんなやぶって、王家の財宝をのこらずここへはこび出すよう、けらいたちにいいつけてください！」

はこび出された。チナチンはそれを宮廷の人々にも、一般の人々にも、また通りがかりのこじきにも、おしみなく分けてやった。





「あたしはさつそく父のおしえにしたがいます。お倉はぜんぶひらきます。どなたでも、おすきなものを自由にとおとりください。それから、うまやの馬もはなちます。」

数知れない金銀たからものは、雪がふるように群集の上（うへ）にふりまかれた。うまやからたくましいアラビア馬（うまば）を引き出すものもあつた。老いたるも、若きも、男も、女も、むちゆうになつてこれらのおくりものにとびついた。ただ父王の顔にはなにかくらいかげがさした。

「王さまが急におふさぎのようすではありませんか。」と、ソグラートはアフタンジルをかえりみた。「けらいどもや客人をおしかりになることができないので、それでごきげんがわるくなつたのではないかしら？」

「そうかもしれないません。」と、アフタンジルはこたえた。「では王さまをおなぐさめしましょう。それが私どものつとめなのですから。」

大さかずきをささげて、ソグラート、つづいてアフタンジルがテーブルから立ちあがつた。

「王さまのお気持はよくわかります。王女さまが財宝をまき散らし、お国の金貨はたちまちからになつて、アラビアの力は失われたのですから。そのおなげきはもつともですが……。」

「待て！」ロステワンは悲しげな微笑をかくそうともしないで、まっすぐにいった。「だれが私（わたし）のことをけちだといふのか、だれが私（わたし）がまちがつたといふのか！ 私（わたし）の顔（かほ）にかげがさしたといふな

「ら、それは私が年とって、お墓の入口に立っているからなのだ。矢でまとを射り、かけながら玉を投げて、アフタンジルにひけをとらない、この父のようなむすこを、天がさずけてくださらなかつたからだ。」

王さまのことばを聞いて、アフタンジルはにやりと笑った。歯が真珠のように光った。

「こら、なにが、おかしい？」と、王さまはとがめた。「あるじにたいして、ぶれいではないか！」
「そのわけはいま申しあげます。」と、アフタンジルはこたえた。「ただその前に、私がしようじきになにを申ししても、けっしておとがめにならないことを、おやくそくねがいたいのです。」

「よし、とがめないから、なんなりと試みてみなさい。」

「王さまはただいま、競技にかけては私にひけをとらない、とおっしゃいました。しかし勝負する前に自慢するのは、へたな選手にかぎりません。射撃にしろ、なんにしろ、優勝はわぎのすぐれたほうにあたえられるのが、この道のさだめです。」

「そのことばは気にいった。私はおまえの挑戦を受け、弓矢にものをいわせよう！ 審判役には二人の狩猟士を任命する。かれらにこの話の結末を見てもらおう。」

歌声をやぶって、どっと歓声があがった。王さまもうきうきとし、客たちもよろこんだ。

「命令する——負けたものは三日間、帽子をかぶらないこと。」と、王さまはいった。「それから十



二名の狩獵士は從者たちといっしょに矢箱を持っていき、たえず私たちに矢をわたすこと。かれらは獲物の数を公平にかんじようしなければならぬ。アフタンジルのけらい、シエルマジンなら、ひとりでもなんでもやつてのけられるのだが、ここにはないのはざんねんだ。」

王さまはさらにどれいたちに、夜明けとともに野原にけものどもを追い出すよう、また親衛隊の人々は遠巻きにけいかいするよう、いつけた。山のようにごちそうがならば、川のように飲みものがあふれたにぎやかな宴会は、これで一時、中休みとなった。

その日もくれて、あくる朝、はるかにあかつきの光がさしてきたころ、アフタンジルはかがやく金の帽子をいただいて、馬を城門にのりつけた。アラビア王も狩りのしたくに身をかためて、やはり馬にのってあらわれた。原のかなたには、けものを追いたてる勢子たちのやりがきらきら光っていた。騎士たちはときの声をあげ、口ぶえをならして、原をかけた。とび出したけものめがけて、八方から矢が飛んだ。

足のはやい野性のしか、ろば、やぎなどがむらがつて、めんくらつて走った。王さまもアフタンジルもつかれを知らない腕で弓をひきしぼった。獲物をねらった。まきあがるほこりが霧のように日の光をさえぎった。ふみあらされた草原は血に染まった。からになった矢筒は、すぐ從者たちによって補充された。けものどもは野のはてへ追いつめられた。野はまがりくねった川で終り、けわ

しい岩の岸辺のむこうは、馬では進めない密林につらなっていた。けものどもはこの密林に逃げこんだので、これで狩りは一だんらくとなった。「この勝負は私のものらしいよ！」

「獲物は私のほうが多いようですがね！」

王さまとアフタンジルとはたがいにそんなじょうだんをいいあった。

「さて、おまえたち。」と、王さまは狩猟士たちにいった。「この勝負、どちらが勝ちか、えんりよなしに申してみよ。」

「たとえおとがめをこうむりましょうとも、この競技、王さまの負けはだれの目にもあきらかである、と申しあげるよりほかはございません。アフタンジルが走りながら射かける矢は、一つもはずれなく相手にあたり、かならず一発で仕止めております。ところが王さまの矢は、私たちが地面から引きぬくのほねをおったのでございます。」

ロステワンはなさないような顔をしたが、心のなかではうれしかった。——わが教え子よ、よくぞ勝った！ これほどの腕まえ、世にならぶものがあるうか！

王さまも、アフタンジルも、従者や狩猟士たちも、川岸におりてくつろいだ。水にはいつてたわむれるものもあり、岩にこしかけて、森の景色をながめるものもあった。

とらの皮を着たふしぎな騎士

森のはずれの川岸で、泣いている男があった。そばには真珠をちりばめた馬具をつけた黒い馬が立っていた。男は見るとらにどうどうとした騎士で、上着のうえにまとったとらの皮、またとらの皮でつくられた帽子が、人の目をひいた。手にしたむちは手くびよりも太く、さきに金の彫刻のある柄がついていた。この騎士のほおを、あとからあとから涙が流れて、つららのように光った。

見知らぬ騎士は王さまの目にとまった。王さまは従者のひとりをやつて、かれを呼びむかえようとした。だが、川の流れをじつと見て、その黒い目から水晶の雨があふれている騎士に近づくと、従者はなにか気おくれして、ことばが口に出なかつた。

「もし、王さまのお召ですが……。」命令の重いことをかえりみて、従者はやつとささやいた。

聞えたのか、聞えなかつたのか、騎士は顔もあげないで、もの思いに沈んでいた。ここまでひびいてくる王さまの一行のにぎやかなさわざも、かれの耳にははいらぬようであった。従者はもう一度、声を大きくしてかれを呼んだ。しかし騎士は、もえさかるほのおに心を焼かれてでもいるかのように、ただその美しい顔をなみだでぬらすばかりであった。

従者の報告を聞くと、ロステワンのひたいはさつとくもつた。王さまは十二人の狩猟士、つまり弓の名人たちを呼んで、おごそかに命じた。

「武器をとつて、すぐ命令をはたせ！ その強情ものの目をさまし、ここへつれてこい！」
騎士ははじめて人々の近づくけいを感じた。かれはふるつと身ぶるいして顔をあげ、武装した一隊がせまるのを見た。かれははじめて、低くうなつた。

「しまった！」

かた手でなみだをはらうと、こしにさした剣と矢筒をなおして、馬にとびのり——人々の呼ぶ声を風にながして、あやしい騎士はいちもくさんにかけ出した。

親衛隊の兵士たちはかれをとりおさえようと、そのあとを追つた。だがあるものは地面にたたきおとされ、あるものは馬にけられ、矢を放とうとするものはむちでなぎ倒された。王さまは激怒して、新手の一隊をおくり出したが、これもかたっぱしから投げ飛ばされた。王さまは若いアフタンジルをしたがえて、みずからかれを追いかけた。

騎士はみるみる遠ざかった。その馬は伝説にある、つばさを持った黒い天馬のように、宙を飛んで、あつというまもなく、天にのぼつたか、地にもぐつたか、すがたを消した。

人々はいつまでも野のはてからはてに馬を走らせて、騎士のゆくえをさがした。人々は死者を悲



しみ、傷ついたものの手あてをした。

「せっかくの楽しみがだいなしになった。」と、王さまはいった。「私は心にいやしがつたい手傷をうけた。生涯のよろこびも毒された。これは神のおぼしめしなのであろうか？」

王さまは人々を集めて城にひきあげた。祝宴はとりやめとなり、客たちは散った。ふえやらつばの音はひびかず、ハーブやシンバルは沈黙した。ことのあらましを聞いて、チナチンは心配した。

「それで、王さまはおやすみになりましたか、それとも、なにかご相談でも？」

「ご寝所におはいりになったまま、悲しんでおられます。」と、役人はこたえた。「アフタンジルさまのほか、どなたもお近づけになりません。」

「ではあたしもおじゃましないことにしましょう。ただ、ちょっとお目にかかりたい、とだけ王さまにつたえてください。」

これを聞くと、王さまは役人にいった。

「私も娘に会いたい。あれなら私の悲しみを吹きはらってくれるだろう。私の心のいたでをなoshてくれるだろう。そしてこれからの毎日をおだやかにしてくれるようにしてくれるかもしれない。」

まもなくチナチンがあらわれた。くらい夜に月がのぼったように、へやの中はいつべんにあかるくなつた。

「おお、娘！ 私はきょう、ひどいめにあった。それもおまえの声を聞けば、かるく忘れ去るではあろうが、まあこういうわけだ。」と、王さまはくわしくあやしい騎士の事件を物語った。

「……この私にキスもせず、まるで悪魔のように消えうせた。夢か、うつつか、自分でもわからない。だれかに毒でももられたかのように、私は苦しい。私は人のわらいものになる。どうして、このままおめおめと生きていかれようか？」

「王さま！ そう思いつめてはいけません！」と、王女はいった。「人々をいたわる人に、なんの罪がございましょう？ 人々のために善をなす人に、なんで悪が手を出すでしょう？ もしこの世にそういう騎士がいるならば、だれかしらと会わないはずはなく、したがってかれをさがす道もあるはずです。またもしそれが悪魔のたぐいであるならば、そんなことでよくよするのはおろかなこと、きれいに頭からふりすてて、お気持ちをとりなおすことができましょう。そこでさっそく急使を八方へおつかわしになることです。かれらはやがて帰ってきて、その騎士がなにものであるか——人の子か、それとも遠い国の幽霊かを、ご報告するでしょう。」

宮廷の役人たちはロステワンの命令をうけとった。

「ただちに急使を八方へおくり、怪騎士のゆくえをつきとめよ！ どうしてもいけない諸国へは手紙を出して、返事を求めよ。」



急使たちは見知らぬ道々へと散っていった。いたるところで騎士をさがし、まる一年もさまよったけれど、かれのうわさをさえ耳にしたものはいなかった。急使たちはうかぬ顔をしてもどつてきた。

「申しあげます。」と、かれらはいった。「うえもかわきもいとわず、さがしましたが、だれひとり、とらの皮を着た騎士に会ったものはありません。たとえ会ったにしろ、私どもの力ではおよびません。どうぞかわりのものをおつかわしくくださいますよう。」

「なるほど、王女のいったことは正しかった。」と、王さまはいった。「悪魔がすがたをあらわして、私たちを悲しい運命につきおとそうとしたにちがいない。よし、気持をとりなおそう。王の顔にくらいかげがあつていいわけではない！」

いやな気分をはらいのけようと、ふたたび宴会をひらき、楽師や歌手や道化を呼んで、陽気にさわぎ、お客たちにはまたほしいものをいくらでも分けあたえた。

王女チナチンの秘密の命令

アタンジルはわがやしきにくつろいで、たてごとの糸をかきならしながら、歌を口ずさんでい



第10卷 第10章
第10回

ふいに王女の黒人の召使いが低くこしをかがめてはいってきて、王女がお呼びであることを告げた。

アフタンジルは夢かとはばかりよろこんだ。礼装を美々しくとのえて、宮廷に上がり、王女の居間へ案内された。

王女はてんの毛皮のマントをはおり、寶石かがやくかぶりものをいただいて、神々しいばかりに見えた。巻き髪がまつわる雪よりも白いうなじは、目にまぶしかった。アフタンジルは王女のすずめるこしかけにすわった。

「お目にかかれて、これほどのしあわせはありません。」と、かれはいった。「かがやく太陽に会えば、月も光をうしないます。あなたの前では、私の心はただあやしくみだれるばかりです。お氣にかかることでもあれば、なんなりとお命じください。」

「その氣にかかることで、おいでをねがったのです。」と、王女はいった。「あなたはふかい秘密をかくしておられます。あなたのお心には、あたしのおもかげがきざみつけられています。あたしはよくそれを知っています。しかし、ただいまから、あなたは二重の義務をはたさなければなりません。第一に、あなたはあたしたちの第一のけらいです。第二に、あなたはあたしの騎士です。すぐ、あのあやしい騎士をさがしに出発してください。あの狩りの日このかた、父の胸からは、一ときも

「がいい思い出が去らないのです。父は苦しみ、あたしの心も黒い雲にとぎされています。かれが悪魔でないかぎり、草の根をわけてもさがし出し、つかまえてください。あなたよりほかに、それができる勇士はいません。期限は三年。成功してお帰りになるその日こそ、生涯に二度とない、いちばんしあわせな日となるでしょう。すみれは咲き、道にばらをしいて、あたしはあなたをむかえます。あなたを夫と呼ぶのは、その日です。」

「そのおことばをいただいて、私になんのいなやがありませんよう？」と、アフタンジルはこたえた。「私はいまから永久にあなたのどれいです。私はすすんでこのいのちをささげます。あなたはかぎりないよろこびで私の心を見たくさいました。どんな星々よりも強いあなたの光に照らされて、私は世界のはてばてまでも、へめぐってまいります。」

ちかいのことばはひびき、ふたりの話はそれからそれへとつきなかつた。

別れのときがきた。別れはつらかつた。かれは去りぎわに、もう一度王女のほうをふりかえつた。やりを突きさされたように、胸がいたんだ。

「くれぐれもお忘れないように。」と、王女はいった。「これはあくまでも、あなたとあたしのあいだだけの秘密です。王さまはあのとおりのかたですから、もしあなたが出発するわけを知つたら、かならずおとめになるにきまつています。」

「はい、そのことなら、けっしてごしんばいにはおよびません。」とこたえて、アフタンジルは王女の顔をさがった。

——もうこれで、いつ王女に会えるかはわからない。それまでは真珠もルビーも光を失い、こはくはいっそう黄色くなるだろう。だが愛する人へのちをささげるのは、騎士道のおきてなのだ。その夜、かれのまふたはよく合わなかった。うとうとと王女のすがたを見て、さめれば二十倍に悲しさがこみあげた。みじかい夢のあいだにも、なみだはほおをあふれおちた。

夜があけると、かれは身じたくをととのえて、ロステワンの城へ急いだ。役人の手をへて、アフタンジルの書面が王さまにわたされた。

《王さま！ 将官や兵隊がこしにさしている剣はなんのためでありましょう？ それはうらぎりを罰するためであります。いま、まわりの国々はざわついています。それらの国々の王に、よくこのことを知らせる必要があります。そのために私はまわりの国々から、さらにそのさきさきまで、くまなくめぐってまいろうと思います。私はいたるところに、チナチンのおん名を高くあげるつもりです。剣をとってはむからものはこらしめをうけ、おだやかにしたがるものは父のおめぐみがそそがれるでしょう。みちみちも急使をさしたてて、報告とみつぎものを、おとどけいたします。》

王さまはこれを読むと、すぐアフタンジルを呼び出して、かれに門出の祝福をあたえた。

「おまえに敵するものはあるまい。おまえはライオンのようにはしこくて、強い。おまえの知恵はわき出る泉のようにゆたかである。元気でいっておいで。ただ、できるだけ早く帰ってきて、私たちにいつまでも別離の苦しみをなめさせておかないように！」

「そのように過ぎたおほめのおことばには私ははなれておりません。」と、アフタンジルは低くおじぎした。「もし私のいくさきさきさが王さまのご威光で照らされてあれば、私はかならずぶじにたち帰り、ふたたび王さまにお目にかかることができるでしょう。」

愛するわが子にするように、王さまはアフタンジルをだいて、キスした。アフタンジルは城をあとにした。王さまは目になみだをたたえて、そのあとをいつまでも見おくっていた。

アフタンジルは大国の光榮と軍の將たるほこりをもつて、チナチンのおもかげをあかるく胸に抱きながら、二十日のあいだ、夜もねむらず、昼も休まないで、ただひとりあちこちに馬を走らせた。ついにかれは祖国の国境に、おのが領地にたどり着いた。人々はこぞつてかれを出むかえ、数数のおくりものをし、宴会にと招いたけれど、かれは道を急いで、ほかのことはかえりみなかった。ただ城には三日だけ滞在した。それは天然の要害をなす岩山の上にたてられて、国のまもりとなっている城であった。かれはそのあいだ狩りを楽しみ、忠実な部将シエルマジンと話すことをよろこんでいた。シエルマジンはあるじと同じくらしい年配で、あるじの信頼にあたいするりっぱなさむ

ちいであつた。

「シエルマジンは、はずかしいことではあるが、きょうはすっかりおまえにうちあけるよ。」と、アフトンジルはいった。「いままではどんなことでもおまえにかくしておいたことはなかった。だが、ひそかに流す涙だけは見せなかった。いま、そのおかたはやさしい心をひらいて、苦しんでいる魂をおすくいなされた。のぞみの光は見え、私の気持はほのぼのとあかるくなった。そのおかたはこうお命じになつた。

《国々をへめぐつて、矢のように飛んで消えたそのあやしい騎士をさがすように。そうすればあたしはおまえを愛する夫にえらぶであらう。》

王さまの命令にしたがうのは、部下の第一の義務。あるじに忠実につかえるのは、けらいのつとめ。どんな攻撃も、どんな敵も、おそれてはならない！ おまえは私にいちばん身近い人々のひとり、しかもおまえいじょうに信頼するものはいない。これだけのことはくれぐれもたのんでおく、——私の土地、軍隊、そしてこの城をいっさいおまえにまかせるから、よくこれをまもり、戦いがおこつたときは親衛隊を指揮するように……」

シエルマジンは目をしばたいて、あるじの顔を見た。それには気がつかないふりをして、アフトンジルをつづけた。

……いいか、部隊長たちには命令をくだし、王さまには報告を出し、私には手紙を書いて急使をおくるように。なにごとにも勇気を失ってはならない。戦いするときでも、また狩りのときでも、私のことを思い出して、私に見なうことが必要である。ただこの話はかたく秘密にしたままで、三年待て。あらしがポブラをおらなかつたら、私は帰ってくるだろう。帰ってこなかつたら、その日を命日に供養をなし、王さまには私がお目にかかれないこと、不運のさかずきを飲みほして、私が異国の土になったことを、申しあげてくれ。それから貧しい人々には、金、銀、銅の財宝をおしみなくめぐむように……神の前では司祭者となり、私の子どものころを思い出して、母のように、ねんごろに回向をたのむ。」

聞いているうちにシエルマジンの顔は苦しげにゆがんできた。かれは胸をしめつけられて、思わず大つぶのなみだをはらはらとおとした。

「あなたにおきざりにされて、どうして私にくらしていきましよう？」と、シエルマジンはいった。「しかし、どんなにおねがいしても、もうあなたをおひきとめすることはできません。あなたにかわって国をおさめる？ なにごとでも、あなたに見なうてやる？ そんなことが私にできるでしょううか？ いいえ、とても、とても。そのくらいなら、私は地下に横たわるほうがましです。どうぞ、私をいっしょにつれていってください。どこまでもおともすることをお許しください！」





「これはもうきまつた話、兄弟のちかいのように、したがわなければならぬのだ。」と、アフタジルはこたえた。「もともと愛のほのおに巻かれたものは、ひとりぼっちでいくのがならぬ。美しい真珠のためには、それ相当の代価を支払うもの。不信と邪悪の心にはやいばが突きさされよう！ あるじの秘密をまもること、それはけらいの大きな名誉というもの。しかもおまえには私にかわってどんな仕事でもする力がある。敵軍を追いはらって、王国のまもりをかためるように。おそらく私は帰ってくるだろう——ほんのすこしのあいだ待つだけではないか。不幸がくるときは、ひとりであろうと、百人であろうと、同じこと。私はひとりでも不幸にうち勝ち、戦いには、ひるまないつもりだ。ただ三年たつてももどらないそのときには、世になきものと思ってくれ……ともあれ、きょうからは、貴族も軍隊もすべておまえに属するのだ。」

アフタジルの遺言

アフタジルは書いた——。

「熱心につとめにはげむわが家の子たち、教師たち、わが親しき友に告げる！

諸君はわが道、わが思想に、かげのように離れられない人々であった。わが城に集まって、この

書面を聞いていただきたい。

まるで無から有が生ずるかのように、ふいに思いついて、私は遺言状を書いた。この遺言状は私の運命をきめるものである。豪華なうたげよりも、愉快な競技よりも、なおさすらいの旅をよしとえらんで、私はここを去る。私にしたがうものは弓と矢だけである。

私はロステワン王とその国土とをあとにする。私は一介の巡礼のように、遠い国々をさまよい歩く。私は諸君を心から信じ、わが王国が敵のかかるとにふみにじられることのないようにと、ただそれだけをいのる。

わが領地はシエルマジンにまもらせる。私がぶじに帰るか、土の下に横たわるか——かれはそれ待つであらう。太陽が花咲く庭をいつくしむように、かれはすべての人をいつくしみ、手でろうをやわらげるように、罪をおかした人を正すであらう。

私にかわる人は、私にとって兄弟よりもなお親しく、なおとうとい。私にと同様に、諸君はこの人に仕えなければならぬ。呼び出しがあつたときは、私をてほんに思い出して、勇気をもって出陣しなければならぬ。

三年たつてもなお私が帰らないときは、私のためにいっぺんの回向をおねがいする。書き終つて、巻きおさめると、アフタンジルは金のおびをしめて立ちあがり、別れのつらさをお



ししずめて、親衛隊の兵士たちを呼んだ。

「私の馬を引け！」

兵士たちは、狩りのおともでもするつもりで、あるじのあとにつづいた。

「もういい。城へもどれ！ 私は、きようはひとりでいってくる。」

アフタンジルはいつもとちがつて、おともをつれず、ただひとり、馬に拍車をあてると、まだ霧がけむっている草原を、あらしのようにかけ去った。

兵士たちはぼんやりとそのあとを見おくった。どうしていいのか、わからなかった。だれがかれに追いつくことができるだろう？ だれの腕がかれをつかまえることができるだろう？ 遠い旅の道で、敵の剣でもかれをおびやかすことはできないだろう。

日が沈むころ、側近の人々は狩りから帰ってきた。城にアフタンジルのすがたはなかった。あるじに会うよろこびは、しんばいと不安にかわった。かれをさがすために、足のはやい馬をえらんで、多くの人々が八方へかけ散った。

「ライオンさながらのおかた！ あれほどの大將にかわる人を、どうしておむかえすることができよう！」

これがだれの胸にもわいたうたがいであった。人々は草原のはてはてまでもさがしまわった。道

という道をのこらずしらべた。だが、すべてはむだに終つた。戦場できたえた将兵たちも、熱いなみだにかきくれた。

人々ががっかりして、みな城にもどつてきたところで、シエルマジンは会議をひらいた。かれは長い巻きものをひろげて、つらそうに目をおし、それから声をあげて読みはじめた。集まつた人はあるじの遺言を聞いた。服がやぶけるばかりに、胸をかきむしつた。

「アフタンジルさまのいない生活は生活ではない！」と、かれらはシエルマジンにいった。「しかし、かれが財産と城とをあなたにまかせたのは正しいことです。私たちはあなたのどんな命令にもしたがって、法の力を尊重しましょう。」

かれらはあらためてシエルマジンに敬礼して、臣下のちかいをたてた。

さすらいの旅路のはてに

へばらがこおる寒さにほろびたなら、なんと悲しいことであろう。

聖書を書いた人のひとり、エズラの詩のなかでは、そううたわれている。

祖国をあとにさすらいの旅に出た、ルビーのようなくちびるとポブラのようなからだをもったそ



人の苦しみは、ちようどこの詩のことばにあてはまる。

アフタンジルは野を越え、川を越えて、アラビア人の国をすぎ、外国へ進んだ。困難はとうてい語るも書くもできないほどであった。まつ毛は霜にあつたように、ほおにこおりついた。

——なぜ、このような苦しみにあうのだろうか？ 生きているよろこびも、ふえやことの音も、わすれてしまった……。

この世におさらばしようと、いくど剣をとりあげたか知れなかった。だが、そのたびにチナチンのおもかげが、かれの腕をおさえた。

——王女に会えば、私はまた幸福になれるのだ！

そう思つて、かれは氣をとりなおした。

——しっかりしろ！ まだ道は遠いんだぞ！

アフタンジルは自分をしかりつけて、またさきへ馬を進めた。遠い国々、見知らぬ外地をいくつかすぎていった。かれは注意してとらの皮を着た騎士のことを人々にたずねた。夜は砂漠で、手まくらしてねた。死ぬほうがずっと楽だ、などと考えるのは、そんなときであつた。

世界の道はつきた。アフタンジルははるかの空をながめた。この星々の下に、かれが通らない土地はもうなかつた。それなのに、かれの苦しみをとりのぞいてくれるその人には、ついに出会わな

かった。そのあいだに多くの年月はながれて、いまはやくそくの三年に、あと三カ月しか残って
なかつた。

それは地のはての砂漠の国であつた。だれひとり通る人もなく、空は気味わるいほど高かつた。
ただひとり、砂漠をさまようさびしさは、ファフル―テツジン・グルガニの詩へヴィスとラミン
にうたわれた、ヴィス姫とラミンの別離のいたましさにもおとらないものがあつた。

その夜のやどりをさがすために、かれは高い山にさしかかつた。山のむこうにはまだ砂漠がひろ
がつていた。この砂漠を通るには七日間かかる計算であつた。山のふもとには水のきれいな川がな
がれ、川がせばまって急流となるあたりの兩岸には、森がくろくろとしげつていた。

アフタンジルは森のはずれにすわつて、ゆびおりかぞえてみた。あとわずかの日しか残つていな
い。かれはがまんできなくなつて、泣いた。むなく過ぎ去つた三年近い年月が、いたいたしく思
いかえされた。なみだもかれるか、と思われたとき、ふとみような考えがうかんだ。

——なにか急にいいことがおこるのではないかしら！ ありそうもないことがふつてわき、善が
悪にかわるとういうこともある！ へんに胸さわぎするのはなぜだろう？

しかしかれはすぐ、そんなあてにならない考えを吹き消して、自分に聞いてみた。

——それよりも、これからどうするかを決めることがだいじだ。これで探索をうちきるか？ そ



それなら、なんのために三年近くもはてからはてへとさまよい歩いたのか？ いたずらに外国で月日をおくって、あやしい騎士だに見ないまま、なんでおめおめ、かのきみのもとへ帰ることができぬか？ それができなければ、探索をつづけるよりほかはない。よし、つづけよう。だが、もう残る日数がない。期限はきれようとしている。砂漠をひとりさがしまわっているあいだに、その日がきて、私が帰らなかつたならば、私の運命はたちどころにきまつてしまうだろう。シエルマジンがわるい報告を持って、ロステワン王の前にあらわれるにちがいない。私は死んだことになる。王さまはなげきのうちに喪を発し、私の運のつたなさをあわれんでくださる。そうなつたら、ますます帰れなくなるではないか？ しかもなんのおみやげもなく、手ぶらのままで！ ……。

考えれば考えるほど、かれの心はまっ黒なやみにとざされて、苦しみもだえた。

——神よ、あなたの審判は正しいのだろうか？ 私のさすらいの苦しみは、ほんとにむなしかつたのだろうか？ よろこびをうばい、心にふかく悲しみを植えつけた。それでもなお私のなげきは終るときがないのだろうか？

かれは自分に強くない聞かせた。

——どんな苦しみもたえしのべ！ 気おちしてはならぬ！ 悲運に負けて、死を急ぐのは罪である。よく考えるがいい。神なしで、創造主なしで、なにができるというのか？ ないものはない



JAPANESE LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO

——それが神意ではないか。かの怪騎士については、うわさすらも聞かなかった。私は空の下にあるものをのこらず見、いたるところへいった。もはやかれを見つけるといふ希望のかけらもない。悪魔がかりに人間のすがたであらわれたとき、これをカッジ（魔法つかい）といつて、人々はおそれた。カッジをつかまえることはできない。かれがカッジでなかった、とだれが保証するのか？

アフタンジルはまだ力が残っているあいだに、帰ろうと心にきめた。川をわたり、森をすぎて、また砂漠へ出た。日もとどかないほど、遠い遠い道であった。まる一カ月、生きた人を見ず、矢筒の矢を役だてる生きたけものも見なかった。

かれみずからが、そのけもののように日をおくり、夜をおくった。けもののように、うえにたえられなくなった。やつと野牛のむれに出合った。フィルドウシの詩《シャフ・ナメ》の主人公ロストム腕のように長い矢で、野牛をしとめた。アフタンジルはおおいそぎで、火打ち石をすって、たき火をおこした。そこには林があり、草があった。肉が焼けるあいだ、馬を草地にはなした。

かれはふとなにものかの近づくけはいを感じた。見ると、数名が馬にのつて、こちらへ走ってくる。

——強盗かもしれないぞ、——とアフタンジルは考えた。——さもなければ、こんな無人の荒野をうろろろしているはずがない。

かれは弓に矢をつがえて、ねらいをつけた。ふたりの男がぐったりした若い男をかかえている。若い男のひたいに大きな傷口があいていて、まだ熱い血潮がふきだしている。頭はがくりとたれ、顔はろうのように青ざめている。「待て、強盗めら。」と、アフタンジルはさげんだ。「なんの用があつてここへきた？」

「とんでもない、だれが強盗だというんです。」と、かれらはこたえた。「はやく助けてください。助けることができないうなら、せめて私たちに同情してください。いっしょに泣いてください。」

「いったい、どうしたというのだ？」アフタンジルはかれらのそばへいって、聞いた。「私たちは北中国のハタイのもので、三人兄弟です。国にいれば、国は大きいし、城はあるし、こんなひどいめにあうことはなかつたのですが……。」と、かれらはこども話でした。

「狩りの獲物がすくなくてこまっていたおり、ふとこのへんのやぶに、けものや鳥がたくさん集まっている、ということをやにした。兄弟はおおぜいの部下をひきつれて、川辺に野営の陣をまつた。うわさにたがわず、おびたしいけものがむらがつっていた。かれらは大よろこびで、野に谷に、矢のつづくかぎりけものを追った。狩りは三十日間も長びいた。」

兄弟の手なみは部下の兵隊たちもびっくりするほどすぐれていた。そこで獲物のかんじょうをする段になると、たがいにじまんをはじめ、はては、けんかしそうにまでなつた。



おれの腕まえがいちばんだ。』

『いちばんたくさんあたっているのは、おれの矢だ。』

『待て。』と、長兄がいった。『そんなことをいい争っていてもきりがない。たがいの腕まえをはつきり見せるのが早道じゃないか。それは別にむずかしいことではない。狩りのてだすけをする勢子たちをみんな帰してしまつて、おれたちだけで、じかにけものと一本勝負すればいい。』

しかの皮の上着をぬいで、一つにたばねて、それにたいして、兄弟はやくそくをした。このやくそくは神聖なものとされていた。やくそくができると、装備のせわをする従者三人だけを残して、あとの人々をぜんぶ、城へ帰した。

三人兄弟は三人の従者をつれて、森や谷間をかけめぐつた。まるで戦場のように、けものの血がながれた。鳥どもも、かれらの頭上をぶじに飛びすぎることはできなかつた。

かれらの目に、とつぜん、こちらへ馬をとぼしてくるひとりの騎士がうつつた。馬は黒毛で、足なみはながれるようによどみなく、のっている人の肩には、とらの毛がかかっていた。この人にくらべると、あかるい月さえ見おとりがした。目からは強いいなすまが出て、近づくにしがって、

いっそうまぶしくなつた。

兄弟たちは自分のほこりを傷つけられたように感じた。

兄弟たちは自分のほこりを傷つけられたように感じた。



《ぶれいものめ！》

そうさけんで、かれらは道に立ちふさがり、騎士をつかまえようとみがまえた。長兄は力ずくでおさえようとし、つぎの兄は馬にねらいをつけ、末の弟はまっさきに進み出て、体あたりをころみようとした。

騎士はおなじ速度でやってくる。水晶にルビーをちりばめたような顔がはつきり見えてきた。見ると、騎士はなにかふかいもの思いに沈んでいて、兄弟たちには目もくれない。呼びかけには返事もしないで、そのまま人なき荒野へとぬけていく。

《ぶれいもの、逃げるのか！》

このするどいさげび声で、はじめて騎士はふりかえり、おどすようにむちをあげた。末の弟はいのち知らずの若者であった。かれは見知らぬ騎士に追いつがって、さっと剣をつき出した。

《待て、といったら、待たないか。》

剣は相手にとどかなかったが、そのとき風をきって、むちが鳴った。末の弟のひたいから、まっかな血潮がほとばしった。かれは馬から地面へころげおちた。騎士はこれになんの注意もはらわず、ふたたびもとのしせいにかえって、みるみる荒野を遠ざかっていった……。

《……まるで、太陽か月のように、すこしも道をかえないで、ただ一直線に走っていきました。そ

のあとが、ごらんのようなありません。」と、ハタイの兄弟はその話をむすんだ。

この話のあいだに、アフタンジルの目の前には、かがやかしい顔をした騎士に黒い天馬のまぼろしが、あざやかにうかんできた。長い年月、世界じゅうをめぐるあるいたことはむだではなかった！ ついに、秘密の目的を達することができるとすれば、いままでの苦しみも、朝の霜のようにとけてしまふにちがいない。

「お話を聞いておどろいたが、じつは私は、その騎士をさがすために、自分の国をあとにしてきたものです。」と、アフタンジルはいった。「そのために、長いあいだ、知らぬ他国をさまよい歩いてきました。それをいま、その騎士のゆくえをあなたがたは私に教えてくださった。これは神の助けともいうべきものです。だから、私にと同様に、あなたがたにも神の助けはあるはずです。この若い弟さんの上に光をそそいで、やみを追いのけてくれるでしょう。ここは涼しくて、安らかな場所です。傷ついた人をゆっくり休ませて、気力をもどしてあげなさい。」

洞窟の出会い

アフタンジルはハタイの兄弟たちに別れを告げると、馬にとびのり、拍車をあてた。馬はいまし



の綱からとき放されたたかのように走りだした。遠く日がさす方へむかつて、いっさんに走った。アフタンジルの胸の苦しみは、火が消えたように、しずまった。

——しかし、——とかれは考えた。——どんなふうに見えたらいいのだろうか？ へたなことをいったら、あの人間ぎらいの男をおこらすにきまつている。どうしても知恵をはたらかせるよりほかはない。じつとしんぼうして、理性にしたがうにかぎる。だが、人の目から身をかくさなければならぬ。わけがあつて、あくまでもひとりぼっちでいるというなら、おたがいのうちとけることはできない。私がかれと会うことは、もはやさげられない運命である。私がかれを粉みにんにするか、かれが私をうち殺すか、どちらかであろう。いずれにしても、私の苦しみはむだではなかつた！ かれに会えば、すべてがわかる。かれがどんな人間であるにせよ、おそかれ、早かれ、とちゆうでひと休みはするであろう。たとえ風を追い越し、あるいはかべにかくれようと、神よ、かれを私からひき離さないでください！

こうしてアフタンジルの騎士を追跡した。二日二夜、ひとねむりもせず、飲みもせず、食べもしないで、したがって一分間の休みもなく、かれは野原をかけていった。

日の暮れ近く、高い山のふもとにつきあつた。大きい岩の洞窟が見え、下には川がながれていて、川岸には、すぎの森がこんもりとしげり、木々のいただきは雲にかくれていた。

アフタンジルは木々の枝をかきわけて、浅瀬をわたり、馬をつないでから、ひとりこつそりと洞窟の方へしのびよった。そこに葉のしげったふといすぎの木が立っていた。かれはこの木によじのぼって、ようすをうかがった。騎士はまっすぐに洞窟へ馬をむけていた。

騎士が洞窟の前に着くと、中から黒い服の娘があらわれた。やはりうれいに沈んだおももちで、目にいっぱいなみだをたたえていた。騎士は馬からおりて、やさしく娘の肩をだいた。妹でもいたわるようなふぜいであった。なみだで傷口がなおったかのように、やがて娘は氣をとりなおして、馬のたずなをとり、騎士から剣や弓をうけとって、洞窟の奥へ消えた。騎士もそのあとを追った。そこにはもうこいやみがたちこめていた。

アフタンジルは木の上から、このしじゅうをすっかり見とどけた。

——なるほど、なにかふかいしきいがあるらしい。これはもうすこしようすを見なければなるまい、——とアフタンジルは考えた。

夜があけると、娘は洞窟から出てきて、黒馬に水を飲ませ、馬具をつけ、くらをおき、すっかりしたくをととのえた。騎士がこのかくれ家に一日もじつとしてはいられないのだ、ということがわかる。

騎士は娘をだき、キスして、馬にまたがった。やみを照らす光のように見えた。そこから、いと

すぎのようなおいが風にのってただよつてきた。ライオンがやぎをおそうように、かれはライオンをもち負かすことができるだろう……かれは木のしげみをわけて、野原にむかい、きのうの道を引返していった。

アフタンジルは自分の目を信ずることができなかった。

あなたはむずかしい仕事に私を助けてくださった！——と思わず神に感謝した。——思いもかけぬ幸福をめぐんでくださった。さつそく、あの人間ぎらいな騎士の話を聞きださなければならぬ。それには自分のことも話して、あの娘の同情をひき、かれと会うのに剣をふるわなくてもすむようにしなければならぬ。

アフタンジルは草原にはなしておいた馬にまたがって、大きな岩のあいだに口をあけている洞窟へ近づいた。騎士がもどってきたものと思つて、中から娘がむかひに出た。そこには見知らぬ男が立っていた。娘はおどろきのさけび声をあげて、くるりと中へ引返した。アフタンジルは、追いつがつて、小鳥をつかまえるように、娘をとらえた。ひめいが大きいこだまをかえしてひびいた。わしに見こまれたはどのように、娘ははげしく身もだえした。

「タリエール！」怒りにふるえて、娘は助けを呼んだ。

アフタンジルは娘の前にひざまずいて、けつして悪いことをするものではない、とねっしんに

いった。

「おちついてください。私も人の子です。この世をひっくり返した人をさがしに出て、やっとそれを見つけたものです。泣いたり、さげんだりしないで、どうかあの人のことを話してください。」

「きちがい。」と、娘はこたえた。「あなたとあたしになんの関係があるの？ 世の中がひっくり返ったのなら、あなたのばかな知恵でたてなおしたらいいじゃありませんか。ことわっておきますが、あの人の秘密を知ることが、あなたにはぜつたいにできません。あたしに話させようとして、むだです！ あの人の苦しみは、口にも筆にもうつすことはできないのです。泣くよりは、笑うほうがいいにきまっています。それでもあたしは泣くほうを選ぶでしょう。」

「私のかぎりない悲しみを知らないから、そんなふうにおっしゃるのです。」と、アフタンジルはいった。「あの人がいなければ、私はふるさとをすてて、さまよい歩かなくてもよかつたのだ。こうして会ったからには、私は一歩もさがりません。私を信じて、秘密をうちあけてください。」

「ふしぎだわ、どうしてこの人はここにきたのだろう。」と、娘はつぶやいた。「いいえ、長話は無用です。あたしは短くおこたえます。秘密はうちあけられません！ 出ていってください。」

アフタンジルは手をついて嘆願した。だめだ！ にわかにはげしい怒りがこみあげてきた。かれは立ちあがる、娘の髪の毛をつかんで、その上に剣をかざした。



「もう一度私にむだなさすらいの旅に出て、益のないなみだをながせというのか。そんなむごいことがあろうか？　ここで真実を話してくださらないとすれば、もはやあなたを敵と見るよりほかはない。」

「おどして勝ちは得られません。」と、娘はいった。「またおゆるしになってもおなじこと。血を分けた兄のようなあのおかたの運命は、どっちみちだれに知られてもならないのです。ここで秘密をまもっているのは、もうせつばつまったはてのこと。さあはやく殺してください！　死ねばあたしも不幸から不幸へつづく旅からとき放されるというもの、かえって楽になるでしょう。あたしのいのちなど、わらくずよりもねうちがないのです。それにしても、あなたはどなたで、どこからきた人か——それがわからないで、どうしてあなたを信じることができましょう。」

アフタンジルはさとつた。まったく力づくで秘密を知ることができない。それには別の方法をえらぶ必要がある。ほおを涙でぬらして、うなだれた。

「おゆるしてください。女をいじめて、なんのいいことが、ありません。」

娘はしばらくだまっていてから、また急にたえかねたように泣きだした。あおざめた顔に、かすかにばら色がさした。アフタンジルは娘の気持がいくぶんでもほどけてきたように感じた。だがまだ不信の色はその顔からぬぐい去られてはいなかった。かれはひぎについて、しずかに話しはじめた。

「ごらんとおり、私はらんぼうな武士です。あなたにささげるものはなにもありません。あるとすれば、ただ私のま心だけです。私はだれからも見すてられて、ひとりぼっちのさすらい人、あなたの同情を得られないとしたら、もはや生きる道もないのです。」

娘は肩をふるわせて、ため息した。おどろきと怒りはしずまった。なにを見知らぬ男が語ろうとするのか、それを聞いてみるほどの心がまえになったように見えた。

「私は愛する人から、とらの皮を着た騎士をさがし出すようにたのまれたのです。その騎士は私には幽霊としか思われませんでした。しかし、たのまれたいじょうは、さがし出さなければなりません。なにもかもうちすてて、三年のあいだたずねまわりました。死か、生か、それはあなたのおことば一つにかかっているのです。」

「ふいにお会いしたとき、あなたは心に悪いたねをまきました。」と、娘はいった。「けれど、ともかくあなたはひとりの友だちを得ました。それはあなたの姉ともなり、妹ともなるでしょう。ただ、秘密の目的に進もうとするには、あたしのいうことに注意してしたがわなければなりません。さもないと、世界をのろい、名譽もなく身をほろぼすようなことになりますよ。」

「いま私はこんな話を思い出しました。」と、アフタンジルはいった。「ふたりの人が知らない土地を歩いていきました。すると、とつぜん、前の人がふかい井戸へおちたのです。うしろの人は、井



戸の上からのぞきこんで、

「へしつかりしろ！ いま綱をさがしてもどつてくるから、それまで待て。きつと助けてやるから！」とさげびました。

相手はだんだん木につかっけていきながら、それでも悲しげな微笑でこたえた、というのです。

「へもし、もどつてこなかったら、おれはいつたいどこへ逃げるんだ。」

私にとつても、たのみの綱はあなたひとりの手にあるのです。もちろん、なにごとによらず、あなたのおっしゃるとおりにします。けつして自分の力をおしみません。」

「そのおとばで安心しました。あたしの忠告をお聞きになれば、きつとさがしていたものを、さがしあてることができるとしよう。あたしたちと不幸を分けあうおつもりなら、いっさいがあきらかにされるでしょう。」娘はアフタンジルの目をじつと見ながら、語りついで。「とらの皮をまつつている人はタリエール、あたしはアスマートといいます。あの人ほど敵におそれられている人はなく、またあの人ほど世界じゅうをめぐるめぐっている人はないでしょう。食べものはあの人がつつてくる森のけもの、野の鳥です。あの人がどのくらいここをるすにしているかは、あたしにもわかりません。もどりましたら、あたしからよく話してあげます。きつといいお友だちになるでしょう。あなたは愛するかたにこのことをご報告できると思います。それまでここに足をとめていらつ

友情のちかい

アスマートがアフタンジルを親しい仲間と信ずるようになったころ、ある晩、浅瀬の水をはねかす音と、馬のひずめの音が聞えてきた。娘はかれを洞窟の奥のこいやみの中へかくした。

「がまんして、あたしが呼ぶときまで、かくれていなければなりません。」と、娘は注意した。「かるはずみなことをして、あの人間ぎらいな人をおこらせたいへんですからね。」

アフタンジルは矢筒の矢をそろえ、剣のつかに手をかけて、身がまえした。月あかりで見ると、ふたりはまたひとしきり悲しげに泣いてから、アスマートが馬のくらははずして、馬を洞窟の中へひいてきた。騎士がそれにつづいた。アフタンジルがうつとりと見とれるほど、りっぱな男ぶりであった。娘はとらの皮をしいてねどこをつくった。騎士はおもいたため息をついて、その上にすわった。またまつげのはじにきらりとダイヤモンドが光った。

アスマートは火打ち石をすって火をおこした。火は洞窟の中のやみを追いはらった。タリエールは火の方へ手をのばして、焼き肉をひときれつまんだけれど、すぐもとへもどした。胸がふさがつ

「どうなさいました？」と、娘は聞いた。「なにかまたありましたの。」

「どうなさいました？」と、娘は聞いた。「なにかまたありましたの。」

ろみはじめた。するとこんどは、なにかにおどろいて、うなり声とともに目をさました。

「いや、新しい話ではないがね。」と、タリエールはつらそうにこたえた。「おおぜいの兵隊をつれた王さまに会ったことがあるんだよ。狩りをするので、騎士たちがけものを追いたてていた。それを見ると、私はたまらなくなった。ただひとり、人目をさけて、まるでそのけものようにさまざまに歩く、自分の運命がなまけなくなつてね。馬をおりて、川岸の森の中に身をかくし、考えこんだ。あしたの朝まで、そのままじつと考えるつもりでね。」

「あなたは人間や人の話をきらいすぎますよ。けもの仲間になつて、それで身をほろぼしても、だれのためにもならないじゃありませんか。ですから、せめて同じさすらいの仲間を、信頼できる友だちをお持ちになつて、たがいに力になり、なぐさめあうことができたなら、どんなにいいかしれやしません。」

「いい話だがね。」と、タリエールは沈んだ声でいった。「しかし、私の病気をなおすような薬があるだろうか？ 天からおくられたのではなくて、私に友情をみせるような人間がいるだろうか？ なんにもかくさないで、悲しみを分けあうことができるような、そんなつらい運命の人間など、ほ

かにあるはずはないよ。私の苦しみがわかるような友だちといえは——この世の中に、おまえただひとりだ。」

「どうかおこらないうで聞いてください。」と、アスマートはいった。「あなたの苦しみをやわらげる人が、天からあたしにおくられたのです。きょうから運命はいいほうへとむきかわったのです。不幸となやみは終りました。自分のたちばを見いだすには、知恵が必要です。あなたは知恵を失つて、ほんとにけものみたいにおなりでした。毒の実をついばんで死ぬ鳥となるよりも、友だちと組んで、美しいものに目を楽しませるほうが、どれほどましでしょう。」

「どうもよくわからないが。」と、タリエールはいった。「天が私に親友となる人をおくった、とでもいうのかい。おかしいね。私を人なき荒野に追いやり、人なきこの岩あなにとじこめたのも、天の意志ではなかったのかね。」

「ませつかえしてはいけません。」アスマートは心をきめた。「じつは、あなたと友情を結び、ごいっしょに世界をめぐるう、というある騎士がいるのです。剣をぬいて決闘しないということをしちかってください。」

「ちかうとも。そんなありがたい人に、だれが剣などぬくものか。またあの人にもちかうよ、——あの人のためにこうして十年も苦しんでいるのだから。親友となり、どこへでもいっしょにいき、



この世の苦しみも楽しみもともに分けあうことをちかいます。」
アスマートはすぐアフタンジルを呼びにいった。

「ご安心なさい。いよいよ、目的に近づきましたよ。」と、かの女はアフタンジルの耳にささやいた。
ふたりの騎士はむかいあった。どちらが太陽か月か、見分けがたいほど、そろいもそろって、世にもめずらしいりっぱな騎士たちであった。ふたりは愛する兄弟のようにキスした。なかばひらいたくちびるのばらの中に、真珠の列が光った。ふたりはかたくだきあった。あおぎめていたほおがルビーの色にかわった。感動のあまり、ただなみだにむせぶばかりであった。

「もうなみだはたくさんよ。」と、アスマートはいった。「さもないと、せつかく出た太陽もくもつてしまいますわ。」

タリエールは新しい友の手をとって、自分のとなりにすわらせた。

「さて、おまえはだれで、どこからきて、どこへいくのかね。私もおまえにはなにか一つかくさないつもりだよ。」と、タリエールは聞いた。《おまえ》ということばづかいまで、もうすっかりうちとけたものであった。

「私はアラビヤ人で、国には自分の城も領地もある。」感動をかくさないで、アフタンジルはいった。「私は前に一度、おまえを見たことがある。野のはての川岸で泣いていたのを、おまえもおぼ



新編 浮城物語 第三卷 第三回

「見てゐるだろう。あのときおまえは呼び出しにこたえず、そのむちで野を血に染めてかけ去った。ついに王さまみずからあとを追つたが、おまえはカッジのように消え失せた。王さまはくやしさと悲しみにたえず、世界じゅうに追手をさしむけたが、なんにもならなかつた。そこで私が呼ばれた。呼んだおかたは王さまの姫君で、いまはアラビアの女王。このおかたの知と情はかねてから私をとりこにしてゐたのだが、私を呼んで、

「すがたをかくしたかの騎士の知らせを城にもたらせば、おまえのぞみをかなえてあげる。」といつて、その期限を三年とおきめになつた。それから三年近く、世界をむだにさがしまわつたすえ、はからずも、おまえのむちで頭をわられたハタイ人の兄弟に会い、はじめておまえのことを耳にしたのだ。」

「さつきもアスマートに話したことだがね。」と、タリエールはいつた。「そのことはふしぎによくおぼえてゐるんだよ。狩りを楽しむ人もあるし、なみだにくれる人もある。人によつて運命はさまざまだ。私は自分の運命のことで心が結ばれていたので、つい王さまをむごいめにあわせもしたのだらう。それにあの黒馬がまたたいへんなやつでね。空飛ぶ鳥よりもはやくはしる。あつというまにすがたは消えて、だれだつつかまえることはできない。ハタイ人については、罪はむこうにあると思う。道に立ちふさがつて、さききに出しをしたんだからね。むくいを受けるのはしかたがな

しかしおまえにはずいぶん苦勞をかけたものだね。この無分別ものをさがすために、どれほど長い困難な道をとおつてきたことだろう。」

「おまえにくらべれば、なんでもないよ。」と、アフタンジルはいった。「私は愛する人のことも忘れよう。つとめの義務もなげすてよう。生きるも、死ぬも、おまえといっしょだよ。」

「不幸な男に同情し、悲しみを分けあうという、おまえの心には、私はふかく感動させられる。だが、愛する人と別れていいものだろうか。それにかわるものをおまえにあたえることができるだろうか。おまえは女王さまのいいつけをかたくまもつて、私をさがしまわり、ついにこの岩あなを見つけた。しかし、私の運命について、話すことができるだろうか。おそろしい物語は私を焼きつくすにきまつている。」

「この人は、兄弟として、あなたのお話を聞くおつもりなのですよ。」と、アスマートはわきからいった。「もしいいさいを知つたなら、あなたとごいっしょにすばらしい宴会をひらくかもしれなじゃありませんか。天からさずかったものは、すべて美しいはずですよ。」

「そうだと。」と、アフタンジルはいった。「天からさずかった道は、おまえの太陽に近づくよう、おまえに力をかすことにある。」

「兄弟のちかいをたてたものは、自分をまもるために逃げないで、死の前ががんばらなければなら



1933年10月13日
1933年10月13日

「はい。では、聞いてくれ。その前に、アスマート。」と、タリエールは娘にむかい、「冷たい水をくんできて、私のひたいをひやしてくれ。いくぶんでもいたみがかかるようになるように。それでも息が絶えたらなら、土が私のゆりかごとなるように、地面にあなをほってくれ。」

タリエールはきゆうくつなえりのポタンをはずした。にわかには顔色がくもった。くちびるはふるえて、ことばにならず、こらえられないなみだがあふれおちた。

「私の愛する人をぬすんだのはだれだ。私の生活、私の希望をぬすんだのはだれだ。おお、うるわしい楽園のはこやなぎよ。おまえをきり倒したのはだれだ……。」

二、タリエールの物語

インド王パルサダン

七つの土地が集まって、大インドをかたちづくっていた。そのうち六つの土地はパルサダンという王さまの手ににぎられていた。それは諸王の上に立つ王といわれるくらい、勇敢で、お金持で、強い王さまであった。あたりの国々はみんなかれをおそれていた。

七つめの土地の領主はサリダンといって、これがタリエールの父であった。サリダンも戦いに強く、力は万人にまさっていた。かげであれ、おもてであれ、かれに打撃をあたえた人はいなかった。狩りがすき、あそびがすきで、つまらない日など一日もなかった。ただ国をおさめるのが重荷に感じられてきたし、いつそ国をゆたかにしたいと考えたので、あるとき、こういう決心をした。

——敵は手も足も出ず、うらぎりのおそれもなく、私の王権はゆるぎもしない。だからいまパル

サダンの臣下となつても、なんらはずかしいことはない。

かれはインドの首府に書面をおくつた。

《バルサダン王さま！ わが領地をあなたの手にゆだね、あなたの臣下となることは、私のかねてのぞみであります。忠節の名を後の世までものこしたいと思ひます。》

バルサダンはよろこんで、すぐ返事を出した。

《領主さま！ ご決心を祝福します。あなたを私と同じ権利のある君主としておむかえます。わが王宮においてください。親のように、あるいは兄弟のように、お会いしましょう！》

こうして領地はそのままに、アミルパール、すなわち軍部大臣にえらばれ、スパサラール、すなわち大将の称号をあたえられた。サリダンは王位をくだつて、バルサダンの臣下になつたけれど、まだそれほど年でもなかつたから、大将の権威をそこねるようなことはなかつた。

「あれは得難い大将だ。」と、よく王さまはいつた。「敵にとっては、かれは手のつけられない疫病神だよ。」

王さまには子どもがなかつた。それがバルサダンのただ一つのなやみであつた。そのころ、タリエールが生まれた。王さまはこれに目をつけた。

「この子を私のあとつぎにしたい。」と、王さまはサリダんにたのんだ。「私にも、いつどんなこと

がおこるか、わからないからね。」

王さまは生みの子のようにタリエールをかわいがり、王子のように教育した。教師たちはかれに英雄の道を説いた。いつしか、かれはばら色のほおをした少年に成長していた。この少年をなぐさめるために、しばしばとら狩りがもよおされた。「まるで楽園のはこやなぎのようにりっぱだ。」と、かれはいたるところで評判された。

その時分に、王妃が女の子を生んだ。王さまはよろこび、国じゅうがおまつりのようにさわいだ。王さまにはお祝いの品々が山のようにおくられ、王さまはまた人々におしみなく財宝を分けあたえた。

王女はダレジャン・ネスタンと名づけられた。タリエールは王女といっしょにくらし、いっしょに遊んだ。王女は幼いときから、晴れた日のようにかしこく、太陽にも月にもおとらないほど美しくかった。心のない、石のような男でなければ、かの女をわすれることはできなかつた。王女はもう大きくなり、タリエールは球技に長じ、ライオンをねこのように退治することができるとの年ごろになっていた。王さまは王女に位をゆずることにきめたので、タリエールは王さまのゆるしを得て、父サリダンのやしきに帰った。

バルサダンのいいつけによって、ネスタンのために塔が建てられ、宝石でちりばめられたのりか

こがつくられた。庭にはばら色の木の泉がさらさらとふきあふれて、塔へ涼しい風をおくり、香炉からは昼となく夜となく、かわいた木の皮のかおりがたちのぼっていた。王さまの妹、つまりネスダンのおばにあたるダワールという婦人が、王さまのたのみをうけて、かの女に学問を教えていた。ダワールは魔法使いの末亡人で、魔法ができるといわれていた。

このきらびやかな宮殿で、この美しい庭園で、ネスタンは春の空のおくりもののように花と咲いた。パレスチナのガバオン山にあるしゅろの木のように、すくすくとそだち、ダワールやふたりの侍女を相手に遊んでいた。その侍女のひとりアスマートであった。

タリエールは十六才の春をむかえた。王さまはますますかれを愛し、屋もはなさず、夜もやしきへ帰さなかつた。競馬や射撃では、かれは人々の目を集めた。飛んでいる鳥を射おとし、広場ではどんな遊びにも競技にも負けたことがなかつた。およそ、くつたくとということを知らなかつたが、ただ心の奥にはいつしか、王女のおもかげがふかくきざみこまれていた。

そのうち、タリエールの父サリダンは、いのちのさかずきを飲みほして、世を去つた。宴会と遊びごとの停止命令が出た。敵どもはおどりがたつてよろこび、王に忠実な人々はなげき悲しんだ。タリエールはまる一年、ひきこもっていた。すると、王さまの命令がつたえられた。

へわが愛する子、タリエールよ。いつまで悲しんでいてもしかたがない。やしきを出て、軍隊を指

揮せよ。おまえはきょうからアミルパール（武將）だ！

王さまはかれに指揮官の名と、世襲領地とをあたえた。かれは父の思い出をふりはらって、王宮にあがった。インドの領主たちは待ちかねたようにかれを出むかえ、わが子のようにキスした。おきてどおりに、奉公の仕事はもうきまっていた。かれはまだ年も若く、しんばいだったので、軍部大臣となることをしきりに辞退したけれど、王さまは聞きいれなかった。けっきょく、かれはこの重い役めをひきうけた。

美しい若木のなやみ

ある日、タリエールが狩りから帰ってくると、王さまはかれの手をとっていった。

「きょうは、おまえを王女に会わせてやるよ。」

タリエールは王さまとつれだって、涼しい庭にはいった。あまい声でさえずりながら、小鳥は枝のあいだを飛びまわり、ぼら色の木は木々のかげでやさしい音をたてている。塔のバルコニーの前には、ピロイドとしきの幕がさがっていた。

タリエールは王さまが長いあいだ王女をかくしていたことを思い出した。かれはいつになく、胸



「さわぎをおぼえた。王さまは重いにしきの幕をあけた。軍部大臣が狩りの獲物の鳥をネスタンに進呈する。」

侍女にむかつていう王さまの命令をタリエールは聞いた。

アスマートが顔を出した。かの女はビロードの幕をかかげた。タリエールはネスタンを見た。かれの胸をやりがさしつらぬいた。なにかあついほのおにつつまれた気持で、かれはアスマートに獲物をわたした。

王女がこのおくりものをうけたとたん、タリエールは気が遠くなった。からだじゅうの力がぬけ、足もとから地面がすつと離れていった。

人々のわめき声や泣き声が耳にはいつて、タリエールはわれにかえつた。船出を見おくるときのように、召使いたちがおおぜい集まっていた。かれはふわりとしたねどこに横になっていた。それを上からのぞきこんで、高官たちは泣き声をあげ、近親の人々は血が出るほど、ほおをこすっていた。「かれはサタン（悪魔）にとりつかれたんですよ。」と、医者たちはいった。

タリエールは目をあけた。それを見ると、王さまは奇蹟がおこったようによろこんで、かれをだいた。

「おお、わが子よ、よく生きかえつてくれた。」

しかしタリエールはことばを口にするだけの力はなく、熱病にうたれたように、またがっくりとたおれた。心臓だけに血がたぎりたっていた。

医者たちはタリエールのねどこをかこんで、サタンを追いはらうお経を読みはじめた。しかし三日三晩たつても、かれはねむりからさめなかつた。

「よほどたちのわるい悪魔だ！」と、医者たちは診断した。「魂の中までくいこんだとも見える。これでは薬のほどこしようがない。」

四日めにタリエールは意識をとりもどした。かれは神にいのつた。

——心の苦しみをのぞき、なやめるものにすくいをたれたまえ！ 病めるからだをなおし、かれにまた力をあたえたまえ！ 秘密があらわれたらたいへんですから、はやく王宮からひきさがるところができますように！

高官たちはかれの健康を見まもり、王妃みずからかれの食事をこしらえ、王さまはほかの仕事をしおいても、かれの見まいにかけつけた。こうして病気がかるくなると、タリエールはすぐ王さまに申し出た。

「もうすっかりよくなりました。また自由に川岸へ、野原へいってみたいとございます。」

かれは王さまにおくられて川岸へいき、そこから引返して、わがやしきへむかつた。王さまとは、

やしきの前で別れた。ひとりになると、また胸がきりきりと痛んだ。顔色はサフランよりもまだ黄色くなった。

とつぜん、門番の大声が聞え、王宮から使者がきたことを告げた。タリエールはどきつとした、
「こんなにはやくお呼び出しとは、なにごとだろう？」

「アスマートさまからの使いです。」と、使者はいつて、手紙をさし出した。

ふるえる手で封をきつて、急いで読みくくした。《王女さまがお呼びです。》というかんたんな文句であつた。かれはおどろいた。あんなまずいさわぎをおこした自分が、愛のほのおに火をつけたなどとはとうてい信じられなかつた。だが、だまっていたら、そのふれいをおとがめになるだろうし、そうかといつておそばに飛んでいったら、どんなはずかしい思いをするかもしれない。かれは考へたすえ、からだがなかつたらうえで、お目にかかりたい、と、ていねいな返事を書いた。

日はすぎていつた。心のいたみはひどくなるばかりであつた。医者たちはかれをはなさなかつた。どんな薬もききめがなかつたけれど、それでも医者たちはこの苦しみをあたえた人がだれであるかをおしはかることはできなかつた。

バルサダン血を出す治療をするようにすすめた。タリエールはほんとの病気をかくすために、このすすめたにしたがつた。ベッドに横になって、両手をしばられているときに、またアスマートの手



紙がとどけられた。

——なんとせっかちな！ いったい私にどんなご用があるのだろう？ 私には軍隊を指揮する責任がある。なおれば、その仕事にとりかからなければならぬ。万一、心の秘密があらわれたら、私はもうこの国で生きていることはできない、——そう考えながら、タリエールはまた返事を書いた。

「おそばにあること——これが私のもぞみでありますから、ベッドからおきあがり下さい、参上いたします。おうたがいをお晴らしく下さい！」

バルサダンからは、血を取ったかどうか、からだの調子はどうか、とたずねてきた。

「わるい血をとって、たいへんよくなりました。もうじきお目にかかれることを楽しみにしています。」と、タリエールはこたえた。

かれは王宮で王さまや高官たちにむかえられた。回復祝いのたか狩りがもよおされた。たかが放されてしゃこなどを追い、射手たちはときの声をあげて走りまわった。かれは馬にのることは許されたけれど、弓矢をとることは禁じられた。

そのあとが宴会となった。歌と音楽は夜が ажけるまで絶えまなくつづいた。バルサダンは貴重な宝石をみなに分けあたえた。召使いや猟犬にいたるまで、おくりものをいたただかないものはなかつ

タリエールはやしきに帰ると、またお祝いの人々にとりまかれた。ここでも宴会がひらかれた。

すると、門番がおおいそぎでかけつけて、かれの耳もとにささやいた。

「見知らぬ婦人が大臣にお目にかかりたいと門の前で待っております。お顔はヴェールにかくれてわかりませんが、その気品の高いこと……。」

「すぐお呼び申せ！ 居間で待っているから。」

あるじのあわてたようすを見てとって、客たちはこしをあげて、いとまをつげようとした。

「どうぞ、そのまま。いますぐもどりますから！」と、タリエールは客たちにあやまって、居間へはいった。ドアの前にはたくましい召使いが番をしていた。かれは気をたしかにもとうとつとめたが、やはり足もとがふらふらした。

婦人が案内されてきた。

「お目にかかれて、こんなうれいことはございません。」と、こしをかがめて婦人はいった。「このようなおこないは、お嬢さまのなさることではありません。」と、タリエールはいった。「すこしお考えになれば、人目につかないように、できるはずです。」

「心配で、いても立ってもいられないものですから！ どうしてもあなたとだけお会いすることが

できませんでしたので、運命がこうしてあたしをおつかわしになったのでございます。あるじのいつけによって、おしてあがりましたことを、おとがめなさいませぬように……これがお手紙でございます。それはいつわりのないま心を申しあげるでしょう。」

タリエールと王女ダレジャン・ネスタン

「あたしの考えは、アスマートからお聞きになれば、おわかりになると思います。」と、ダレジャン・ネスタンの手紙ははじまっていた。「あたしはあなたを愛し、またにくんでいます。愛し、また愛される人は、のぞみを失ったり、なみだを流したりするものではありません！ あたしを感心させるような、りっぱなてがらをたてるほうが、どれほどましでしょう。いま、北中国の蒙古族、ハタイ人はわが国にみつぎものをしていながら、反逆をたくらんでいます。そのような許されるでしょうか？ なにをかくしましょう——あなたの妻になる、ということはおたしのかねてののぞみでした。厚いカーテンのかけからひそかにあなたを見て、あなたがなんのためにそんなに苦しんでおられるのかわりました。ハタイの国をやぶって、そのごうまんの鼻をへし折り、あたしのもとへ帰っていらっしやい！ なみだは禁物です！ 長雨がつづくとはらの花びらは散りま



す。あたしは太陽となつて、あなたのやみを照らしてあげたいのです。」

「あなたにふさわしいものとなる幸福を神がめぐんでくださいますように……それは半死半生の私にとつて、ゆめのような救いです……」と、タリエールは返事を書きだしたが、すぐ筆をすてて、アスマートにいった。

「とても自分の気持を書きあらわすことができない。ネスタンに伝えてください——あなたは、おことばどおりに、太陽のようにやみを追いはりました、と。死んだものに生命と希望と意識とをかえしてくれたのです。私は自分の生涯をかの女にささげます。そのほかにはどんな栄華もいりません。」

「他人の目をおそれ、お会いになつても、けつしてそれをひとにもらさないように、とネスタンのご注意でした。」アスマートは声を低めていった。「そのかわり、あたしがおふたりのたてになりません。いつでもあたしの名をご利用なさいませう。愛を秘密にしておくことは、心をいつそう強く結びつけることになりませうから。」

タリエールはダレジャン・ネスタンのかしい忠告をふかく心にとめた。かれは、夜のやみに、いきなりま昼の太陽がさしこんだように、にわかには生き返つた。うれしさのあまり、アスマートにつばいっばいの宝石をお札にさし出したが、かの女は、自分のいれものにはもうはいらないから、

「宝石はもうたくさんですから、これを記念にください。」と、すこしどきまぎしながらいった。

タリエールは見ちがえるようにおちついて、宴会の席にもどり、席はずしていたわびをいって、客たちにおくりものを分けあたえた。うたげはいよいよ盛んになった。

その日のうちに、かれはハタイ王にあてた手紙を書いて、使者をおくり出した。

「インド王は強力です。かれに忠実なものは祝福されますが、うらぎりをたくらむものは罰せられるでしょう。善にたいして、悪でむくいるという法はありません。いそぎわがきみの前に出て、身の潔白を証明しなさい。さもないと、反乱した国はほろぼされ、あなたはご自分の血でうらぎりのつぐないをしなければなりません。」

タリエールの胸を焼いていた火は消えた。宴会の席に出て、愉快にその気分ひたることができようになった。ただときどき、ふつとばかされたような気持が心をかすめた。大きなぞみがかなったことが、うそみたいに思われた。どこか遠くへ逃げていきたくなったり、この世をのろつたりした。

ある日、王宮からやしきへ帰ってきて、なやみをなおすようなアスマートからのたよりをいろいろ読みかえしていると、ふいに召使いにささやく門番の声が聞えた。

「アスマートさまからのおつかいです。」

タリエールは手紙を見た。王女がお会いする、との文句である。とび立つ思いでしたくをととのえ、おともはひとりにして、王宮へいそいだ。

アスマートが胸をどきどきさせて待っていた。

「いよいよあなたの胸から、ふかくつきささったやいばをぬいてあげることができましたよ。」

と、かの女はやさしくほおえんで、ささやいた。「おちついて、ばらの花をこらんさない。」

入口の重いカーテンをかかげて、タリエールは一步王女のへやへはいった。パミール産のルビーをちりばめた玉座がまぶしく目を射た。ダレジャン・ネスタンがゆったりとそこにすわっていた。

王女の目は黒めの湖のふかさを思わせた。

タリエールは棒のように立っていた。王女もなんにもいわなかった。やがて王女はタリエールにやさしいまなざしをむけたまま、アスマートになにかささやいた。アスマートはタリエールの耳に口をよせて、

「帰りましょう、王女さまはご気分がわるいそうですから。」

タリエールはまっかになつた。アスマートとならんで退出しながら、考えた。

——天はなんとという道を自分に歩かせるのか？ なののために希望をあたえたり、またうばつた

「りするのか？ いったいどういう運命におとし入れようとするのか？ 庭に出ると、アスマートはいった。」

「なんにもご心配なさることはありませんよ。悲しみのまどをとぎし、よろこびのドアをあけなさい。ネスタンはただはずかしさに、ぼつと上気なさっただけですもの。」

「あなたは私の魂の医者です。どうかこれからもきれめなしにお手紙をください。」と、タリエールはこたえた。「どんなことでも、けっしてかくさないで。」

やしきに帰って、ベッドに横になっただけで、ねむれなかった。夜のやみが好ましく、朝の光がうとましかった。

そのうち、ハタイの国へいった使者が、みじかい返事を持ってもどってきた。ごうまんぶれいな文句であった。

「わが国はみかげ石のようにかたい。われわれはこしぬけ武士ではない。いかなるパルサダン王でも、われわれの主人となることはとうていできないだろう！ おまえは戦争でござして、われわれをほろぼそうとする。ハタイの国を征服しようとする。それは無法の欲というものだ。もつとかしこくなって、われわれに敬意を表するよう、心がけなさい！ ——ハタイ人の頭目、ラマズ。」

これは挑戦状であった。タリエールはハタイ人と戦うことに心をきめた。かれは王宮につめて、

軍勢を呼び集めた。兵士たちは遠くから、近くから、わが家をあとにして、よろこび勇んでかけつけた。その数は星の数よりも多く、丘や谷間にあふれるばかりであった。いずれも、よろい、かぶとに身をかため駿馬をそろえ、ホラズム（十二—十三世紀ごろの中央アジアの大國）製のががやく武器をおびていた。動作はすばやく、規律はきびしかった。

タリエールは陣營に高く黒と赤の旗をかがげ、夜明けを待つて出発するように命令した。そしていったんわがやしきにもどつたが、心はおもくとざされていた。

——王女と別れのあいさつもしないで、どうして出陣することができよう。こんな氣持で、思うぞんぶん戦うことができるだろうか？

おりよく、そこへアスマートの使者があらわれて、手紙をわたした。

《王女さまがお待ちかねです。すぐおいでください。しかし、けつして泣いたり、うなったりなさないように！》

タリエールはまた王宮へかけつけ、庭園の方へまわつた。アスマートは塔の入口のいつもの場所を待つていた。

「お月さまがライオンを照らそうと、しずかに待つておいでです。」と、かの女はほおえんでいった。タリエールは階段をのぼつて、広間にみちびかれた。まったく、広間いっばいに月がかがやいて

「はじめてお会いしたとき、あたしはなんにもお話しませんでしたね。」と、王女はいった。「あなたはひどくがっかりなさいましたが、じつはあたし、すっかりのぼせていたものですから、それでだまっていたのです。愛する人の前ではなにごともしこらえて、ひかえめでなければなりません。心で泣いても、顔では笑って見せるのがさだめです。けれど、いつまでも気持をかくしておくことはできません。それで、アスマートを通して、あたしの心をあなたにうちあけることに決心したのです。もうふたりの間は離れられないものとなりました。道は一つです。あなたはあたしをご自分の妻と思ひ、あたしはあなたを自分の夫と思ひます。うらぎれば、地獄におちるでしょう。どうか心おきなく戦いにでて、ハタイ人をこらしめてください。りっぱに勝利をおさめ、英雄としてがいにされることを信じます。そのうれしい再会の日まで、なんで自分をなくさめていたらいいのでしょうか? かたみとして心をあたしにあずけ、あなたはあたしの心を持っておいでなさい。これな

ら、おたがいにさびしい思いをすることはないでしょう。お墓がまっ黒な口をあけるまで、あたしはあなたのものですわ。」

「あなたにはずかしくない騎士として働くつもりです。」と、タリエールはこたえた。「もしうらぎるようなことがあれば、神は私を八つぎきにするでしょう。では、いつてまいります。ハタイ人の前に、私は勇敢なライオンとなってあらわれるでしょう。」

ちかいのことはとりかわされた。話はなかなかつきなかつたけれど、やがて別れのときがきた。別れはつらかった。しかし、ネスタンの心であかるく照らされて、タリエールは岩のようにがんじょうな男になっていた。

ハタイ戦争のてんまつ

「らっぱを吹け！ 勇敢なものは名譽のほうびをたまわるぞ！」
タリエールは号令をかけた。見るまに無数の軍勢は整列した。

「進め。」

軍隊は街道をさけて間道にはいり、ハタイの国をさしてまっすぐに進んでいった。インドの国境

を越えて、荒野にさしかかったとき、ラマズの使者にいき会った。

「いいところで会った。」と、タリエールは使者にいった。「バルサダンのひつじがハタイのおおかみをくだいてくれる、とおまえの王さまに伝えろ。」

使者はラマズからのおくりものをさし出しながら、目を伏せていった。

「わが国はあやまちをしましたが、どうかひろい心でおゆるしくださるるように、とのラマズ王のとばです。私もはいのちのせとぎわにきています。あなたがたがうらぎりを怒って、私もものちも財産もおとりあげなさろう、というのはまことにごもつともです！ しかし私もはインドにそむいたことを後悔しているのです。軍隊をつれないできてくださるなら、要塞や城のかぎをみんなおわたしいたします。」

タリエールは部将会議をひらいて、ハタイの使者の口上をうけるかどうかを相談した。

「あなたはまだ若い。」と、部将たちはいった。「敵はなかなかのくせもので、もう戦争のしたくはできているものと思わなければなりません。軍をすすめるにも、よほどの注意が必要です。ともかく、いちばん強い部隊をひきいて行ってごらんください。私たちは後についていますし、危険とみたらすぐかけつけます。もしハタイ人がほんとに後悔しているなら、その神にちかわせればよし、またうそをついたのなら、怒りをばくはつさせればいいでしょう。」

タリエールは会議の忠告にしたがって、ハタイの使者に返事をした。

「ラマズ王は信用できない人だが、せつかくの口上だから、軍隊は残しておいて、出かけよう。ただし護衛兵をすこしつれていく。よくおぼえておけ、いのちは死よりもありがたいものだぞ。いざとなったら、要塞もおまえたちを助けはしないから。」

かれは護衛隊として三百人の勇士をえらび、残る本隊には連絡と救援のことをたのんでおいて、ハタイ王と会いに馬を進めた。

三日たった。またハタイの使者と出会った。使者は王さまからのおくりものだといって、絹の着物をタリエールにささげた。

「平和なやねの下で、お客さまを心からおむかえするつもりでおります。王のことばにいつわりはございません。まだまだたくさんのおくりものを用意してあります。」

「そのごしんせつはありがたい。」と、タリエールはこたえた。「私はむすこが父に会うような気持ちで、ラマズに会うことにしよう。」

つぎの夜、部隊は森のはずれにテントをはった。またハタイの使者が数頭の駿馬をおくりものとしてとどけてきた。

「王はたいそうよろこんで、自分からお出むかえにありがとうございました。あなたのけらいとして、軍隊を

したがえて、お城へおともすると申しております。」

タリエールはハタイの使者たちをテントにまねき、じゅうたんをしいて、婚禮のつきそい人のように、ていちょうにもてなした。

ま夜なかごろ、王の軍隊をぬけ出してきたという、ひとりのハタイ人があらわれた。

「わが軍はひそかに合戦の準備をしています。あなたをうらぎることは私の良心がゆるしませんので、お知らせにまいりました。」と、かれはタリエールにいった。「私はあなたのお父うえに養われたいものです。そのご恩は忘れません。それで矢のように飛んできたのです。わるだくみはもうすっかり熟しています。だましうちのあみは張りめぐらされました。主力として十万の兵隊が集結しています。あなたの部隊の二倍の伏兵が待ち伏せし、一発のろしを合図に、旋風のようにあなたにおそいかかろうとしています。どんなに強くても、ひとりで千人にあたることはできません。よくよくご注意なさいますように。」

「よく敵の計略を知らせてくれた。おかげで私たちは助かるかもしれない。」と、タリエールはハタイ人にお礼をいった。「だがおまえはすぐ自分の隊へもどらなければならぬ。うたがわれたらたいへんだからな。もし私のいのちがあつたら、あとでおまえには山ほどほうびをあげるよ。」

かれは伝令兵を呼び、へとちゅうのどんな障害をものりこえて、当先発隊へ急ぎ追いつくべし。

という命令を本隊に伝えるようにつけた。

朝になると、かれはていねいにハタイの使者たちに行った。

「これから出発します。きょうはいよいよ王さまにお目にかかれるでしょう。よろしくお伝えください。」

半日ほどさきへ進んだ。運を天にまかせるかくごであった。見ると——はるかかなたに土けむりがあがっている。丘へのぼって、じっと目をこらした。

——ハタイ人め、わなをしかけてるとみえる。だがこちらにも一度ならず敵をやぶった剣もあれば、やりもある！

命令を聞きに、小隊長たちがやってきた。「諸君。」と、タリエールはいった。「ハタイ人どもは攻撃をくわだてている。われわれはこれをけちらし、かれらの罪を思い知らせてやらなければならぬ。君主のためにたおれるものは、天国で魂の祝福をうけるであろう。われわれにはたのもしい剣がある。なんでおくれをとることがあろう。」

《戦闘用意！》の号令がひびきわたると、兵隊はいっせいによろい、かぶとに身をかためた。騎馬隊は列をたてなおして、突撃のしせいをとった。これを見ると、ハタイの王はあわててまた使者をよこした。



それではせっかくのおやくそくがだめになります。どうしてまた急に武器をおとりになったのでしょう？ おだやかに話しあおうではございませんか。」

「おまえがたのわるだくみは、もうかくしきれないよ。」と、タリエールはこたえた。「インド勢を不意討ちしようとしても、その手にはのらぬ！ いっそ男らしく、堂々と勝負をけっしたらどうだ。」使者が引返すと、まもなく攻撃合図のろしがあがって、王の軍隊は動きはじめた。両側から伏兵がおそいかかったけれど、すでにこれにそなえていたので、インド勢を撃破することはできなかつた。タリエールはやりもちからやりをうけとり、かぶとのひさしをふかくおろして、猛然と合戦のただなかへ馬をのり入れた。敵はかれのやりに突きまくられて、数知れずたおれた。しかし本陣はびくともせず、列もくずれなかつた。

「あれは悪魔だぞ。」

ハタイ勢の中からそんなさげび声があがった。まったく、タリエールにぶつかったら、もうおしまいであつた。生きるのぞみはなかつた。かれは大将のひとりらしい男を馬からたたきおとしたが、とたんにやりが折れた。すぐ剣をぬいた……そのきれあじのみごとなこと！ わしにねらわれた小鳥のむれのように、敵の大将はちりぢりになり、人馬のしかばねは山をきずいた。タリエールはひとりひとりをいもむしのようにきりきりまいさせながら、敵の前衛部隊を二つもうちやぶり、追ひ

散らした。だが敵はすぐまた集まって、陣容をたてなおした。目にあまる大軍であった。タリエールはその中へきりこんだ。敵は血のながれにおぼれた。まっ二つにきられて、ふりわけ荷物のように、馬のくらからたれさがるのもあった。タリエールが進むところ、敵はあわてて道をあけるようになった。

やがて日もくれようとするころ、ハタイ勢の中から大きなさけび声があがった。

「しまった！ わが軍は天にさらわれたぞ！ 雲のように土けむりがあがったのは、インド勢がここへ押し寄せるのにちがいない。ひけ！ 退却だ！」

どらの音が、雷鳴のように、しだいに大きくなってひびいてきた。夜なかから、きょう一日じゅう、ひと休みもしないで、タリエールの部隊を助けにかけつけたインド軍の本隊であった。

タリエールは逃げる敵を追って、ついにラマズの本陣に追いついた。かれはラマズを馬からたきおとし、ぬきあわせる剣を自分の剣ではねとばして、おさえつけた。ラマズはかれの捕虜になった。

かけつけた本隊は敵軍を追撃して、馬上の指揮官たちをようしやなくきり伏せ、歩兵どもの逃げ道をたつた。こうして生きのこったハタイ勢はおおかた捕虜になった。捕虜はひとかたまりにして、番兵にまもらせ、インド勢は息を休めた。

おちつくと、タリエールはにわかには手傷のいたみを感じた。部将たちは、かれのまわりにより集まって、おそれを知らない大将の武勇をほめた。ほめることばが見つからなくなると、だいて、キスして、勝利を祝った。教師たちは教え子のたくさんな手傷にびっくりして、声をあげて泣いた。タリエールは部下の親兵を地方におくつて、みつぎものを集めさせた。こんどの反逆に加わったものは死刑にされた。多くの町はもう手むかいもしないで降伏した。

「みじめな虫けらになつたじゃないか。」と、タリエールはラマズにいった。「もんくもいわずに、くさりにつながれている。こうなつたらもう要塞や城を私の部隊にひきわたすほかはあるまい。さもないと、わが王さまにのちごいをしてもおとりあげにはならないよ。」

「私の名譽はかげのようになつてしまつた！」と、ラマズはこたえた。「私の部下の大将に命令を持たせて、町や要塞につかわそう。どこでも自由に占領しなさい。」

タリエールはラマズのけらいたちに自分の部隊をつけて、ハタイの国じゆうにおくり出した。地方の領主たちは服従をちかひ、城と財宝をあげわたした。タリエールは新しい領地を見まわり、「きょうからは、私の命令がおまえたちの法律になる。私は太陽だ、が、おまえたちを焼き殺しはしないから、安心するがいい。」と、住民にいった。

占領した土地の富ははかり知れないものがあつた。あとからあとから貴重な品物がさし出され

た。その中から、タリエールはいままで見たこともないみごとなシヨールと服とを選びとつた。どこでこういう織物がつくられたのか——それはだれにもわからなかった。布地はどんすでもなし、じゅうたんでもなかったが、しかもどんな上等のよろいよりもめがつんでいた。人々はため息して、この品物に見とれた。

タリエールはふしぎな織物をダレジャン・ネスタンへのおみやげにすることにきめた。バルサダン王には——かぞえきれないほどの戦利品！ 街道にはそれをほこぶ、らばとらくだのキャラバンがえんえんとつづいた。急使はタリエールの手紙を持って、王さまのもとへいそいだ。

《王さま、私はご命令をはたしました。ハタイ人は完全にやぶれました。報告がおくれましたことを、おとがめなさらないでください。たくさんのお戦利品をおとどけいたします。私たちをおびやかしていたハタイ王は捕虜になりました。》

勝利のうたげ

タリエールの軍隊は手むかうものをすべてうちやぶり、おびただしい戦利品を得た。らくだだけでとはとてもはこびきれないので、さらに牛のキャラバンを組んだ。そしてハタイの国じゅうをほこ



りやかに行進した。タリエールののぞみはかなくなった。

かれはインドに帰った。ハタイ王は一言もなく、おとなしいけらいのように、かれのあとにしたがった。

インド王バルサダンのよろこびはたとえようもなかった。王さまはみずからタリエールの傷にほろたいを巻いた。市外の広場は旗さしもので飾られた、たくさんのテントでうずまった。王さまはタリエールとならんですわって、かれの大きい名譽をたたえ、兵隊たちといっしょにさかずきをあけて、軍隊の勝利を祝った。祝宴は夜があけるまでつづいた。

朝、王さまのいいつけにしたがって、ハタイ王は王さまの前に呼びだされた。バルサダンはまだわが子をむかえるように、この二枚じたのラマズをむかえた。不信もうらぎりも、ここでは光榮であるかのように見えた。勇士の道とは、このようなものでもあろうか？ 王さまはラマズを自分のテーブルにまねき、はずかしめるようなことばや勝利をほこるようなことばを一つも口にしないで、うちとけて話した。やがて王さまはタリエールにいった。

「どうだろう、私たちにむかってふりあげた、うらぎりの剣をゆるしてやってはくれまいか？」

「神はどんな罪をおゆるしになります。」と、タリエールはうやうやしくこたえた。「あなたはこずるいラマズの首から、もうなわをはずしておやりになりました。」

「おまえは自分の領地に帰るがいい。」と、バルサダンはハタイ王にいった。「ただし、こんどもしうらぎったら、天罰はおまえにくだるだろう。」

みつぎものとして、毎年、ドラカン（大金貨）一万、ハタウリ（中国貨幣）一万、絹一キャラバンをとおさめることを命じた。それから従者たちをつけて、自由にふるさとに帰ることをゆるした。

ラマズ王はバルサダンの前に平伏した。

「おそれいりました。うらぎりの罪はどうぞお忘れくださいますように。今後、そむくことがありません。八つぎきにされてもいいとけません。」

ラマズ王はその部下の軍勢にまもられて、帰り道へむかった。

あくる朝、タリエールのもとへ王さまの手紙がとどけられた。

「ハタイ戦争のおかげで、長いあいだおまえと別れていた。そのときからまだ一度も私は親兵をつけて狩りに出たことがない。英気をやしないたいと思うから、さっそく王宮まできてくれるように。」

ならされたひょうどもは王さまの足もとでじゃれつき、たかどもはとまり木の上ではりきって、銅の小鈴を鳴らしていた。狩猟のしたくはもうできていた。タリエールが着くと、王さまは目を細くしてかれのすがたを見あげ、見おろした。



タリエールはさわがしい土地を平定して、がいせんしたのだよ。」と、王さまは、王妃をかえり見ていった。「おかげで身も心もはれはれした。そこでこのおりに、娘に王位をゆずる準備にとりかかろうと思う。タリエールはたのもしい勇士だから、一度娘に正式にひきあわせる必要がある。娘をおまえのもとまで呼んでおおき。あとで私もそこへいくから。」

一同は出発した。山のふもとにひろびろとした谷がひらけていた。狐犬とたかどもが野の鳥を追ってとらえた。気持よくつかれて、長い行列をつくって帰ってきたが、王さまはまだ終ろうとせず、ボール競技の選手たちを呼び集めた。

広場から、やねから、通りから、群集がタリエールを見ようとひしめいた。金銀をちりばめたかれのいでたちから、ぴかぴかと後光がさすようであった。人々はかれをほめることがたりないのにこまった。とりわけ、戦利品からつくられた美しいターバン（ずきんの一種）は人々の目をおどろかせた。

王さまは馬をおり、タリエールをつれて王宮へはいつていった。タリエールは広間へ一歩進むと同時に、立ちすくんだ。玉座には王女がすわっていた。あたりには家臣たちがぎっしりといながれていた。玉座から王妃がおりてきて、タリエールをむかえ、わが子のようにだいて、口にキスした。



敵にはいつも二倍にして復讐するように。」と、王妃はいった。

やがて酒宴がひらかれた。王さまは王妃とならび、タリエールの前に王女がすわった。たがいに相手をちらちらとぬすみ見するだけで、口をきくことはできなかった。飲みものも食べものもテーブルにあふれ、こんな豪華な宴会はいままで見たこともない、と人々はささやきあつた。エメラルドやルビーをちりばめたさかずきが光つた。どんなに酔つても退席してはならぬ、といいわたされていた。タリエールは王女を前にして、うつとりと心なごむのをおぼえた。なんとこの世はすばらしいのだろう、と感じた。

音楽がやんだ。王さまは立つて、目をかがやかせながらいった。

「タリエールよ、おまえははげしい戦いを勝利でかざり、私たちの名誉をあげた。わが国の人々がおまえをほこりとし、おまえを愛しているのはもつともである。私はおまえにこの世でいちばん貴重な織物をおくらなければならぬのだが、おまえの服はもうそれだけで、くらべるものがないほど美しい。だからそのかわりに、宝物百点をあげよう。」

バルサダンは楽しく、幸福であった。たえまない歌と、ハーブやリラの音の下で、宴会は日がかたむくまでつづけられた。ついに王妃は王女をつれて席をしりぞいたので、これを機会に人々は散りはじめ、まもなく宴会は終つた。



タリエールもしたたかに酔ってやしきに帰ってきた。まるでたき火の中に身をなげたかのよう
に、からだじゅうがほてっていた。そこへふいに門番があらわれた。

「ヴェールで顔をかくした婦人が、お目にかかりたいと申しております。」

タリエールはよろこんでかの女をむかえた。アスマートははいつてくると、うやうやしくおじぎ
しようとした。タリエールはもどかしげにそれをとめて、こしかけにすわらせ、息をはずませて聞
いた。

「なんのお使いです。愛のおことばのほかは、聞く耳を持ちませんよ。」

「わかってますわ。ですから、こうしてお手紙をおわたしするよう、あたしにお命じになったので
す。」

タリエールは王女ネスタンの手紙を読んだ。

「あなたは寶石のようにかがやいています。戦場からお帰りになって、いつそう強く、いつそう美
しくなり、あたしをおどろかせました。きょうからはひとりぼっちも、なみだも、もうおそろしく
はないでしょう。あなたのためなら、死もいといません。あなたがこの世を去るならば、あたしも
いつしよにやみの中へまいます。ほこり高きライオンとは、あなたのことです。あたしのほおは
花咲く春の庭のように燃えています。あたしはあなたのもの——信じてください、この心はほかの

だれにもあたえません。いぜんのあなたの悲しみを考えると、まったくうそみたいですよ。強い人はいたずらになみだなど流すものではありません。あなたは人々にうらやまれる勇士です。あたしをいつまでも幸福にしておくような、記念品をください！ ショールがのぞみです。このショールをあたしがかけたら、あなたにもきつとお氣に思います。そのおかえしに、あたしは自分の腕輪をさしあげます——今夜のことは永遠に忘れないでしよう！

手紙には、いままで王女の腕にはめられていた腕輪が添えられてあつた。タリエールはすぐそれを自分の腕にはめた。王女ののぞみのショールというのは、タリエールがいつも巻きずきんとしていたこいむらさき色の、ふうがわりのショールであつた。かれはこれを頭からはずして、アスマートにわたした。そして手紙の返事を書いた。

「お目にかかったとたんに、はりつめていた氣力はくずれ、美しさに目がくらんで、またも氣がへんになりました。一人まえの騎士があなたのどれいになることを、おゆるしく下さい！ しんせつにもてなしてくださつたあの宴会のいつときは、ながく私の心にきざみつけられています。おくりものの腕輪は、さっそく私の腕にはめられました。この胸のときめきをなんといいあらわしたらいのでしょう？ 私にはその才能がありません。おのぞみのショールをおとどけいたします。なおついでに、敵の土地で手に入れた衣装もおおくりします。どうぞ、この氣のくるつた男を



突きはなさないで、助けてください。あなたは私にとって、この世界に生きていくただ一つの道なのですい〜

手紙とおくりものをアスマートにわたしてから、タリエールは横になつて、目をとじた。とろとろとしたかと思うと、すぐネスタンの夢を見た。おどろいて目がさめた。いのちが夜のやみよりもくらくらしたように思われた。だが美しいまぼろしはもう二度とあらわれなかった。

意外なむこえらび

タリエールは王宮へ呼ばれた。かれはなにかいい話が待っているような気がして、いそいそと出かけた。王さまは王妃とおそろいでかれをむかえ、玉座の前にすわるようにすすめた。

「私も年をとつた。墓はますます近くなつた。いつおさらばするかもはかりがたい。」と、王さまはいつた。「知つてのとおり、私には男子がめぐまれなかつたので、インドの王冠をつぐのはネスタンのほかにはない。そこで王家のむこにふさわしい人物をさがさなければならぬが、この国をまかせるには、すべての点で私に似ていることが必要である。敵の剣におびやかされないように、政治にはかしく、戦いには強く、王国をまもつていける人物がのぞましい。」

「王子さまなしてこの世をあとになさることは、さぞお心のこりでごさいましょう。」と、タリエールはこたえた。「しかし王女さまは光あまねき太陽のようなおかたです。おむこさまをむかえれば、天はこの家族を祝福するにちがいありません。私に相談なさるまでもなく、王さまご自身でおえらびなさいませう。」

王家のしんせきの人々の話し声を聞いているうちに、タリエールの首はしだいにさがってきた。顔がまっさおになった。

——だめだ、なんというむごい運命のさばきなのか！

「では、ホラズム国の王子をのぞましいむこときめる。」と、バルサダンはいった。「まだほかに、かれにひけをとらないような候補者があるかね？」

この話はもうずっと前にきまっていたことだったのか、とはじめてタリエールはさとった。かれは絶望した。前途がまっくらになった。思いきって、自分のひそかなのぞみをうちあげようか、とさえ考え迷った。心は灰となつてくずれ、胸は冷えてかたまつた。

「ホラズム家の血筋は正しく、名誉も世界にきこえています。」と、王妃は念をおした。「しかもその王子は当家のむことして、はずかしからぬりっぱな人からなのですからね。」

じやまする権利のないことが、タリエールにはからだを八つぎきにされるよりもつらかった。か



これは王妃のことばにただうなずきながら、自分をなげきの底に沈めた。

バルサダンはホラズムの首都に大使をおくった。つぎのような手紙を持たせて、

「インドの土地は将来強いささえを必要としています。ところが当方には娘ひとりしかなく、これが後つぎの女王ときめられています。もしご子息をおゆずりくださるとしたら、これにまさるよろこびはありません！」

やがて大使は絹織物や色美しい衣装のおみやげを持って帰り、ホラズム王が承知したことをバルサダンにつたえ、手紙の返事をわたした。

「神は私の希望をおさしなされたのです！ 花よめの美しさの前には、朝日もその光を失うでしよう！」

それからホラズムへはたびたび大使がおくられた。かれらははやくむこどのをよこすようにとホラズム王にさいそくした。

タリエールは大きな不幸がいよいよ近づいてきたことを知った。ある日、市場からやしきへもどって、ベッドに横になると、剣をぬいて、じつとやいばを見つめた。絶えまない苦しみで、つかれきっていたが、やいばのさえた光は、なにかおそろしい運命のかべにかれを追い立てるように思われた。ちょうどそのとき、召使いが手紙を持ってはいつてきた。

「ポプラのようにすらりとした人があなたを待っています。すぐおいでください！」

タリエールは急いだ。なみ木のあいだを通って塔の前へ出ると、目を泣きはらしたアスマートが待っていた。タリエールはすぐその涙のわけをさとった。いつものかわいらしいえくぼを見ることのできないのがつらかった。アスマートはものもいわないで、ただほおをぬらしていた。かれはどきとした。もしや、という疑いとおそれが心にわいた。だがまもなくアスマートは涙をおさめて、かれを奥に案内し、カーテンをあげた。

ダレジャン・ネスタンを見ると、タリエールは苦しみも悲しみもわすれた。しかしいつものあたたかさは感じられなかった。かの女の顔からは月の光のようなつめたい光がさしていた。エメラルド色の服を着て長いすの上につき肩からはシヨールが流れて、ほのおのようにゆれていた。やっとなみだをおさえていた目が、はげしくかれにそそがれていた。それは岩の上からじっと見おろすとの目であった。タリエールはおそろしさに顔をそむけて、思わずすこし後ずさりした。

ネスタンは身を起した。目がきらきらと光った。なじるようなことが口をついて出た。

「あなたはちかいかいのことばを破るおつもりですか？ うらぎって、それをふみつけになさるおつもりですか？ それならば、あなたはきびしい天罰をうけなければなりません。」

「私になんの罪がありますか？」おどろいてタリエールはいった。「武士の名誉にかけて申しま



す。運命にしいたげられていることが、なんであなたをはずかしめることになりましょう？」

「おだまり！ ひきょうもの！ そんなにくじなしとは知らなかった！ まるでばかみたいにあなただまされていたかと思うと、あたしはくやしい。あなたはホラズムの王子があたしのむこにきめられたことをごぞんじです。ご自身、その相談にあずかったらうえ、賛成したのではありませんか。あなたはあたしたちのやくそく、あたしたちのかたいちかいをお忘れになった！ あたしはあなたを許しません。いつぞやあなたがこのバルコニーで気を失ってたおれ、医者たちが病気の原因をあれこれと案じていたときのことを、おぼえていらっしゃるでしょう？ あれもお芝居だったんですね？ 愛を感じたふりをなさったんですね？ さあ、お逃げなさい！ あたしだって弱虫はおことわりです。ついでにいつておきますが、あたしはどんな人にも玉座はゆずりません。外国人はどんな方法をもつてもインド王になることはできないでしょう。そうでないと思えば、それはあなたが自分で自分をあざむいてよろこぶというもの、あなたみたいなひきょうなかにふさわしいお考えというものです！ いまあなたは不幸な運命にしいたげられている、とおっしゃいましたね？ ばかばかしい。それならさっさとどこへでもいつておしまになればいい。さもなければ、魂と肉体とを別々にしておしまになればいい。たとえ地のはて、空のきわみをおさがしなさろうとも、あたしのような女を見つめることはできないものを！」

タリエールはなみだをおさえきれなかったが、このときやつと王女のことばをさえぎった。

「おしかりのことばから、また希望がよみがえり、愛するおかたのまなこから、また力がわいてきました。あなたと別れることになれば、私のまぶたはもう二度とひらかないでしょう！」

長いすのまくらべにコーラン（回教の聖典）があるのを見ると、タリエールはそれを手にとつて、神を、そしてネスタンを祝福した。

「あなたは太陽の熱で私を焼きました。だが神かけて、私は人をだますことのできない男です。私のことばに一片のうそだにあらば、私の上に、天もくずれおちよ！ 私は生涯にまだ悪事をしたおぼえは一つもないのです！」

王女はようやくなつとくしたらしく、タリエールにうなずいて見せた。

「なるほど、おまねきによって、私はご相談の席につらなりました。」と、タリエールはつづけた。「しかし、むごどのはホラズムの王子と、そうきまつていたのです。それに反対して、立ち去ることもできたでしょう。ただそうすると秘密がもれることになりすから、私は、同意のふうをよそおったのです。私はひそかに考えました。——「いったい王さまはなにをかんちがいされているのだらう。わが国は強大で、堂々と名誉をたもつことができる。外国人にたよらなくても、この私ひとりで王冠と領土をひきうけることができる。なんでホラズムの王子などをインドの玉座にすえて



いいものか。』ホラズムの王子を許さないとすれば、あなたとの結婚をじゃましなければなりません。それにはおもいきった手段しかない。私は自分にいました——《考えを一つに集めろ！おまえはみじめな気がいいになってはいけない、不幸に負けてはいけない！ どんなことになろうとも、ネスタンをホラズムの王子などの花よめにしてはならぬ！》

王女のほおにばら色がさし、微笑がのぼった。

「どうしてあなたをうらぎりものだなんていったんでしょね。」と、王女はいった。「あなたにはふた心もいつわりもないことが、よくわかりました。考えれば、勇気とひきょうとが結びつくわけはありませんもの。その勇気でもって、あたしの手と王冠をバルサダンにもとめ、あたしたちふたりで国をおさめるから、と申し出なさい。」

王女ははじめて自分のとなりにすわることをタリエールにゆるし、これからなすべき仕事について注意をあたえた。

「ただあまりいいそいではいけません！ なりゆきをじつと見つめて、それに調子をあわせていくことです。いま結婚に反対すれば、王さまはおこつてあなたをしりぞけるでしょう。おふたりの仲が悪くなれば、国は不幸におちいります。そうかといって、おむこさまが着けば、あなたから引きさかれて、あたしたちはほろびなければなりません。外国人たちはよろこんで、この国をさんざんに



荒らしまわり、国民はひどい苦しみをうけます。いいえ、ぜったいにかれらをこの国の主人とするとはできません。そこがむずかしいところですわ。」

「ホラズムの連中が着くまで、待たらどうでしょう？」と、タリエールはいった。「私がかれらのでたためな性分を知っています。こちらの骨のあるところを、いやというほど思い知らせてやりましょう。私の道をじゃまするやつは、いのちがいらぬやつです。」

「女らしい考えかもしれませんが、大胆な人はむだな血を流さないもの、と承知しています。

おむこさまには手をつけても、そのほかの従者たちを苦しめてはなりません。正義はかれ木にも花を咲かせます！ 軍勢の助けなしで、外国人を道からはらいのけなさい。ただし屠殺場の家畜のように、かれの護衛隊を殺してはいけません。それがすんだら、王さまに宣言しなさい——《外国人を私たちの上にいただくことはぜつたいにできません！ たとえ一円のはした金でも、外国人にはやりません。私には王冠にたいする権利があります。もしお聞きいれなければ、私は王さまにそむいて、都を焼きすてます！》と。あたしの愛のことは、父に知らせはなりません。父がおれて、話がまとまれば、しぜんにあなたをおむこさまに、とたのんでくるでしょう。そうすればあたしたちは晴れてインドの玉座へのぼることができます。」

王女のかしこい計略を聞いて、タリエールはふたたび力がもどってきたように感じ、敵をしりぞ

ける剣を思つて、胸が高鳴った。いとまをつけると、ネスタンはなごりおしげに呼びとめた。かれは一步ふみ出した。だがかの女をだく勇氣はなかった。

王女と別れ、アスマートとも別れて、帰つてくると、幸福を期待しているはずの心の中に、いゝようなない苦しみが重くのしかかっていることを感じた。タリエールはまるで断頭台に引かれる人のように、おぼつかなく足を運んだ。

ホラズム王子の死

まもなくホラズムの王子が到着する、というしらせがきた。むこにとつておそろしい危険なときが近づきつつあることを、知るや知らずや、王さまはたいそうよろこんで、にこやかにタリエールに話しかけた。

「これでやつと重荷がおりた気持だよ。どこに聞えてもはずかしくないりっぱな結婚式をあげよう。ほうほうに人を出して、金銀やすばらしいおくりものを集めさせている。けちけちないで、おもいきつて、はでにやろうじゃないか。」

むこどのは軍隊と従者をしたがえてやつてきた。バルサダンはおむかえの親兵隊をおくつた。ど

「でもかしくもきらびやかな兵隊でいっぱいになった。

「かねての手はずのとおり、広場にテントをはって、むこどのはじめ一同にゆっくり休息させるように。」と、王さまはタリエールにいった。

タリエールはむらさき色の絹のテントをはるように命じた。かれの軍隊は列を正して、ホラズムの一行をむかえた。

とどこおりなくバルサダンの命令をはたして、タリエールはいったんやしきにもどろうとした。なによりも、ひと休みすることが必要であった。ところが使者が後から声をかけて呼びとめ、アスマートの手紙をわたした。王女がすぐお会いしたい、という文面であった。

かけつけると、アスマートがうちしおれて待っていた。

「ずいぶん、おいさめしたのですけれど、お聞きいれがないのです。あたしの力がたりないばかりに、あなたをお助けできないで、申しわけありませんわ。」

中へはいった。王女はひたいにふかいしわをよせて、タリエールをにらみつけた。

「戦いを避けるおつもりですか？　こしがぬけて、ちかいをお忘れになったのですか？　おくびょう風に吹かれたのですか？」

はずかしめられて、タリエールはまっかになった。



どんな人でも、あなたと私のあいだのかきねになることはできません！ また決闘するために女のさげば声が必要とするほど、私はもうろくしてはおりません！」

タリエールはやしきにとつて返すと、武器を持って集まるようにけらいどもにいいつけた。まもなく覆面した騎馬の一隊が風のように町を駆けぬけていった。

タリエールはホラズムの王子のテントへふみこんだ。王子は眠っていた。タリエールは剣をぬかないで、王子をたたき起した。はね起きて、王子はうってかかった。タリエールは王子の両足をつかんでふりまわし、柱に頭をぶちつけた。王子はその場で息絶えた。

番兵たちはびっくりして急を告げた。ホラズムの軍勢はいっせいに矢をつがえた。飛んでくる矢をよろいでふせぎながら、タリエールは陣地を突破した。あるじが殺されたことを知って、護衛隊が追ってきた。タリエールにせまったものは、かたっぱしからうちたおされた。

タリエールは父からゆずられた城にたてこもった。自分の部隊を集めて、城壁を岩よりもかたかくためた。そのうえ、四方に急使をおくって命令をつたえた。

《私に忠実なものは、すぐ城にかけつけるように！》

四方から、昼も夜も人々がやってきた。かれをにくんでいた敵たちは、おそれをなして逃げ散った。かれは城を出て、堂々と都へおし出そうとしたくをはじめたが、そのとき、三人の高官が王さ



まの使者としてあらわれた。かれらは王さまのおことばをつたえた。

「おまえをわが子のようにいつくしんでいたことは、おまえもよく知っているはずだ。王女を愛しているなら、なぜはやく、心をうちあけてはくれなかったのか？ 不正な殺人は私の胸に剣をさしたのとことならない。私のほこりも私のやかたも血でだけがされた。おまえは老いさき短い白髪の主人に毒を飲ませたのだ。」

「王さま！」と、タリエールは返事を書いた。「苦しみを通して、私は鉄のように身も心もききたえることができました。あなたの領土は広大です。しかし男の血すじはたえようとしています。王家の養子として、そのあとをつぐものは私のほかにはありません。インドは私のものとなるでしょう！ 私には王冠と王位をいただく権利があります。祖国の運命は私の肩にかかっています。なぜよそののたより、ホラズムの王子ごときにこの国を渡そうとなされたのか、私には合点がまいます。この国は外国人に支配されてはならないのです！ 私が剣をさしているのはなんのためでしょう？ この国が侵略されるようなとき、この剣で敵を一步も踏みこませないためではありませんか！ 王女さまを花よめにのぞんでいる？ とんでもないことです！ どうぞご自由に、お気にいりの人をかの女にえらんであげてください！」



王女ネスタンがさらわれたてんまつ

タリエールは王女に密使をおくり、その返事をじりじりする思いで待っていた。不安と苦痛でも立ってもいられなかった。野原の丘にのぼっては、遠く王女のいる方をながめてばかりいた。ふと二つの人かげが目についた。とぼとぼと、つかれきつたようすで歩いてくる。タリエールはなにかあやしいおそれを感じた。思わず丘をかけおりて、そちらへ走り寄った。アスマート！きょうだいのように思うアスマートではあったが、そのおもかげは見られなかった。顔はゆがみ、ほおにばら色はなく、口に微笑はなかった。

「どうしたんです。」と、せきこんでタリエールは聞いた。「なにか、いちだいじでも？」
「神は天をわって、あたしたちの上のうちおとしたのです。」と、アスマートは、はく息もせつなげにこたえた。

このうえにもまだどんな不幸がおびやかしているのか、とタリエールは問いつめた。アスマートは悲しみとつかれにうちのめされて、それを口にするこもできなかつた。ひたいからも、ほおからも、血が胸の上にしたたりおちていた。

「はじめから順序をたててお話しします。」やつと氣をとりなおして、アスマートはいった。「それにしても、なんだってこんなひどいめにあうのでしょう。いつそ殺されたほうが、どんなに楽だかわからないのに……。」

——ホラズム王子が殺されたことを知ると、王さまははげしい怒りにもえあがり、すぐタリエールをひつとらえて、嚴罰に処せ、という命令を出した。だがタリエールは父の城に逃げた。軍部大臣が自分の城にたてこもったという知らせは、王さまを不安にした。王さまはタリエールに使者をおくった。その返事は王さまの氣にいらなかった。王さまはますますおこった。

「いや、タリエールはたしかにネスタンを愛しているのだ。しかも愛で目がくらんでるのだ。罪なき血を流したことは、私の一生のしみとなった！ これというのも、妹のダワールが娘に悪魔の教育をほどこして、徳の道をふさいでしまったからなのだ。もうようしゃはならぬ！ ダワールをひつとらえて、首をはねてやらなければ、神の前にも申しわけがたぬ。」

王さまは口さきだけでおどしたことは一度もなかった。いったん罰しようときめたことは、雷がおちるように、かならず実行した。ダワールは、死んだ魔法使いの夫人で、やはり魔法がとくいであるといわれていた。悪魔の手さきが、かの女の身にふりかかる危険について、さっそく知らせてきた、——「へたいへんです！ 王さまがあなたを首きり役人の手にわたすといっていますよ！」



「あたしになんの罪があるというんです。」と、ダワールはふんがいた。「首をきるといふなら、きられましょう。そのかわり、もうあの気が娘をただではおかないから。」

こうして新しい不幸がネスタンの身におそいかかった。かの女のへやに、いきなりダワールがふみこんだ。

「このいたずら女め！ はねつかえり娘め！ とんでもない畜生だ。」と、ダワールは聞くにたえない悪口をどなりちらした。「よくもあんな大胆不敵なことをたくらみおったな！ 人殺しをお客のそこへさしむけたりして。おかげであたしに腹いせのおはちがまわってきた。あたしは、おまえのために首をきられるんだよ。ねんがらねんじゅうおまえを見張っていたわけでもないのにさ。そのお礼に、いまおまえをタリエールから引きはなしてやるんだ。」

王女をゆかにひきずりおろして、血にまみれるまでさんざんにうちすえた。ネスタンは息もたえだえになった。かすかにうなるばかりで、気づけの酒も、かの女を元気づける役にはたたなかつた。ダワールの命令によって、よそものの黒人がふたりはいつてきた。口々になにかわめきながら、なすけようしゃもなく王女をかつぎあげて、おもてにおいたこしに、はこび入れた。王女はさらに小船に移された。そのときから、王女のゆくえはわからなくなった。

ダワールは自分の運命を知っていた。

——このままですむわけではない。しかえしにひどいめにあうのを待つよりは、自分で自分のしま

つをつけるほうがまだ!

そう決心して、胸に小刀を突きたてた。

……涙でとぎれとぎれになりながらも、アスマートはやつと話し終った。

「そういうしでいで、こうして生きてお目にかかれるのも、あたしにはふしぎなくらいです。いいえ、あたしには死ぬ権利もないのかもしれないかもしれませんわ。」

「かわいそうに。」と、タリエールはさげんだ。「いまさら泣いてもしょうがない。元氣を出すがいよ。なに、私(わたし)がきつとさがし出してみせる。砂漠であれ、海の荒波であれ、高い山であれ、私(わたし)におそろしいものはないのだから。」

かれは自分の心が火打ち石よりもかたくなっていることをたしかめて、すぐ王女救い出しのしたくにとりかかった。

忠実な部下百六十人をひきいて、城をあとに海岸へいそぎ、船にのりこんだ。船はいっぱいに帆をはって、見知らぬ国々をめぐるっていった。会う人ごとにたずねたけれど、なんにも聞き出すことはできなかつた。神はタリエールにすくいの手をさしのばさなかつた。いく月かすぎたが、まるでいく年も過ぎたように思われた。夢にさえも愛する人のおもかげを見ることはなかつた。そのあい



たに部下の人々は病氣にかかつて、ひとり死に、ふたりたおれて、ほとんど全滅した。これも天命だ、とタリエールは菌をくいしばってがまんした。

ついにある岸べにただよに着いた。生き残つてかれにしたがうものは、ふたりの部下とアスマートだけであつた。アスマートはどこまでもかれと運命をともにする決心をしていた。泣くまい、と思つても、つい涙が出た。いまは涙だけが、ただ一つのなくさめであつた。

フリドンの都

夜どおし海岸づたいに歩いていった。朝になつてみると、海岸にみどりの林があり、ぎざぎざの岩の丘のむこうに町があつた。町の人々はうさんくさそうにタリエールたちをながめた。それが不愉快なので、かれらは林の中へはいつて、休み場をつくつた。百年の大木のおかげで、みんないっしょに眠つた。

とつぜん、だれかのさげび声で目がさめた。見ると、この休み場のすぐ前を、見知らぬ人が馬にむちをくれて走ってくる。騎士の剣は折れて、赤く血にそまっていた。かれは波うちぎわをとぼしながら、しきりにだれかに悪口をあびせていた。またがっているのは、ほればれするくらいりっぱ

な黒馬であつた。(この黒馬があとでタリエールのものになる)タリエールは部下を出して聞かせた。

「勇士よ、なにをそんなにおこつていますか？」
部下は返事をもらえないで、すぐともどつてきた。こんどはタリエールが自分からとび出して
らつて、騎士のいく手に立ちふさがつた。

「あなたのいかりが正しければ、友だちになりましょう。」

これを聞くと、騎士は馬の速力をゆるめ、親しげな調子でこたえた。

「旅のかたらしいが、見ればりっぱな人から、よろこんでお話しましょう。ねこのようであつた連
中が、ライオンとなつて私におそいかかつたのです。よろいを着るひまも、たてを持ち出すひまも
なく。」

「心臆する人は男でなく、ふりかかる剣をおそれる人は勇士ではありません。」

タリエールのことは騎士の氣にいった。ふたりは兄弟のように腕を組んで、休み場へもどつ
た。部下は医者的心得があつたので、騎士の矢傷を水で洗つてあてした。

「して、敵はなにもののですか。」と、タリエールは聞いた。

「いや、私の運がわるかつたのです……。」と、騎士は話しはじめた。

——騎士はヌラジン・フリドンといつて、ここから見える土地の領主であつた。先祖から伝わる

土地で、広くはないが、たいがいの国には負けないくらい美しかった。その都はムリガザンザリと
いった。

フリドンの祖父はその土地を子どもたちのあいだに分けあたえた。フリドンの父はその土地のほかに、海にある一つの島をかれに残した。ところがおじがこの島にすわっていて、どうしてもあ
けわたさなかつた。

フリドンはたか狩りを思いたって、小船を島にこぎよせた。護衛隊はこちらの岸に残して、帰りを待っているように命じ、たか匠五名だけしかつれていかなかった。へしんせきの人々がいると
ろに、なんで護衛隊が必要だろう？フリドンは獲物を追って、野原をかけていった。

ふいに島の守備兵たちがフリドンをとりかこんだ。いとこたちは大軍をひきいて、岸に残された護衛隊にむかつた。剣のひらめきを見ると、フリドンには勇氣と力がありあがつた。自分の部隊を助けようと、かこみをやぶって小船にとびのつた。敵は大波のようにかれにとびかかった。だが卑劣なものどもに名誉のよろこびがあたえられるわけがない。敵はフリドンにけちらされた。すると新
手の援軍があとからあとからくり出されて、右から、左から、かれをおそつた。フリドンはきりまくつた。こんどは背後から、別の援軍がかけつけた。フリドンの剣は折れ、矢筒はからになった。フリドンは馬もろとも海へとびこんだ。敵はかれのけんまくにおじげづいて道をあけた。しかし

かれの部隊はほとんど全滅していた。こちらの岸へフリドンが近づくのを見ると、敵の大軍はあわてて船をこぎもどした。

「どうしても復讐します。」と、フリドンは話をむすんだ。「朝は悲しみ、夜は苦しみが二倍になるように。かれらの死体の上で、からすどもが大宴会をひらくように。」

タリエールはかれの復讐が正しいものであることを知った。

「どっちみち敵は罰をうけなければなりません。だから、いそがないで、じつとようすを見さだめて、一挙にほうむってしましましょう！ さてこんどは私の番ですが、私の身のうえ話はあなたの気持を暗くするおそれがあります。いずれそのときがきたら、なんにもかくさずにすっかりうちあけますから。」

「ほんとにいい人に会ったものだ。」と、フリドンはいった。「私もあなたのためなら、いのちをおしみませんよ。」

フリドンを先頭にして、かれらは都にはいった。小さいけれど、りっぱな町であった。部隊が整列して出むかえた。兵隊たちはいずれも傷ついて、血だらけな顔をしていたが、領主の足もとにひざまずいて、その剣にキスした。タリエールは建物の美しさ、はくらの絹をまとった町の人々の美しさに、目をたのしませた。

そのうちフリドンの傷がなおって、戦いに出来るようになった。部隊が編成され、軍船が集められた。

敵の船が十そうあまり、かぶとをいただいた兵隊をのせてあらわれた。タリエールはまっさきに進んで、先頭の敵の船にこちらの船をぶつけた。敵兵はひめいをあげて海におちた。タリエールは二番めの船のへさきをつかんで、ひっくり返した。波にのまれた敵兵たちがうかんでくると、ようしやなくかたつばしからきりすてた。あとの船はふるえあがって、力いっぱい島の方へこぎ逃げた。フリドンの船々から、いつせいに拍手かっさいがあがった。

島の岸では敵の騎馬隊が待っていた。いりみだれた白兵戦がはじまった。フリドンはおおぜいをあいてに戦うのがたくみで、しかも強かった。敵はみるみるくずれた。おじもそのむすこたちもむくいをうけた。フリドンはその怒りをおさえることができず、かれらの手首をちょんぎれと命じた。それからふたりずつにしてしぼり、たがいに大声あげて泣かせた。

逃げる敵を追って、その都へ攻め入った。捕虜たちは重い石でひぎをたちきられた。戦利品はちつとやそつとのキャラバンでは、はこびきれないくらいたくさんあった。

フリドンの都へがいせんすると、町中の人のがのこらず出むかえた。曲芸師や奇術師がそのたくみな芸を見せたりして、まるでおまつりさきわぎであった。口々にフリドンとタリエールをほめそやし



「なんと強いかた。あなたの手からはまだ敵の血が流れてますよ。」

「王者の王とは、とのさまのことです！」

だがタリエールはいっしょによろこぶことができなかった。かれの悲しい運命を知る人がひとりでもいるだろうか。

王女をたずねて十年

ある日タリエールはフリドンといっしょに狩りに出た。獲物を追って高いがけの上へのぼったとき、フリドンはふと思いついた。

「そうだ、いつぞやここへきたとき、じつにふしぎなものを見たことがあるんですよ。」
タリエールは気をひかれて、かれの話に耳をかたむけた。

「やはり狩りに出ました。馬はたかよりもはやく飛び、かもよりもたくみに水を泳いでいきます。空の高いところには一わのとびが舞っている。私は馬をとめて、なにげなく海面に目をやると、波まにちらちらと動くかげがあります。なにかがかものようにすばやく海をすべっていく。なんだ



「ろう、と私は思わず手綱をにぎりしめた……。」

「してそれは、けものですか、鳥ですか？」と、タリエールはせきこんで聞いた。

「よく見ると、一そうの小船なんです。色さまさまな帆をあげ、その下に宝石のようにゆれ光るものがある。やぐらです。やぐらには目のさめるような姫君がいます。みるみる小船は岸へ着きました。タールみたいになつ黒な水夫どもが、姫を船から岸への岩の上へうつしました。私は姫を見るのと、思わずからだかふるえだした。雪に咲いたばらのように美しいのです。こんな美しい人がこの世にあるとも思われません。私はかの女をうばい取ろうと決心し、いっさんにとび出した。ご承知のとおり、《魚》は鳥を追いつ越すほどはやい。それが全速力でかけたのですが、まにあわなかった。あつというまに姫をのせて、小船ははるか沖に遠ざかった。水夫たちは悪魔の手さきどもだったのですね。いくらくやしがつても、およばないわけでした。」

聞いているうちに、タリエールの顔色はしだいに青くなり、ついに地面に力なくくずおれて、なみだにむせんだ。

「王女をごらんになったとは、なんと運がよかつたことでしょう。」

フリドンはびつくりして、しんばいそうにタリエールの上にかがみこんだ。

「すみません！ つまらないことをしゃべって、ご気分をそこねて……。」



「いや、あなたになんの罪がありません。」と、タリエールはさえぎった。「これにはふかいわけがあるのです。いまくわしくそれをお話ししましょう。」

タリエールは悲しい運命についてフリドンに物語った。

「そうとは知らずに、かるがるしくふるまい、面目もありません。」と、フリドンはいった。「あなたはさすらいびととしてここへきました。もともと王者のかんむりを天からさすけられた人でした。それならば、天はあなたの傷あとを消し、あなたをわざわいからまもるにちがいません。どんな運命も、賞としてあたえられたものと信じていいのです。」

ふたりはフリドンのやかたの前で馬をおりた。

「そういえばそうかも知れません。」と、タリエールはいった。「現にあなたのような、またとない友だちをさすかつたのですからね。どうかいい知恵とすばらしいことばで私を助けてください。私にも、とらわれの王女にも、幸福がもどってくるような。ただどうしても王女をとり返すことができなければ、私には死があるばかりです。」

「この友情をおろそかにはできません。」と、フリドンはこたえた。「私はできるだけのことをするつもりです。ごらんなさい、この町は入江にのぞみ、入江は帆でまっ白になっています。そこでは世界の四方のたよりを聞くことができます。きっとあなたの薬を見つけてあげられるでしょう。こ



待ちなさい。」

「それから船を出して、姫君をさがせます。気を強くもって、苦しみがよろこびにかわる日をお待ちなさい。」

フリドンの命令によって、たくさんの船がしたてられた。

「見知らぬ海のはてまで航海して、波をくぐっても姫君をさがし出すように。どんな障害にもめげないで、私たちに吉報をもたらすように！」と、フリドンはいつつけた。

タリエールはもうじき王女にめぐりあえるような気がした。悲しみはかげのようになすれた。フリドンは、かれのためにあらためて玉座をもうけた。

「私はまったく気がきかない人間でしたが、いっぺんで目があいたようです。世の中にだれがあなたを尊敬しないものがありましたらう。」

遠い外国の港々々をのこらずまわって、船はみんな期限までに帰ってきた。むだだった。ダレジャン・ネスタンのことを耳にしたものはひとりもいなかった。タリエールはがっかりして泣いた。

「いよいよ私の終りも近づきました。」と、かれはいつた。「あなたと別れるのは、昼の光から夜のやみの中へ消えていくようなものです。でもこれからすぐにさらわれた王女をさがしに出なければなりません。どうか私をはなしてください。」

フリドンは別れを悲しんだ。兵隊たちも運命をのろいながら、タリエールの足もとにひれ伏し、

キスしたりだきついたりして、ひきとめた。

「どうぞおもいとまってください。お墓までも忠実にとおもするつもりでいますのに！」

「私だって、よろこんで出発するのではありません。」と、タリエールはこたえた。「しかしどんなにたいせつにしていただけでも、私の胸は晴れないのです。さらわれた王女を忘れることはできません。ちかったことを思い出せば、なんとしても、ぐずぐずしてはいられません！ 神の前にも申しひらきがたちません。」

フリドンもついにあきらめて、せんべつに《黒》をおくった。

「これにまさるおくりものはないと思います。体格といい、速力といい、こんなすぐれた馬はまず世界にも類がないでしょう。」

フリドンはタリエールを見送った。兵隊たちはうなだれて立ちならんだ。ふたりは涙をながしながら、かたく口と口とをあわせた。親身の兄弟と別れるようにして、ふたりは別れた。

タリエールはフリドンの国をあとにして、よその国々をめぐり、また海をわたり、会う人ごとに王女のことをたずねたけれど、すべてはむだに終わった。まるでけもののように、なかば狂気のでいで、あちらこちらをさまよった。

——ひろい野原をうろついて、いったいなんになるのだろうか？ ——とタリエールは考えた。——

うつりかわる生活をいまいまして思うだけで、なんにもなりはしないじゃないか。かれは忠実な部下とアスマートにいった。

「おまえたちには苦勞ばかりかけて、ほんとにすまなかつた。私を残して、どうか自由にどこへでもいつてもらいたい。私にはもうのぞみはない！ どうせとまることもないこの涙、これも忘れてもらいたい。」

「二度とそのようなおことばを聞かせないでください。」と、けらいたちは天をあおいでいのつた。「ここでお別れして、いつまたお目にかかることができましょう。私たちにとっては、とのさまただおひとりだけがたよりなのですから！」

そのま心にうたれて、タリエールはまたかれらをともない、国から国へとめぐっていった。いき会う人もまれな土地を去り、しかやかもしかだけしか住まない荒野に夜をあかし、谷をわたり、岩山を越したことも数知れなかつた。

ついにある洞窟にまよいこんだ。これはデフという力の強い魔ものたちのすみ家であつた。たちまちもうれつな戦いがはじまつた。かれらはくさりかたびらをぼろ綱のようにちぎりとつて、忠実なけらいふたりを殺した。タリエールはふかく悲しむと同時に、怒りが百倍した。やりをふるつて突きまくつた。デフどものおそろしい悲鳴は天までとどき、岩々をゆり動かした。そのほこりで日

もくもり、木々はおびえて身をふるわした。百にあまるデフどもはいっせいにタリエールにおそいかかった。やりが折れると剣にかえ、かたっぱしからきつてすて、ついにかれはひとりもあまさずデフを退治した。

信義の別れ

「その洞窟というのが、つまりこのことなのさ。」と、タリエールはいった。「私たちはここに住みついた。そして私はいいかわらず山野を狂気のようにかけめぐっている。私にとつても、アスマートにとつても、死んだほうがどれだけ楽だかしれやしないんだがね。それからこの肩から胸にかけている金色の毛皮は、王女がめすところのかたちに見えるので、せめてこうしてしのんでいるわけだ。アスマートが悲しげに目をふせて、縫ってくれたんだよ。まったく、つらい生活だ。だがもう私は剣を自分の上にはふりあげないよ！ そのかわり、王女をどこかにかくしているこの世界がにくい。私にとつてのかくれ家は、けものがひそむさびしい場所になった。そうしてもう十年がすぎた。ネスタンのゆくえはまだわからない。それでも私はどこまでもちかいをまもるつもりでいる……」





タリエールの長い物語は終わった。話のあいだに二度も三度も悲しみにうたれて気を失いかけた。するとアスマートが水晶の水でかれのひたいを冷やした。語りつぎ、また語りついで、語りおわったとき、かれの顔は死人のようにおおぎめていた。

アフタンジルはなみだをとどめかねて、ただいたましげにタリエールを見まもるばかりであった。タリエールをなくさめるものは、アスマートのいのりのほかにはなかつた。

「これで話すことはすっかり話した。」と、タリエールはいった。「おまえも聞くことはすっかり聞いた。いつでも愛する人のところへ帰れるだろう。おまえともお別れだ。」

「別れる前に、ただ一ついっておきたいことがある。」と、アフタンジルはいった。「こんな苦しみはなんにもならない、ということだ。いくら悲しんでも、それでおまえの愛する人が幸福になるわけではない。はやい話が、どんなに名医でも病気になるれば、ほかの医者呼んで脈をとらせ、薬を調合してもらい、熱の原因などを語らせなければならぬ。苦しいときには、他人の忠言が案外やくにたつものだ。経験をそれとなくもらす賢者のおしえにしたがい、いろんな人の話をかたむける——これがかしいやりかただ。おさきまっくらで、はやりたつては、けつして目的は達せられない。私も苦しい経験をなめつくしたが、おかげで自分の国へ帰ることができぬ。帰つたら、おまえの悲しみのことはよく話すつもりだ。騎士の誓約はゆめにも忘れぬ。天も証人になっている。」

じつとがまんして、ここから動かさないでいてくれ。かならずまたもどってきて、またおまえと会い、おまえのためにできるだけのことはするから。ネスタンはきつと見つけれられる！ しんばいすることはないよ。」

「おまえの同情には感激のほかはない。」と、タリエールはこたえた。「おたがいのあいだがらは、ばらにうぐいすのようなものだ。もう一度いっしょになって力をあわせたなら、どんなにか強いものになることだろう！ しかみために、もうここから野のはてへとび出してはいかないよ。もしおまえがもどってこなかったら、運命は二倍もたえがたくなるが、おまえの顔を見たら、悲しみのかげも消えるだろう！」

友情によってむすばれた兄弟のかたいちかいをさらにかためて、洞窟に夜をあかし、ともにあかつきの光をむかえた。

別れはつらかった。アフタンジルは顔をくもらせ、しおしおと馬をすすめた。とらの皮をまとった騎士は、ほろほろと涙をこぼしながら、友のあとを見送った。アスマートはひざまずき、すみれのようにうなだれて、友を忘れないようにいのった。アフタンジルはふりむいて、力づけるようにいった。

「私はどうしておまえたちを忘れることができようか？ かならずもどってきて、タリエールに兄



96103670200
0102000000000

弟あにのあかしをたててみせるよ。もし八週やっしゅう間たつてもあらわれなかつたら、私わたしをどんなのろいにかけるがいい。私わたしにはおそろしい地獄じごくがあるばかりだ。」

三、アフタンジルの歌

アフタンジル、アラビアに帰る

アフタンジルは自分の領地に着いた。親兵たちはおどりがあって、かれをむかえた。急使がすぐシエルマジンのもとへとんだ。

《私たちをあとに残して、この世のよろこびを失ったそのおかたがお帰りになりました！》
シエルマジンはむかえに出て、かれにだきつき、うれしなみだを流しながらキスした。

「これは夢でしょうか、うつつででしょうか。ごぶじのお顔を見て、こんなうれしいことはございません。」

「神がおまもりなされたのだ。」と、近親の人々もけらいたちも口々にいって、アフタンジルを祝福した。

アフタンジルはかれらとともに、飾りたてられたやかたへ近づいていった。城下の人々は総出でなつかしい主君の顔をおおいだ。その夜のさかんな祝宴のありさまは、とうていことばでいいあらわすことはできない。アフタンジルは涙でとぎれとぎれになりながらも、長いさすらいの旅のと、不幸な運命におちた人と友情をむすんだしだいを一同に物語り、

「私はね、友がなければ宮殿もくさったパンのようなものだ、と思うよ。」と話しておわつた。

シエルマジンのはるす中のできごとをくわしく報告した。アフタンジルはこの代官役がすべてうまくきりもりしていたことを知った。そのあと、ぐつすりと眠って力をつけ、つぎの朝早く馬のつて王城さして出発した。かれはシエルマジンのさきのりを命じ、十日かかる道のりを、わずか三昼夜でとばした。

急使が王さまにかれの報告をもたらした。

「王さまのご感光によって、私は運命にうち勝つことができました。もしふしぎな騎士に会わなかったら、私は面目を失うところでしたが、さいわいに目的を達し、よろこび勇んでいま王宮へ急いでいます。」

つづいてシエルマジンが王さまの前へ出て、アフタンジルの到着を告げた。また王女にも、「待ちに待ったお客さまが、たいせつなお役めをはたして、お帰りになりました。」とつたえた。

王女チナチンは、シエルマジンには数々のおくりものを、そのおともの人たちにはぬいとりのある服を一着ずつあたえた。

アラビア王ロステワンはけらいたちにとりまかれて、城門のところまでむかえに出た。王さまもうれしかったが、人民たちもそのうわさを伝え聞いて、騎士を見ようと八方から集まった。

馬からおりてアフタンジルは低くおじぎした。ロステワンはかれにキスし、みずからその手をとって、王宮の広間へ案内した。

祝宴は夜のふけるまで長びき、酒は川となつて流れた。王さまは総司令官の顔を、わが子の顔を見るように、うつとりとながめていた。お祝いの品々がみんなにおくられ、真珠の粒がまめのようにおしげもなくくばられた。

やがて宴会はおわり、一同は退出した。総司令官は王さまに人間ぎらいの勇士についての物語をはじめた。その人のあとをたずねてさまよい歩いた見知らぬ国々の風物が、目で見えるようにえがき出された。

「遠いタリエールのことを思うと、だれが泣かずにいられますよう。あのような不幸にあえば、どんなりっぱな人間でも、色を失ったばらのようになります。ダイヤモンドもくもり、あしはいばらにかわりません。」アフタンジルははるかな友をしのんで、ほおをなみだでぬらした。「タリエールは

強いデフどもを退治して、岩窟に住んでいます。いつわり多きこの世界を信ぜず、とらの皮をまとつて、絹の服にも、どんな富貴にも心を動かされません。かれには忠実な召使いの女がつかえています。この女にとつても王侯のめぐみはすこしもありがたくはないのです。」

やしきに帰ると、チナチンからの使者がかれを待っていた。アフタンジルはつばさを得たこちで王女のもとへとんでいった。王女はゆつたりと居間にすわっていた。髪は黒く、ほおは水晶のよう、口は赤く、ユーフラテスの川岸のしゅろの木のようにすんなりとしていた。アテネの雄弁家ででもなければ、かの女をたたえることはできないであろう。

王女はアフタンジルによりそつた。さかずきのふちからあふれるばかりに、幸福はふたりをいっぱいにした。王女はうれしさに心もはずんで、よく飲み、よく食べた。やがて王女は聞いた。

「それで、長いあいだ、あなたがさがしていたその人は、いまだここにいますの？」

アフタンジルはタリエールについて知っているかぎりのことを、くわしく物語つた。

「迷っている人の苦しみは、かるくしてあげなければなりません。」聞き終つて、チナチンはいつた。その声は感動にふるえていた。「ですが、かれの傷、かれの苦しみをなおす薬が、この世の中にあるでしょうか？」

「ですから、私のはかれと兄弟のちかいをたて、かならずまたもどつて、このいのちをもささげる、

とやくそくしてきたのです。友が友のために試練をうけることをおそれてはなりません。心は心と呼びあって、その愛情が道をきりひらきます。愛する人は、愛する人の気持がわかるでしょう。かれは愛の苦しみをうけているのです。それがどんなにあまくても、友のない生活などはうれしくありません。」

「あなたは王さまのぞみをはたしてぶじにお帰りました。愛情によつて、さまざまな悲しいできごとをたえしのび、いいお薬を得て、王さまの心をなおしてあげました。人間の運命はお天気のようであてにならないものです。いま日がかがやいてるかと思つと、もうくもつてくる。朝のよろこびは、夕がたには悲しみに終る。そのように悲しみのあとにはまたよろこびもくるでしょう。兄弟にあたえたことばをゆるがせにしてはなりません。迷っているその人のもとへ、お帰りになつて、愛する人への道をさがしてあげなさい。義務をはたして、かれに希望をもたせてあげなさい。ただ、あなたなきあとでは、あたしにまた暗い日々がくるでしょう。」

「七つの悲しみも八つめの悲しみにはおよばないといひます。」と、アフタンジルはいつた。「せつかくいっしょになつて、また別れる——つらさは百倍です。しかし私はいかなければなりません。ただ心に矢がささつたままでは、いこうにもいかれません。もう一度生きるのぞみもてるような、記念の品をください。あなたの決意によつて、私の道をあかるく照らしてください。」

チナチンはやさしい愛のことばでアフタンジルをなくさめ、教師のように生きる道を説きふくめた。そして真珠の腕輪を記念にわたした。

アフタンジルはやしきに帰った。しかしやるせない気持をおししずめることはできなかった。太陽が雲にかくれると、地面はうすぐらくなる。愛するおまえがそばにいなければ、朝も夜にかわる。万一、二度と会うことがないとしたら、なにをのぞみに生きていかれよう！ 花園の花のように自分をやしない育てた人が、胸にやりを突きたてて、傷あとを残した。そのために自分は消えることなきほのおに焼きつくされようとしている。なんとという意味のない地上の生活か。長いあいだ待ちに待った再会のよろこびは、たちまち別離でかき消される。わかいのちをむりに墓場へ引きこむようなむごい運命！

それを思い、これを思つて、アフタンジルは砂漠の砂に横たわる気持でベッドにたおれた。夢にチナチンがあらわれた。ばら色のほおはあおざめ、なみだが霜のように凍りついている。早春のあした、このようにして花はかれる。

いとわしきは人の心である。それは生き血を吸う幽鬼に似ている。幸福をさがすことは、めくらの人が夕焼けを見ることがと同じく、むだな努力である。どんなに足もとをはかつていても、道はいつしか消えている。人の心にたいして、死も、強い王者も、なんの権威もありはしない！

なくさめるすべもなく、苦しみをうらみのつぶやきにそいで、記念の真珠の腕輪をとり、胸にだきしめて口づけした。血のなみだが赤い絹織物のように流れた。

夜あけに、王さまからお呼び出しの使者がやってきた。はね起きて王宮へ急ぐと、角ぶえの音も高らかに、狩獵士たちがはりきってさんざめいていた。

王さまとつれだつて狩り場へいった。どらの音がひびき、空はたかのむれでくらくなり、獵犬のほえ声は野づらを圧した。獲物の血で草も赤く染まったほどの大獵であつた。王さまも高官たちも親兵たちも、みなまんぞくしてひきあげた。王宮の広間ではたてごとにあわせて、歌がはじまつた。アフタンジルは王さまが聞くままに、また旅の話をした。あたりの人々はタリエールのおそれを知らない風格を口々にほめたたえた。

——その夜もアフタンジルはねむれなかつた。横になり、また起きあがり、またねてみたが、胸のほのおは消えなかつた。

——たえしのべば、道も通ずるだろう、——ついにそう心をきめた。——悲しみになれないかぎり、どうして自らを助けることができよう。天の幸福を期待するいじょうは不幸をもなめなければならぬ。運命に追いつめられて、どんなに死にたくなくても、生命の名において生き、生きていける人々のために生命をささげなければならぬ。それならば、愛のほのおはだれの目からも深くか

くしておく必要がある……愛するものは心の秘密をみだりに口に出すべきではない！

大臣のとりなしの失敗

「神よ、私は心が、しずまらないのです。長くたえしのぶ力をあたえてください！」

朝早く起きて、アフタンジルは神にいのり、それから馬にのって総理大臣ソグラートのもとへいった。

「よくいらした！ どうもあなたがお見えになるような気がしてましたよ。」と、大臣は総司令官をかんげいした。けらいたちは低くおじぎして、かれの前に厚いじゅうたんをしいた。

「ばらのおいがふいてくるぜ。」そんなことをささやきながら、けらいたちは入れかわりたちかわり、かれの顔を見たがって、あいさつにやってきた。大臣とふたりきりになってから、アフタンジルは悲痛ないのりをこめて話しだした。

「あなたは秘密のうちに、どんなことでもいちいち王さまに忠告をなさいます。どうか私のなやみを聞いてください！ 私はあの人間ぎらいの騎士とおなじ苦しみにとらえられているのです。会わずにいると、もう一刻一刻が息づまるばかりです。あなただって友のためにはいのちをおしまない



「しょう。そういう気持は尊敬されなければなりません。私はその騎士と兄弟になりました。ですから、つながる糸のように、心はその岩窟のたき火のそばに残っています。かれの召使いの女、それも姉か妹のような近しさです。いつまでも結ばれているよう、ちかいました。この友情にそむかないかぎり、一時もはやく助けにいかなければなりません。私はかれを見つけて、長いあいだの王さまのなやみをなおしてあげましたが、私の胸は晴れないのです。かれは私のもどるのを、じりじりして待っています。おくれたらいちじです。狂気の人を救い出すことは神の意志でしょう。ちかいの前にしりごみするようなものには、勝利はめぐまれません。私の決意のほどを王さまにつたえてください。たとえおゆるしがなくても、それで引きさがることはできないのですから、ごきげんよく私をおくり出してくださるよう、おとりはからいねがいます。お礼はいくらでもいたしますから。」

アフタンジルはことばをきって、ちよつと考えてから、すぐつづけた。

「王さまにはこのようにお話しくださいたらいかでしようか？——アフタンジルは友情から身をひくことのできない人間です。友なしでは、どんなこの世の幸福も楽しくはないといっています。かれが友を助け出したら、王さまのおん名はますます高くなるでしょう。そもそもかれをしかりつける理由があるでしようか？ 罰するならば、天が嚴罰をくだします！ 万一、とちゅうでいの

ちをすて、かれが帰らないとしても、王さまには敵をうちしりぞけるじゆうぶんな力があります。ここはどうぞ、ひろいお心で、かれが王宮を去るのをおゆるしくくださるよう、私からおねがいたします。——こういう調子で、ま心こめて王さまにうちあけてくださったら、よもやおわかりにならないことはありませんまい。」

「いかにもごもつともなおたのみですが。」と、大臣はこたえた。「あなたのご決心を聞いたなら、ロステワンはきつとお腹だちになるにちがいありません。この私まで、まきぞえくって、とんでもないめにあわされます。王さまのとこへこの話でいくよりは、いつそあなたの剣でひとおもいにきられたほうがましなくらいです。司令官も司令官だが、そのふといたくらみを私に伝えるなんて、ぶれいにもほどがある。このたわけものめが！」とおしかりになって、八つぎきにされないまでも、もつとひどいはずかしめをうけるかもしれせん。だいいち、考えてもごらんなさい。司令官がいなくなつて、軍隊はどうなります？ 敵どもはいつだつてすきをねらつてるんですよ。かれらから主君をまもるのがあなたの役め。すずめのむれは、けつしてわしにはなれせん。」

「しかし、友情は愛よりもつと清らかなものです。いったん兄弟のちかいをたてたからには、かれをくらやみから太陽の方へ引きもどすまでは、安心はありません。私にとつてなにが苦しみな、なにがよろこびかは、私自身がいちばんよく知っています。なみだでくもつた目をして、どうして



「聖君を助けることができましょう。まさか大臣のお心が石になったわけでもありませんまい。いや、そのようなねがいは、はがねのやいばをもやわらげるものです。よくわけを聞いたなら、王さまだつてあなたをはずかしめはしないでしよう。ぜひ王さまにたのんでください。こつそりここをたちのくようならそつきに私をしなくてください。」

「だまつていて悪いこともあれば、しゃべつてけがすることもあります。あなたの決意には負けました。あたつてくだけです。おたのみはひきうけました。」

大臣はロステワンの前へ出た。王さまはりっぱな服を着て、まぶしいばかりに見えた。大臣は気おくれがして、アフタンジルにたのまれたことばが出ず、ただ口をもぐもぐするばかりであつた。「なにをためらつている。かくさずにいうがいい。」と、王さまはさいそくした。

「それが、その、まことに申しあげにくいことと。」と、大臣はへどもどした。「じつは、アフタンジルにたのまれまして、そのおねがいにあがりました。つまりかれはこの不信の世の中にあいそがつきたから、ちかつた友のところへ帰らせてくれ、といつていますので……。」大臣はここで勇氣をふるいおこして、いいました。「いや、どうもうまくお話できませんが、アフタンジルの悲しみはたいへんなもので、なみだが川となつて流れています。いや、とんでもないことをおつたえして、おそれいます。」



王さまの顔はみるみるけわしくなり、目はあやしく光ってきた。

「おまえは正気でそんなことをいいにきたのか？ それで大臣がつとまると思うのか？ 悪魔だつてアフタンジルみたいなひどいことはいわないぞ！ よくその舌がのどにひからびつかかなかつたものだ。まるでものを知らないばかりのことばではないか。そんなことを聞くくらいなら、私はつんぽになつたほうがいい。おまえは司令官の使者になつた罪をあがなわなければならぬ。それでもこの私の敵ではないといえるか？ ふとどきものめ！」

王さまはおろおろする大臣にこしかけを投げつけ、

「アフタンジルがたち去ることはけつしてゆるさないぞ——だれがりつばな男にそだてたと思つてるんだ！」とさげびながら、大臣の頭をかべにごつごつたたきつけた。

大臣はほうほうのていで逃げた。

——しまった！ なんだつてあんな使いをひきうけたんだらうな？ まずいことをいっちまつて、あれじゃ王さまがおこるのもむりはないよ。

「だから、いわないことじゃない。さんざんなめにあいました。まるで悪い夢でも見たような気持ちです。」と、大臣はアフタンジルに報告した。なまじけないと同時に、おかしかった。大臣は泣き笑いしながらむすんだ。「わいろをとれば地獄ゆきだといいますが、私は口やくそくだけであなたに

「ービスして、一生涯なならないほどのいたでをうけましたよ。」

不幸の友を助けないのははじです。」と、アフタンジルはこたえた。「ばらがしほめば、うぐいすは死を待つばかりです。だからかれはいのちの露をもとめて飛び去ります。うるおいがなければ生きてはいかれないのですからね。私はわが家をすてて、野獣の住む森へ去ります。敵とはかりにかげられて、はずかしい生活をつづけるより、そのほうがどれだけましでしょう。なやみとはなにか、不幸とはなにか、私は王さまにそれを書いて出します。どんなにお怒りになってもかまわない。おとりあげにならなければ、のぞむところではないけれど、ひそかにたち去るよりほかはありません。」

大臣はけらいたちを呼んでお客をもてなした。けらいたちはよろこんだ。大臣はまた相当のおくりものをさし出した。食事がすむと、やがてお客は去った。もう日が暮れていた。

アフタンジルはやしきにもどって、大臣へお礼の手紙を書いた。

「あなたのお心づくしにはまったく感激いたしました。とうていそれにおむくいすることはできません。せめてこのいのちをさしあげるばかりですが、それでもなお私はあなたの債務者です！」

かれはしゆすの反物三百本と色さまざま美しい宝石六十個をえらび、これを手紙につけて、大臣のもとへとどけさせた。

アフタンジルの脱走

アフタンジルはシエルマジンにうちあけた。

「いろいろやってはみたが、のぞみはない。また不幸がおちてきたのだよ。王さまは私が出ていくのをゆるしにならない。さりとて、タリエールなしでは私は生きていけない。第一、不信なおこないを神がだまってみのがすはずはない！ 別れてきた人のことを思えば、こうしているまもなみだはあふれ、底なしに胸は痛む。およそ友の心に友情の火が消えないようにするには、三つの道がある。まず——かれといっしょにあつて、いつもそのめんどうをみることに。つぎは——財産をおし、まずに、おくりものでかれをよろこばせること。第三は——不幸におびやかされたとき、かれのささえとなること。タリエールは旅のとちゆうで私を助けた。こんどは私の番である……もう話したり、ねがったりするときは過ぎた。いまはただ脱走あるばかり。あとはおまえが私のように勇敢にまっすぐに、私の城と領地をまもり、軍隊の指揮官となつて、国のかためにつくしてくれるように。いままで忠節であつたように、これからはさらにその二倍も忠節であるように！ 敵をてひどくたたきのめせば、おまえの威勢に敵はふるえあがるだろう。不忠なものは敵罰に処し、忠義なものは



のには財産を分けあたえるように。さいわいに生きて帰れば、私の債務は百倍となつてもどされるだろう。真理につかえるものは、けつして神に見はなされることはないのだ！」

「おつしやるまでもなく、私はどんな運命にもさからつてまいります。」と、シエルマジンはみだをながしていった。「しかし、あなたおひとりでもまた知らぬ国々へ旅だちなさつてはいけません。ぜひ私をおともさせてください。あなたのゆくえがわからないとあつては、私としてだれに申しひらきがたちましよう。」

「おまえをつれていくことはできないのだ。考へてもごらん。おまえのほかにも、やしきや財産をまかせられる人物がどこにいるか？ それにこれは私が当然、にならうべき不幸の重荷ではないか。愛に忠実である人は、追放もしなければならぬし、さびしい放浪者として涙をながすこともたえなければならぬ。それが運命のおきてなのだ。ただすなおにしたがうよりほかはない！ この試験にたえる力のないものこそ、あわれまれていい。私をそんな弱い人間と思わないでくれ！ この世の中は、くさったきゆうりほどのねうちもありはしない。太陽の意志をなしとげようとするからには、なんのためらいもなく、国もすてよう、やしきもすてよう、なにもかもふりすてるのだ！ もし私が帰つてこなかつたら、どうか泣いてとむらつてくれ。ただけつしてあとを追つて死んではならない。」

アフタンヅルはロステワン王にあてた長い手紙を書いた。手紙というよりも、遺書といったほうがいいかもしれない。

「法をおかして、私はひそかに脱走いたします。もし友と会わなかったら、遠い他国から、二度ともどつてはまいります。王さまのご威光によって旅のしゅびをおまもりくださいますよう、おねがいいたします。

——友のために自分をささげるといふ私の決心は、あなたにもよくわかっていただけだと思います。「偽善者あるいはうそつきは肉体のあとから魂がくさる。」と、プラトンはいいました。うそは、それが心にやどつたがさいご、あらゆる不幸のもととなります。どうしてあのさまよえる友を忘れることができませんか？ 私にとってかれはたいせつな兄弟です。天のおきてをさとるために私たちには知恵とものを見る力とがあたえられています。聖書は愛についておしえています。「愛は天までとどく。」——これが王さまにおわかりにならないとしたら、なんで一般無学のものにわかりましょうか？

——私はどんな敵にも負けない強い力をあたえられました。これをあたえたのはだれでしょう？ 神の同意がなければ、なにごともおこなわれません。太陽がなければ、すみれは色あせ、ばらはかれます。あらゆる美しいものは人間を力づけるためにあります。友がなければ私にとって生活はな

いのです。私はひとりぼっちでほろびるばかりです。

——王さまのお心にそむいたことを、とがめないでください！ 友情のきずなはきろうとしてもきれません。たとえどんなところにいようと、かれの愛する人をさがすことに安心を見いだして、私の気持はすこしもゆらくことはないでしょう。

——勇士にとってのおきては、不幸に屈しないということです。どんな人でも運命をさけて通りぬけることはできません。天が定めたことならば、私は苦しみをうけるかくごです。それは私にとって名誉いじょうに高いものです。私が正しくないとお考えでしたら、私を罰してください。しかし友の信頼をうらぎり、また自分をもうらぎることが、はたして正しいことでしょうか？ 私

——がたがたふるえて出征におくれるものは戦士とはいえません。たとえ戦場には出て、合戦の前に逃げるか、合戦さいちゅうにおそろしさに立ちすくむばかりです。ひきょうものは、いつもつむぎ車の前にすわっているおばあさんにもおよびません。それでも死は一つです。どんなかわしいがけの道も死をひきとめることはできません。弱いものも強いものも目をつぶるときはいっしょです。はずかしい日々を生きるよりは死んだほうがいい。しかし名誉ある死でなければなりません。

——うちあけて申しあげますならば、毎日、毎時、死は私をおびやかしております。運命がすこ

しても狂えば、私はただのさすらいびととして、世界のかたすみで果てるでしょう。それをあわれむ人もなく、しんるいも家の子たちも告別することさえできないでしょう。ただあなたに私のおこないをゆるしていただければ、それで私は安心して目をつぶります！

——私の財産はともかぞえることができません。私の後生のために、それを家なき人に分けあたえ、それでどれいたちを解放し、みなし子たちをいつくしみ、貧しい人たちをうるおしてやっってください。それでもまだあまつたら、新しい橋をかけ、多くの人々に家を建ててやっってください。私のわがままをゆるして供養をしてくださるのは、王さまのほかにはないのですから！

——これいじょうくどくどと申しあげて、おやすみのじゃまをしてはいけません。私の胸の中はもうよくおわかりくださったこととぞんじます。この世になきものとおぼしめして、どうかお怒りをしずめてください！

——私のあとはいっさいシエルマジンにまかせてあります。かれはよく私のかわりをつとめると思っています。この忠実なけらいに、あつき信任をたまわるようおねがいたします。

——この悲しい手紙は私みずからしたためたものであります。やしない育ててくださいました恩人から、私は遠く去っていきます。王さま！私を忘れてください。あなたは強大です。近づく敵が、あなたのおそろしさを知らずをいのです。》

アフタンジルはこの手紙をシエルマジンにわたした。

「いいおりを見はからって、王さまにさしあげてくれ。いまはおまえだけがたよりなのだから。」
そういつてかれは血のなみだをながしながら、シエルマジンの手をとった。

アフタンジルは旅だちのしたくをととのえて、お寺にいった。アラビアの夜はふけて、まっ黒なとばりがおりにいた。かれは神殿にぬかずいて、いのった。

「神よ、あなたは心に愛の火をつけられた。しかも私を悲しい別離の運命の手におわたしなされた。たねをふみにじるように、愛をもほろぼすおつもりでしょうか？ あなたは大地のささえです！ 敵の剣をほらい、海のあらしをしずめ、夜の悪魔をしりぞけて、なおこの身に害がないように、私をおまもりください。」

門の前でかれはしばしシエルマジンと別れをおしみ、それから、運命のようにためらうことなく、いっさんに馬をとばしてかけ去った。

ロステワンはきげんが悪かった。いつものように広間に出て客たちと会うことも、とりやめになった。廷臣たちは王さまの顔色をうかがって、おろおろするばかりであった。王さまは自分の居間にソグラトを呼びつけた。大臣はおっかなびっくりして、ただむやみに頭をさげた。

「きのうはしつれいな話を聞いて、かっとな腹がたち、おまえをひどいめにあわせたが、考えてみれ

ば、おまえだけが悪いわけでもない。」と、王さまはいった。「怒りは不幸の根である、と聖者はおしえておられる。なにごとでもそれをきめるには、まずよく考える必要がある。もう一度くわしくアフタンジルのねがいについて話してみろ。もうおこらないから、えんりよせずに申せ！」

だが大臣がすっかり話しおわらないうちに、王さまは、「もういい——。」と、かれの口をとめた。「やはり私がゆるさなかつたのは正しい！ どうだ、おまえは私が坊さまよりもきびしいと思うか？ もうこのことについてはなんにもいうにおよばないぞ！」

大臣はやしきに帰った。まもなくけらいたちがあわててかけつけて、アフタンジルが、どこかへ行ってしまったことを告げた。大臣はあおくなつた。

「いよいよたいへんだ。王さまに報告しなければならぬが、私にはとうていできない。だれかきもつ玉のふといのがいつてくれ！」

強そうなけらいを四、五人使いに出した。ところがみんなおじけづいて、使いの役めをはたしたのか、はたさなかつたのか、ひとりも帰つてこなかつた。

ロステワンは不幸なできごとをうすうす感づいた。かれはおそぼの人々にいった。

「たいへんだ！ どんな戦争にも負けたことのない勇士が、私たちを見すてたらしい！」

王さまはうなだれてため息したが、やがてけらいのひとりを呼んで、



「すぐ大臣を呼んでこい。」といいつけた。「いったい大臣はなにをぐずぐずしてるんだ？ はやく事件を報告すべきじゃないか。カメレオンみたいなくじなしめが！」

大臣はいっそうびくびくして王さまの前に出た。

「太陽が雲にかくれたというが、ほんとか？」と、王さまは聞いた。

アフタンジルの脱出がはつきりすると、王さまは白髪をかきむしって、人前もかまわず泣きだした。

「せっかくの教え子がなんだって私をおき去りにしたのか？ きょうからはこの王宮も、もう悲しみの家だ。おまえが帰るまでは、私にはよろこびはない。おまえといっしょに森のけものをおどろかせたり、競技でおまえのわざのたくみさに感心したりすることは、もうできないのか？ おまえの美しい声はもう二度とひびかないのか？ いまさらこの財産がなんになり、この王権がなんになる？ もちろん、どんな長いさすらいにも、おまえはうえるような男ではない。野にも森にも獲物はある。いつかは私の苦しみをやわらげもしてくるだろう。だがそれまでに私が墓にはいったら、だれがこの土くれに泣いてくれるか？」

いちだいじを聞いて、廷臣たちや軍人たちもいっばい大広間につめかけた。それぞれ王さまになぐさめのことばをのべたけれど、王さまは頭をかべにうちつけて、なげき悲しむばかりであった。

「もう日は照らぬ！ 私たちの剣の力も敵どもにおそろしくなくなるだろう。ただかれのぶじをいのるよりほかはない。それにしても、かれはたったひとり出ていったのだろうか？」

それにこたえるように、シエルマジンが長い書きおきの巻きものを持ってあらわれた。

「私はこの羊皮紙の書きものを主人の寝室で見つけました。いまごろアフタンジルは従者なしで、ただひとり遠い旅にあるでしょう。おそばにありながら、ゆきとどかず、まことに申しわけもございません。」

手紙を読みおわると、王さまはいった。

「軍隊は喪に服すること。また寡婦とみなし子を集めて、さすらいびとに平和とめぐみがくだるよう、天にいのりをあげさせること！」

二騎士の再会

日の光がなければ、ばらはしほみ、花の色を失う。愛する人と別れた心も、ちようどそのように傷つきいたむ。

——わが道を照らしておくれ、チナチンよ。こんなにも、やみがふかいものを！

アフタンジルはそういのりながら、旅をつづけていった。歯をくいしばってはみたが、なみだはチギリスの川波のように、あとからあとからおしよせた。たくさんの国々を過ぎた。星は金の砂をまいたように空に光っていた。その一つ一つにかれは愛する人のおもかげを見て、それと語りあった。

——おまえは人間の苦しみや心配をとりのけてくれるという。はやくおまえのように美しい人とあわせておくれ！

屋間の暑さにすっかりつかれて、冷たい川の岸に休むと、流れる水はその人のささやきのように胸をゆすった。東が白むと、また馬のくらにまたがって、けわしい道にふみ出した。

遠くに高い山脈が見えた。走ってくるかもしかを矢で射とめた。これで元気がついた。

——野のすみれにも会わなかった。運はよくないけれど、なんとしてもたえしのばなければならぬ。

ときに迷い、ときにけがをし、ずいぶん遠い道ではあったけれど、アフタンジルはついに見おぼえある洞窟に着いた。

アスマートがかけ出してむかえた。あまりのうれしさに、なみだかさきにたち、口をきくことができなかつた。アフタンジルは妹のようにかの女をだいて、キスした。

「ときに私の兄弟はどこにいるのかね？」

やがてアフタンジルは、そう聞いた。アスマートはまたなみだにくれた。

「あなたがおたちになつてから、あの人はまたこの山を出ていったのです。それきりで、まだなんのたよりもありません。」

アフタンジルは胸にするどいやりをつきさされたように身ぶるいした。

「なんだつて？ やくそくをわすれたのかね？ それともあのちかいはうそだったのかね？ かれに会わないとしたら、私の生涯はどうなるんだ？ 私をわすれ、私たちの友情をふみにじつて、どこかへいっちゃまった！ なるほど、運が悪いと思つたのは、これであたりまえだ。」

「おなげきはごもつともですけれど、これにはわけもございます。」と、アスマートはいった。「ちかいてもやくそくも血がかよっている心の中なら生きてもいましょう。あの人の心は石なのです。死ぬことしか考えていないのです。心と魂と知恵——それは一つにつながれた輪です。その心が死んだなら、魂も知恵もいっしょにほろびます。タリエールの心がなやみで焼きつくされ、血がこおりついている、ということはあなたもお忘れではありません。かれの苦しみをうまくことばでいいあらわすことはあたしにはできません。じつはそれがあたしにのみこめたのは、つい近年のことですもの。あの苦しみを知れば、岩もゆらくでしよう。戦いをわきからながめれば、だれしも自



041067411
2024010933

分を戦術家のように考えるものです。あの人が出ていこうとしたとき、あたしは、

《もしアフタンジルがもどってきたら、なんといいいます？》

と聞きました。するとかれはこんなふうにかたえました。

《なに、遠くにいきはしないよ。心はこの場所にしっかりとつながれているのだから。けっして友情をうらぎるようなことはしない。たとえ悲しみでこの目が泣きつぶれるまでも、かならずかれを待ち合わせるよ。》

そのまま、お帰りにならないのです。こうしてあたしはまたひとりひとり残されました。ひとから聞いたことですが、中国のどこかに、

——身近に友情を見つけない人は、自分から敵をもとめているようなものだ。

という文句をきざんだ石があるそうです。どうかあの人を見すてないで、助けてあげてください。
5.1

「なるほど、騎士に弱気は禁物でした。」と、アフタンジルはいった。「のどがかわけば、しかは日かげと水をさがします。こうなれば、なにがなんでも、友をさがし出さなければなりません。私は愛で心と心をむすばないで、国を出てきました。なさけぶかいロステワン王のいいつけにそむき、ひどくおこらせ、自分の役めをすてて、ひとりゆくえも知れぬ旅をさまよう——これでは天のめぐ

みを期待するわけにはいかない。どんな罰もかくごのうえです。ただ私にはちかいをまもり、兄弟を助ける義務がある。ねむりも休息もとらないで、かれのもとへ急ぎましよう！ またもさまよい出なければならぬというのも、やはり私にくだされた罰にちがいない。なに、いのちのあるかぎり、やりとげてみせますよ。」

騎士は川をわたり、けわしい岩山をふみ越えて、はて知らぬ野原へと馬を走らせていった。かるやかな風がほてった顔をひやして吹きすぎた。

——それにしても、どうして自分はこんなに神にきらわれたものかな。——とアフタンジルは考えた。——なぜ、すべての人から引きはなして、こんなさいなんばかり自分におしつけるのだろう。こちらは友に忠実であつたのに、友はうらぎって、消えうせた。このまま会えずにしまったら、もう生涯自分にはよろこびがない。いや、なげいてもはじまらない。なんとかかれのあとをかぎつけて、まっすぐそこへつき進むのがいちばんだ。野原の道はどこまでいつてもつきなかつた。アフタンジルは夜も寝ないで友の名を呼びたてた。三日三晩、すげのやぶの中を通りぬけていった。すべてはむだに終つた。ひとつ子ひとり、会わなかつた。

それからまた困難な道がつづいた。ある日、山のふもとにさしかかつた。すると、光とかげがまじりあつたところに、ふと手綱をひきずっている《黒》のすがたが見えた。

「タリエールを見つけたぞ！」

思わずおどりがあって、アフタンジルはさげんだ。うれしさに胸がはずんだ。長いあいだの悲しみはいっぺんにふっとび、ぼらはまたぼらに、水晶はまた水晶になった。はるかに友をながめて、かれはつむじ風のようにかけだした。

タリエールはたけ高いあしの草原にぼうぜんとつつ立っていた。えりもそもぼろぼろにちぎれ、顔はまっさおで、しかも血まみれになっていた。まるで地の底から出てきたゆうれいのように見えた。その足もとには、ライオンの死体、血ぬられた剣がすてられ、わきにはあおむけになったとらの死体がころがっていた。

「タリエール！」と、アフタンジルはさげんだ。

しかしこたえはなかった。タリエールの胸の火は消えて、心はこおりついていた。生か死か、それもわからず、もう光も見えなかった。かれは正気を失っていた。

アフタンジルはあわてて馬からとびおり、かれをかたくだきしめた。

「おい、私はやっとおまえのとこへもどってきたんだぞー」と、なみだをはいはらい、さげんだ。あわれな騎士はうつろな目をなげたまま、なんにもこたえなかった。アフタンジルはくちびるをかみしめてあいてをゆさぶった。なみだがタリエールのほおにおちた。このとき、タリエールは

ふつとわれにかえつた。そしてはげしくアフタンジルにだきついた。

「ちかいは破らなかつたぞ！」と、タリエールはいった。「ほら、こうして、どうにか生きて、おまえのくるまで待つていたんだから。これで私の役めはすんだ。もう泣いたり、わめいたりするにはおよばない！ はやく私をほうむってくれ。せめてけものに食い荒らされないよう、墓にだけは入れてくれ。」

「私たちは一体となつて、どこまでも目的に進まなければならないのだ。」と、アフタンジルはいつた。「まっ黒な運命の前に屈したなら、悪魔に手をあげるようなものじゃないか！ 知恵を呼びおこせ！ 男は勇敢であれ、なみだすくなく、仕事を多く、と聖者のおしえにもある。悲しみや不幸のうち勝つには強くなければならない。無分別が自分の運命をだいなしにするというのはよくあることだ。砂漠に水をさがす人はしばしばだまされる。だからしっかりした知恵が必要なのだ、と聖者はおしえている。世の中をにくんで、どこに光の泉を見つけることができるか？ 傷のない人々なんだつてほうたいする必要があるのか？ 人を愛さなかつた人はいないだろう。その愛で悲しみや絶望を経験しなかつた人はいないだろう。それが世の中なんだ。くよくよしたつてはじまらない。あるとき、ばらにこう聞いたという話がある——。

《おまえはルビーのように美しい。それなのに、なんだつてくきにとげがあるのかね？》

「にがいものをなめたら、あまさがよくわかるでしょう。」と、ばらはこたえた。《もののねうちとはそういうものですよ。もし娘さんがだれのいうことでも、はいはいと聞いていたら、その娘さんにはなんの魅力もなくなるでしょう。》

花のいのちのみじかいばらでさえ、そう考えている。苦しみやほねおりなしのよろこびなんでものがこの世にあるだろうか！ 悪と善とはどこへいっても、まるで道づれのようにくつついていゝる。世界のつれなさをむやみにのろつてはいけない。いつでもそこにはなにかしらの意味がある。さあ、私といっしょに出かけよう！ おまえの考えは感情のあみにからまって、意識の光を消している。気がむかなくても、とにかく動き出さなければならぬのだ。やけな気持ちのどれいになってはならぬ。これは私の心からの忠告なんだぞ！」

「せっかくの忠告だが、私にはもうそれにしたがる力がない。」と、タリエールはこたえた。「知恵とはなんだろう。気が狂ったものは、もはや光を待ってはいない。この世で別れた人とは、あの世で会うよりほかはない。私をよろこばせてくれるつもりなら、兄弟よ、私の墓にひとにぎりの土くれを投げてくれ！ おまえにだけはほんとのことをいう。私はいま死の戸口に立っているのだ。死人はだれにも用がない。たとえまだ息があるとしても、どうかそつとしておいてくれ。」

「この世をすてれば、目的が近づくとでも思っているのか？」と、アフタンジルはねばり強くしかり

つけた。

自分が自分の敵になるなんて、はずかしいことではないか！ 心をとりなおせ！」

いくらいつて聞かせても、タリエールの心は動かなかつた。

「そうか、それではもう私はなにもいうまい。」と、アフタンジルはいつた。「それほど死にたいのなら、死ぬがよかろう……さいごにただ一つだけたのみがある。私は王さまにさからつて、アラビアをあとに遠い旅に出た。これでおまえに死なれたら、いつたいだれが生きがいをあたえてくれるだろう？ きょうからはくよくよしなくてもすむように、私の心をひらいてくれ。野原をいっしょにかけていくことだ。そうすれば悲しみも苦しきもふつとぶにちがいない。そのあとで、私と別れようと、死のうと、かつてにするがいい。」

馬で野がけすれば、友の気も晴れるにちがいない——そう考へて、アフタンジルはもうほかのことは口に出さず、じつとあいての目をのぞいて、それだけを説きすすめた。

「馬をひいてきてくれ。」ついにタリエールはおれて出た。

アフタンジルはすぐ馬をつれてきて、タリエールをくらに助けのせた。ふたりははて知らぬ草原をとぼしていつた。タリエールはしだいに元気をとりもどし、ほおにも赤みがさしてきた。

思いつめたいやな考へが友から吹きはらわれたようすを見て、アフタンジルはすこしずつ知恵の

ことばで友の無分別をたしなめていった。いい薬が熱病をなおすように、それは友の心をはっきりさせた。タリエールはかれのいうことを耳にとめるようになった。

「どんなに深くかくしている秘密も友にかくしてはならない。おまえの手くびにはまっている輪——それをおまえはたいせつに思うのかどうかね？」

「ただそのために生きるよろこびもあれば、死ぬ苦しみもあるのだ。」と、友はこたえた。「王女のことを思えば、世界の富も——木も地も木もなんになろう。」

「そういうだろうと思っていたよー」と、アフタンジルはいった。「それがおまえの本音なら、私もほんとのことをいう。おまえはアスマートのことを忘れているじゃないか。おまえのおこないはりっぱなうらぎりだ。なるほどその手くびの輪は美しい。目を楽しませる。だがおまえはそれにふさわしくない。アスマートはまるで兄弟のように、いく年おまえと苦労をともしているかね？ そのまえだって、自分のこともかえりみず、手紙の使いをしたりして、おまえにも王女にもまったく忠実につかえた。その王女のお気にいりをおまえは忘れている！ 善にむくいるに悪をもってするのは、おだやかではあるまい。」

「そういわれると一言もない。おまえは私の急所をついたよ。」と、タリエールはこたえた。「気が狂っていたが、いまはすこしおちついた。いのちがあったら、これからは兄弟のように、やさしく

するよ。」

「私はまた友のためにいのちをささげる。地獄の前にだって立ちどまらない。しっかりと生きてくれ！ 知恵を働かさなければ、かしいおしえもなんにもならない。やたらに力をおとして、自分で自分を殺すほどばかげたことはない。どんないい運がめぐってくるかもしれないじゃないか。」

「教師はばかな生徒をきらうものさ。しかし私が苦しんでいるような苦しみをかるくしてくれる教師がどこにいます？ おまえは私と同じような愛の受難者だが、それでも私のいうことには耳をふさいでいる！ ……」

タリエールはまた首をたれて、もの思いに沈んだ。

アフタンジルはかれの考えがもとにもどることをおそれた。ふと、かれの足もとにたおれていたライオンととらのことが頭にうかんだ。アフタンジルは話をそれに移した。

「あしの草原でおまえを見つけたとき、猛獣どもがそばにいたが、どうしてあんなところにライオンととらとがいつしよにいたんだろう。」

「それが私にもおかしいんだよ。」と、タリエールはこたえ、「くわしいいきさつはこうだ。」と話しはじめた。

アフタンジルの帰りを待って、じっと洞窟の中でしんぼうしていたが、とうとうがまんできなく

なり、馬うまにのって草原くさげんの方ほうへおりていった。

くらい密林みしんをすぎて、高地こうちに出た。するといきなり一びきのめすのとらがあらわれ、そのあとをライオンが追おってきた。タリエールははじめ愛する人ひとにでも出會でったようなふしぎな氣持きもちになつて、このけものどもから目をそらすことができなかつた。見ていると、とらはライオンの方ほうへからだをすりつけて、なれなれしくたわむれている。ものめずらしさに、タリエールは身動みぶきもせず、立ちつくした。

そのうち、二ひきのけものは齒はをむき出して、ふいにつかみあいをはじめた。とらはとびのいた。ライオンがひととびにせまった。またからだをすりつけて、たわむれ、またとびのいてはげしいけんかをはじめた。たがいに前足まえあしでぶちあう、——あそびなのか、戦たたかいなのか、すこしもわからない。

やがてとらはものやわらかな身みのこなしで、するりとくぐりぬけた。ライオンはあとからとびかかって、あいてを力ちからまかせに地面じめんにたたきつけた。これを見ると、タリエールはかっとなつた。

「力ちからづくで弱よわいあいてにけがさせるなんて、男おとこらしいしわざではないぞ。」

かれはライオンにそう声こゑをかけて、劍けんをひきぬいた。このときにはもう正氣まじきを失うつていたらしい。タリエールとライオンとのかくとうがはじまった。タリエールの力ちからがまさっていた。かれの劍けん

はけものの頭をまっ二つにきりわった。ライオンはその場で死んだ。

剣をなげすてて、タリエールは金色のとらの方へ走りより、愛する人にするように、だいてキスしようとした。とらは前足のつめを立てて、かれにつかみかかった。おどろいてタリエールはあいてをつきとばした。だがとらはそんなことでは逃げようとせず、怒りくるってかぶりついてきた。タリエールのからだはつめで傷だらけになった。かれはついにとらをつかまえ、ひとふりふって、投げつけた。とらはもう動かなかった……。

「そのとき私は、ふつとさいごに会った日の愛する人とのいさかいのことを思い出してね。悲しさに胸がつぶれるばかりだったよ。この世の生活が、私にとってどんなにつらいか、これでもわかるだろう。なにもかも、けものまでが私を苦しめる。世の中をすてたくなるのはあたりまえじゃないか。」

タリエールはそういつて話をむすび、またなみだにくれた。

「なに、そうすてたものでもないよ。」と、アフタンジルはなくさめた。「その人に会うのも、そう遠いことではあるまい。愛しあう人々には不幸はつきもので、のがれるわけにはいかないが、いのちのながさを底の底までなめつくせば、きつとみつが出てくる。ふかいがけの上に人をおどらせて、死をかくしている——それが愛というものだよ。」

十一年めの旅たち

アスマートは山の下に二騎士のすがたを見て、いそいそとかけむかえた。うれしなみだが雨のよ
うに岩をぬらした。ふたりは兄弟のようにアスマートとキスをかわした。

「神よ、あたしのいのりをうけてください。」と、かの女は天をあおいでいった。「あなたはのぞみ
を失って泣いている人を死からまもってくださいました。」

アスマートは洞窟の中へもどり、残り火をかきたて、とらの皮を敷きのべて、つかれたふたりを
まねいた。それからけもの肉をさしたくしを火の上でゆっくりまわしはじめた。パンもないこん
なまずしい食事を、だれが思いうかべることができるだろう。

「とにかく、食べようじゃないか。」

タリエールはなさけないような目をごちそうにむけた。ほんのすこし肉をきって、のみこむのが
やつとであった。

道になかったいい話ならば、だれでも耳をかたむける。世の中の重荷もわすれて、一語も聞きも
らすまいとするだろう。燃えかすの煙となって、長いあいだの悲しみがとけていくものならば、こ



の不幸な物語にもくつろぎがあたえられるはずである。

ライオンよりも強いふたりの主人公は洞窟の中で夜をあかした。朝になって、タリエールはいった。

「おたがいにとりかわした信義のちかいよりも、もつとどうとどうとあるうか。大理石のようにかたい兄弟愛よりも、もつとどうとどうとあるうか？ おまえの心づくしには神もほうびをたまわらう。しかしおまえはあまりにもきびしすぎる。私は地獄の火に焼かれているようだ！ おまえは運命の意志にしたがって、さらにそれをたきつける。どうかこのまま、おまえを愛する人が待っているおまえの国へ帰ってくれ。私を助けることは神だつてできないのだから。耳があるなら、聞いてくれ——私はひとりで苦しみたいのだから。道にかなったことをしろ、というなら、私はどうにそれをした。だがいまはそれもできない。気がい——それが私の運命なのだ。」

「どうして私がかきびしすぎるのだろう？」と、アフタンジルはいった。「考えてもごらん。心のいたでをなおす薬が神の手にもないとしたら、いったいだれのいいつつけにしたがえばいいのか？ おまえからよろこびをうばったもの、おまえをこんな遠い土地へ追いやったもの、そういうものの意志に屈してはならないはずだ。愛が不幸とせなかあわせであることを知って、その不幸に負けないのが男ではないか。私はおまえと会うために、チナチンに別れをつげるとき、



《友のなやみをなやむのです。》と、はつきりいった。するとチナチンは、
《男は男らしく、しっかりお働きなさいますように。》とこたえた。

私（わたし）はかの女の同意（どうい）をえて国（くに）を出（で）た。もしここでおまえを見（み）すてたなら、私（わたし）はひきようものといわれなければならぬ。私（わたし）の忠告（ちゅうこく）を聞（き）いて、力（ちから）をふるいおこしてくれ。もちろん、たくさんのことはのぞまない。あと一年（いちねん）だけががんばってくれ。そのあいだにとらわれの王女（おうじよ）のゆくえはきつとつきとめてみせる。もしそれに成功（せいこう）しないで、一年（いちねん）の月日（げつひ）が過ぎたならば、私（わたし）はもうあかるい天（てん）をあおがないだろう。死（し）んだ友（とも）のために、こんどはおまえに泣（な）いてもらう番（ばん）だ。」

「おまえのいうことはわかる。だがおまえにはまだ私（わたし）がわからない。」と、タリエールはいった。
「いま私（わたし）にとつては、家（いえ）も外（そと）もおなじこと、そして家（いえ）に残（のこ）ることは、そのまま地獄（じごく）へおちるといふことだ。おまえののぞみを命令（めいれい）として聞（き）こう！ もう一度（いちど）いつてくれ。」

「道（みち）はつらいだろうが、それではおまえと手分（てわ）けして、さがしにいくことにしよう。」

相談（さうだん）がすんで、友情（ゆうじょう）のちかいをくりかえした。野原（のぼら）へ出（で）て、ねらいたしかな弓矢（ゆみや）で獲物（えもの）を集（あつ）めた。洞窟（どうくつ）へもどつた。さしせまつた別れ（わか）れのことを思（おも）うと、またもなみだはあとからあとからあふれ出（で）た。

心（こころ）と別（わか）れた心（こころ）は一度（いちど）ならずおそれにおののく。心（こころ）の友（とも）との別（わか）れは人（ひと）をいたく傷（きず）つける。それがわ

からなければ、別れのときがどんなにつらいかはわからないだろう。

東の空に赤みさすころ、馬にまたがった。二騎士とアスマートのながすなみだは草のしとねをしとどにぬらした。

「これからまた知らぬ他国でずいぶん苦労されることでしょう！」と、アスマートはふたりを見送っていった。「道中ごぶじをいのです。あたしにもまだまだ悲しい日がつづきます。あたしには力がありません！ こんなつらいことがあるでしょうか？」

運命をなげきながら、二騎士は洞窟をあとにした。見知らぬ道をとおって、海岸に出ると、そこでひと休みした。別れを前にして話はずきなかつたか、ふとアフタンジルは思い出した。

「そうだ、おまえに黒馬をくれた友のことをどうして今まで忘れていたんだろう？ そのフリドンのところへいけば、なにか王女の消息がわかるかもしれないぜ。私はまずそこへいくことにしよう。」

そういわれてタリエールも思い出した。かれはフリドンの国について知っていることをくわしくアフタンジルに話した。

「海岸づたいに東へ東へと進めばいい。フリドンに会ったら、兄弟が兄弟のことを話すように、私



狼にいつて、山のがけの上でかもしかを射とめた。たき火をして肉をあぶったが、なかなかのどを通らなかつた。ふたりはめぐまれることすくない世の中をのろいながら、みどりの木の下に横になつた。

別れのとぎがきた！霧のあかつきがおとずれた。かたくだきあつた胸と胸——それは鋼鉄がとけあわされたもののように見えた。こうしてふたりは別れた。タリエールは西へ、アフタンジルは東へむかつた。二騎士の呼びあう声はいつまでも、ふかいすげのやぶの中にひびいていた。

フリドンの友情

太陽よ、強きうちにも強きものよ！

おまえは不幸なものを王冠で飾る、

私に愛する人をかえしておくれ、

きらめく光で夜をもやしておくれ！

土星よ、災厄の星よ！

おまえは悲しみの重荷をつける、
私の心を喪服でつつみ、
原始のやみにつきおとすがいい！

木星よ、真理をまもるものよ！

おまえはかたくなの心をさばく、
地獄の力に負けないで、

幸福の道をひらいておくれ！

火星よ、死のやりをつきさすものよ！

おまえはあかい血をながす、
私の重いくるしみを、

愛する人に話しておくれ！

金星よ、なやみの星よ！

ルビーをちりばめた真珠のように、

おまえのほおえみは美しい、

ただいたずらに迷わさないでおくれ！

水星よ、信念をまもるものよ！

ここにインクが、なみだの池がある、

ここにペンが、しなうからだがある、

私のなやみを書いておくれ！

月よ、心やさしきものよ！

おまえは太陽に結ばれて、

あかるくもなり、くらくもなる、

似ている私をなぐさめておくれ！

みちみちアフタンジルは歌っていった。それはうぐいすの歌のようにあまくはなく、ふくろうの

なき声こゑのようにひびいた。悲かなしみにみちた歌うたにひかれて、けものどもはすみ家いへからはい出し、海岸かいぎも岩いわも水みづから頭あたまをもたげて、耳みみをすました。聞きくものすべてなみだをながし、アフタンジルの通とほつたあとと露つゆがおりたようにしめった。

ひと月つき、ふた月つき、海岸かいぎの道みちはつづいた。三月みづきめになって、波なみと戦たたかっているいくつかの船ふねが見えたので、アフタンジルはそれに声こゑをかけた。

「あなたがたはこの国くにの人ひとですか？ この国くにはなんというのですか？ この国くにの王おうさまはどなたですか？」

「あなたは楽園らくえんにきたんですよ。」と、かれらはこたえた。「あなたは歌うたい手てたちにかんげいされるでしょう。ここはトルコの国くにさかい、これからフリドンの領地りやうちになります。フリドンさまは馬うまのりのりの名人めいじん、どんな合戦あひびきに出いても負まけたことはなく、これほど勇敢ゆうかんな王おうさまは見みたことも聞きいたことありません。私わたしたちもみんな幸福しあわせにくらしています。」

「まったくいいとこでああなたがたに会あったものです。」と、アフタンジルはいった。「その王おうさまに早はやくお目めにかかりたいが、都みやこまでの道みちのりはまだだいぶありますか？ また道みちのようすはどんなですか？」

船ふねのりたちはゆっくりとこぎながらこたえた。

「この道をまっすぐいけば、ムリガザンザリという都へ着きます。そこに王さまがいます。馬の足でしたら、十日ほどの道のりで、べつにわるいところはありませぬ。」

お礼をのべて船のりたちと別れ、アフタンジルは道をいそいだ。いき会う人々はみんなこしをかめておじぎした。かぶりものをとって、しげしげとかれの顔を見あげるものもいた。からだはしゆるの木、腕ははがねのような、りっぱな騎士のすがたに、これはただものでないと感じたからであったらう。離れるのがいやさに道づれとなつて、道案内をつとめる人々もあった。

ムリガザンザリに近づいた。見ると、馬上の人々がかけまわり、まきあがるほこりは空をくらくしている。狩りの角ぶえの音は野づらいつばいにひびきわたり、かまで草をかるように、矢は獲物をかり取っている。アフタンジルは狩獵士のうちのひとりをつかまえて、

「ここで狩りをしているのは、どなたのごけらい衆ですか？」と聞いた。

「ムリガザンザリのご領主が狩りのお楽しみで、射手たちを草原へおつかわしなされたのです。」

アフタンジルは長いあいだのつかれを忘れた。腕がむずむずしてきた。あいさつする適当なことばが見つからないので、無言のまま、人がおおぜい集まっている丘をめぐって馬をとばした。人々はその身のこなしのたくみさに見とれて、思わず道をあけた。

空の高いところに一わのわしが舞っていた。アフタンジルは弓をひきしぼって、それにねらいを

つけた。つるが鳴った。すると石のかたまりのように、わしは地面におちてきた。かけよって、つはさをきりとり、くらにむすんで、また馬をとばした。

丘の上にはフリドンのテントがはられていた。戦士四十名が列をただして三方からテントをかこんで立っていた。アフタンジルは狩猟士たちに見まもられながら、丘へ近づいた。

フリドンは狩りが急に終りになったので、まゆをひそめた。

「いいつけにそむいたものはどんな罰をくうか、忘れたのか？」と、かれはどなった。「なぜ中途で狩りをやめて、引返してきたのか？」

フリドンは前へ進み出た。だが遠くアフタンジルのすがたを見ると、いまのこごとを忘れて、ふしぎそうに首をかしげた。アフタンジルはけらいにいった。

「どうか王さまにおつたえください——ある外国の旅人が、ぜひ王さまにお目にかかりたい、とねがっていることを。それから、かれはタリエールの兄弟で、そのタリエールのたよりも持ってきた、と申しあげてください。」

けらいは大急ぎで丘をかけのぼり、王さまにそのとおりつたえた。

「なに、タリエールの兄弟だと？」

フリドンはおどりがあがるばかりによろこんだ。にわかに胸が高鳴って、それをしずめることがで

なかつた。ほおをばら色にそめながら、かれはお客をむかえに丘をかけくだった。

フリドンは目の前に美しい騎士を見て、まばたきもせず、立ちつくした。

「これは太陽のまぶしい光でもあろうか？　どんなことばでもほめたたえることはできまい！」
と、かれはさげんだ。

ふたりは同胞のようにだきあい、長年の親友のようにキスしあつた。戦士たちは感動してこれをながめた。フリドンのような王さまはこの世にまたとあるまい、と信じていたのに、アフタンジルはもつとりつばであつた。空にかがやく星も、太陽がのぼれば、その光を失う。ちょうどそんな感じがした。

馬にまたがって、フリドンの王宮へ帰つていった。だから狩りはしぜんにそれで終りになつた。人々はこのお客に目を見はり、どうしてこんな奇蹟を神はつくりだすことができたのか、とうわさしあつた。

「私がなにもので、どうして、タリエールと兄弟のやくそくをむすんだか、どこからきて、どこへいくつもりか、いっさいお話をたしましょう……。」

そうまえおきして、アフタンジルはフリドンにいままでのことをくわしく物語つた。

アラビアの生まれで、父は軍部大臣、ロステワン王のけらいであるが、この王の手もとで訓育さ

れて人となり、総司令官の職にある。国のまもりはかたく、敵には雷のようにおそれられていると。ある日狩りに出て、森のはずれで泣いている見知らぬ騎士を見つけたが、かれは王さまのまねきに応ぜず、はてはむちをふるってけらいたちをたくさん殺傷したこと。王さまはこれを悪魔のしわざと考え、それ以来、すっかりふさいでしまったこと。自分は愛する王女から相談をうけ、ふしぎな騎士をさがしに出て、三年の後、はからずもかれにいためつけられたトルコ系のハタイ人に会い、やっとかれのゆくえをつきとめたこと。

…かれは怪物デフを退治して、その洞窟に住み、いつわり多き世をのろい、人をのろい、さらわれた王女をしたって、ほとんど気がい同様になっていること。アスマートという王女の召使いの女が、忠実にかれにつかえていること。かれはこの洞窟にもめつたに帰らず、人の同情をはねつけ、けもののように人をきらって、はてからはてへと、フリドンからもらった馬をのりまわしていること。こうしてもう十年もたったこと。

…かれの話聞き、かれと兄弟のちかいをたてたいじょう、かれの悲しみを自分も悲しみ、海をたずね、陸をまわって、かれのために薬をさがし出そうと決心したこと。いったんアラビアに帰り、王さまを安心させて、また出なおそうとしたところ、お許しがないので、なみだながらにひそかにふるさとをぬけ出したこと。ふたたびタリエールと会い、こんど王女を見つけることができな



「……友情のちかいは永遠にあなをむすびつけている、と考えましたね。それでおたずねしたわけです。」と、アフタンジルは長い物語を終った。

泣き声をおさえることができなかった。フリドンの胸は、アフタンジルの胸とおなじようにいたんだ。七年前にタリエールと別れたときのことか思い出され、いまさらのようにたのみにならない世の中がにくらしくなった。

「タリエールよ、おまえは私をさげすんでいるのだろうが、それでも私はもう一度、おまえに会いたくてたまらないのだ！」と、フリドンはいった。「おまえと別れていて、地上の光栄がなんになろう！ おまえに私が必要でないというなら、私の生涯はやみだ。私の毎日はいちよりにとどまらる。」

フリドンは身もだえしてかきくどいた。

やがてかれらは都に着いた。王宮のながめは目を楽ませ、多くの役所の建物は遠くからも堂々として見えた。王宮の前には正装した召使いたちがならんで、南の国の珍客をていちょうにむかえた。

アフタンジルはフリドンとならんで席についた。テーブルにはこの国の名門百名がいながれた。



眞珠、ルビー、水晶、その他色美しい寶石が、にじのようにあかるくかがやいていた。酒やシャーベットが、山のようなごちそうがはこばれた。アフタンジルを身内の人のようにもてなした。さかずきは茶わんにかわり、茶わんはさかずきにかわった。お客のほおはばら色にそまって、まわりの人々をうっとりさせた。酒宴は夜があけるまでつづいた。

アフタンジルは浴室に案内された。高価な絹の服と目をおどろかすような帯とがかれを待っていた。

心からのもてなしをうけて、かれはいく日かこの国に足をとめた。荒野に出てフリドンとともに狩りをもよおした。どんな弓の名手もかれにはかなわなかった。飛んでいる鳥を射おとし、走っているけものを射とめた。

ある日、かれはフリドンにいった。

「おまえと別れ、こんないい国を出ていくのは、ほんとにつらい。だがいつまでもここでぐずぐずしていることはできない。まだ道は遠く、どんな危険があるかもしれない。おくれては身の破滅になる。さっそく出発したいが、おまえがネスタン姫を見たという、その海岸まで私を見送ってくれないか？」

「私もおまえを放したくないけれど、なやみがやりとなって、おまえの胸をさしつらぬくのであれ



「は、むりに引きとめはしない。」と、フリドンはこたえた。「ただ、ぜひおともをつれていってもらいたい。そのほかにらばと馬、また武器をつけてあげる。それだけおまえが楽になるし、それがあればとちゆうであぶないことがおこつてもきりぬけられるだろうから。」

フリドンは気のきいた召使の四人をえらんでアフタンジルの従者とし、よろい、かぶと、たてをそろえ、旅費として金貨六十箱、みごとなくらをおいた乗馬一頭をおくつた。夜営に必要なものはいっさいらばにつんだ。

一行は、はじめてフリドンがネスタンを見た、あの波があわだっている海岸へとむかった。フリドンはとらわれの王女のことを思い出して、またなみだにむせんた。

「色のまっ黒な船のりたちが、ここへ王女をつれてきたんだよ。くすんだ服につつまれていたが、それでも王女の顔はまぶしいほど美しかった。私は力づくでもかの女をうばい取ろうと決心した。ところがあやしい船はかの女をのせて、まるで鳥みたいに逃げてしまったんだ。」

ふたりはちかいかいによつて結ばれた兄弟のように、だきあつて別れをおしんだ。やがてアフタンジルのすがたは、見送りの人々をふりかえりふりかえり、遠ざかつていった。

四、 グランシヤロの花

キヤラバンと海賊

アフタンジルは四人の従者をつれて、海沿いの国々をめぐっていった。夜もろくにねないで、友のための薬をさがした。のぞみがないのがっかりして、泣きあかしたことも、一度や二度ではなかった。世の中のものがなにもかわらなくずみたいにねうちのないものに思われた。そんなときは、チナチンとの再会のよろこびを空想して、わずかに自分をなぐさめた。

いき会う人々にとらわれの王女のことをたずねたずねて、いつしか百日あまりが過ぎた。ある日、丘の上に出た。見おろすと、海岸近くに、荷物をつけたらくだのむれ、商人たちが右往左往して、なにやら心配そうにざわめいている。アフタンジルは丘をおりて、かれらに近づき、ていねいにあいさつして、



「なにがおこったんです？」と聞いた。

りっぱな男があらわれて、まず胸に、つぎに口に、それから巻きずきんに手をやった。これがあ
いさつのしるしであった。

「お見うけすれば、いかにも強そうなおかた。これこそ私どもがのぞんでいた人かもしれませ
聞いてくださるのでしたら、いくらでもお話いたします。」

「どこからきて、どこへ船を出すつもりですか？」

「私どもはバグダードの商人で、私はキャラバンの隊長ウサムと申します。」と、その男は話しは
じめた。「マホメットのおしえをまもって、私どもは一滴のお酒も飲みません。ただねうちのある
品物をおろして歩いて、商売にはげんでいます。ところで、さきほど私どもはこの海岸で息もたえ
だえになって、うちあげられている旅人を見つけたのです。手あてをして、やっと正気づかせてか
ら、

「旅の人とみえるが、なんでこんな災難におあいなされたのかな？」と聞きますと、こうこたえま
した――。

「どうして私だけ生き残ったのか、ふぎしでなりませんよ！ はじめはエジプトを出て、さびしい
道をとおり、それからたくさんの荷物を船につみ移して、海路を進みました。するといきなり海賊



第百三十三回
三十三回

船に見つかり、あつというまもなく、そのへさきで私どもの船の横腹を突きやぶられたのです。のつていた人はぜんぶおぼれました……どうして私がかこまでただよつてきたのか、さらにおぼえはありません！」

この話を聞いて、私どもはこまりました。ここから船出すれば、海賊にやられる。いつまでも待つていれば、商売にならない。あとへ引返せば、まる損となり、破産するかもしれない——それでいま、みんなおおさわぎしていたところなのです。」

「それはお気のどくに！」と、アフタンジルはいつて、ちよつと考えてからいいました。「おさしつかえなければ、私がいつしよにのりこんであげましょう。そうすれば、だれにも指一本さわらせやしませんよ！ 私の剣はなまくらではない。あなたがたをりつばにまもつてみせます。」

ウサムをはじめ、商人たちはおどりがつてよろこんだ。
「やはり思つたとおり、この人は救いの神さまだった！ さあ、海賊ども、出るなら出てみる！ こつちには守り本尊がついてるんだぞ！」

かれらは帆をあげて、グランシャロ国めざして船出した。順風をうけて、船足ははやかった。ふとアフタンジルは、うすれゆく霧をすかして、一そうの船が近づいてくるのを目にした。マストの旗を長々と風にふきなびかせ、へさきをこちらの船の横腹にむけている。鉄のすきのようにす



どくとがらせた衝角が見えた。

「戦闘用意！」

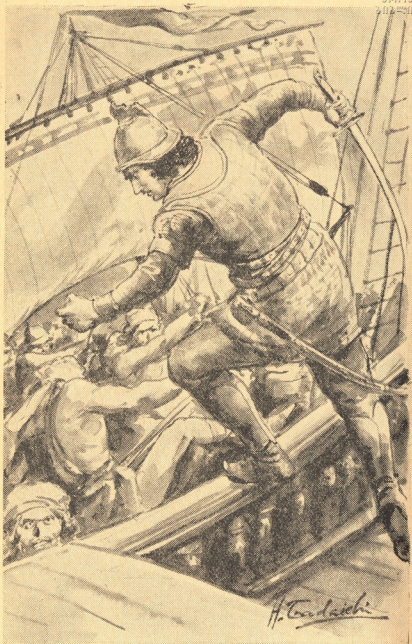
海賊どもの号令の聲が聞え、つづいてらっぱの音が鳴りわたった。

商人たちはちぢみあがつてうろたえ、むちゅうになつて天にいのりをあげだした。

「さわぐんじゃない。安心して私にまかせておきなさい！」と、アフタンジルはしずかにさとした。「私だつてやつらを退治するか、自分がほろびるか、どつちか一つじゃないか！ 運がよければ、百人の敵もおそろしくはない。運が悪ければ——なにをしたつてむだになる。兄弟をも、友だちをも、またけんごな要塞をも、救うことはできない。わかつたかね？ わかつたら、たつたひとりぼっちになつても、なお気を強くもつことだ！ しかし、あなたがたは商人で、戦いにはなれない。こわいのはもつともだから、矢にあたらないよう、船底にかくれていなさい。敵はぜんぶ私がひきうける。私の手には、ライオンの力がある！ 海賊の船をようしやなく血で洗つてやるから！」

とらのすばやさでアフタンジルはよろい、かぶとに身をかため、剣をぬきはなつて、鋼鉄の指でにぎりしめた。力と決意にみちみちていた。成功をかたく信じて、反撃の用意をととのえた。

海賊どもはときの声をあげておどしながら、まっしぐらに近づいてきて、その衝角でいっきに商



大の船を突きやぶろうとした。それよりはやく、アフタンジルはライオンのようにおどりがあって、剣をふりおろした。衝角はもろくもたちきられた。

海賊どもはおどろいて、たちまち逃げごしになった。船のむきをかえて、陸の方へ走り出した。アフタンジルは追いついて、海賊船にとび移った。かれの腕は敵にたちなおるすきをあたえず、かたっぱしから罰をくだした。海賊どもはますますあわてて、ものにおどろいた家畜のむれのようにうき足たった。マストにたたきつけられるものもあれば、海にたたきこまれるものもあった。死体のかげにかくれているものども、助けを天にいのっているものども、引きずり出されて、いたいにあった。アフタンジルは海賊どもに致命的な打撃をあたえた。

「おゆるしください！ 私どもはあなたさまを愛します！」

生き残った海賊どもは涙をながしておがんだ。ひれふすがたを見ると、アフタンジルはもう闘する気持がなくなつた。いまさら、「愛します。」とはみょうないぐさに聞えるけれど、むかしの人はうまいことをいった——愛のみなもとは恐怖である、と。

人間よ、成功に酔つてはいけなない！ 戦いに勝つたといつて、いばつてはいけなない！ 天が助けなければ、どんな勇氣も役にはたたない。千年のまつの大木でさえ、ちっばけな火の粉から燃えてほろびるではないか。天がのぞみさえすれば、ほそいあしだつて、剣のようなはたらきをする。



04103670311
012201010333

アフタンジルはぎっしりつまっている海賊船の船倉をひらき、荷物をみんなはこび出すように命じた。商人たちはよろこんだ。いままで不景気な顔をしていたウサムは、急におせじたらたら、騎士をほめあげた。だが、よほどの学者でなければ、戦士をたたえる資格はない。どんな歌い手でも、かれの勇敢なてがらを歌いあげることとはできないだろう。だから、助けられた連中には、こなおぎなりのほめことばしか口に出なかった。

「えらいだんなさま！ 太陽の光の矢がまたかがやいて、やみを追いはらったのです！」

まるで召使いのように、足に、手に、肩に、髪の毛にキスした。そのありさまを見たら、賢者でも気がおかしくなるだろう。

「英雄の手が私たちを滅亡からすくってくださったのだ！」

そんな声がやたらにひびいていた。

「神は私たちの運命と仕事を天の力にまかせたのです。あからさまのものもあるし、ふかい意味を秘密にかくしたのもある。神からは善の光も出れば、悪のやみも出る、とはこのことをいったのでしよう。」と、アフタンジルはいった。「あなたがたをまもったのは、この天の力にすぎません。いくらほめられても、私ははじめな肉体でしかない。だが、とにかくやくそくをはたして、敵をかたづけました。おかげでこの宝船は、まるで天のさずかりもののように、私の手にはいったわけで

す！

海賊船からの荷物のつみかえは夕がたまでかかった。とても数えることができないほどのおびた
ましい戦利品であった。すっかりはこび出したあとで、海賊船に火を放った。

ウサムは仲間の考えをアフタンジルにつたえた。

「あなたは私どもを死から助けてくださいました。ですから、この船の荷物は当然あなたのもの
です。いいえ、ごえんりよにはおよびません！ ただ、そのおこころざしがあるなら、そのうちのい
くぶんでも私どもに分けてくださいれば、私どもはまんぞくでございます。」

「そんなに私に感謝する必要はありません。」と、アフタンジルはこたえた。「私はつまらぬ人間で
すよ。あなたがたをまもったのは私ではなくて、神なのです。それに私は財宝などすこしも欲しく
はない！ 馬が一頭あればたくさんです。金持になりたければ、わが家においても、いくらでも金持
になれたでしょう。この短い人生に、富がなんになりますか？ しかも、ほんの道づれとして、もう
じきあなたがたとも別れて、生きるか死ぬかのむずかしい仕事に進まなければならないのですか
ら。気にいったら、いくらでもすきに戦利品をおとりなさい。そのかわり、一つおねがいがありま
す。これはあなたがたを信じていうことです。ぜったいに他人にもらしてはいけません。いい
ですね？ …私をキャラバンに入れてください。そして私が戦士であることをないしよにして、



かりに私を隊長のように見せかけ、人が聞いたら、

「はい、これは隊長の荷物です！」と返事していただきたい。私は商人の身なりに着かえて、市場へ出かけます。くれぐれも秘密をまもることを忘れないように！」

「あなたはいのちの恩人です！」すっかりうれしくなった商人たちは口をそろえていった。「おたのみの件はよくわかりました。かならずおいいつけのとおりにいたします。私もはあなたのどれいです。そのほかなんなりとお命じください！」

順風を帆にうけて、船はのぞみの港をさしてしずかに進んでいった。

フアチマのもてなし

船は港にはいった。それはみどりにつつまれた美しい都であった。どの庭園も花でいろどられ、あまよいにおいが人を酔わせるようにただよっていた。

船着場につくと、アフタンジルは大商人のすがたとなつてあらわれ、お金をばらまいた。荷あげの人々はお金の音を聞いてわっと集まり、この外国人の商人のご用をうけたまわろうと首をのぼした。



このさわぎにひとりの庭師がふりかえった。かれは商人のようすがりっぱなのに目を見はり、もつとよく見ようと、庭から船着場へかけつけた。

アフタンジルは聞いた。

「あなたがたはどういう人ですか？ どういう種族ですか？ だれがこの国をおさめているのですか？ この国ではなにがとうとばれていますか？ 品物はたくさんありますか？ どういう品物が買えますか？ そういうことをくわしく知りたいのです。」

庭師が進み出て、こたえた。

「ただいま申しあげますから、お知りになりたいことは、この話からおくみとりください。ここは沿海国ブリモリーリエという大國で、一年かかっても通りぬけることはできないでしょう。首都はグランシャロ、古くからある美しい都です。どこをまわる船でも、この港に立ちよらないことはありません。王さまは力と富とで有名なスルハフ・メリクというかたです。」

——この土地へきたら、たいていの老人は若返ります。ごちそうはいうにおよばず、どこでも思いのままに愉快にすごせるのですからね。庭園には、ばらをはじめとして、一年じゅう花のたえたことがありません。友にはよろこばれ、敵にはそねまれるという国です。商人はなかなかずるいやりかたを發明しました。どこの国とも売ったり買ったりの仲介で、損もするけれど、もうけも大

きい。一文なしが一週間で金持になることもありませう。貧乏人は市場の品物を一年ばらいで手に入れることができます。

——私はこのいちばんの大商人のやしきで庭師として働いています。うちにはむかしから伝わるおもしろいしきたりがありましてね。旅人がやってくる、うちのあるじがまず第一にその貴重品を見ます。外国の商人たちは、まだ商談をはじめないうちに、かならずあるおくりものをしませう。それからあるじは宝石や、ビロードや、絹を買います。そのあとでないと市場へ荷物を出すことができないのです。あなたのようなはじめてのおかたは、まずホテルにおいでになる、するとホテルからうちの客間に案内されるという順序です。どこのホテルにもそういう命令が出ているのです。

——あいにくたゞいまは旅行中で、あるじはるすです。ここにいたら、たいせつなお客さまとして、ずいぶんあなたをかんげいしたことでしょう。しかしおくさまのファチマがいます。おくさまも、だんなのウセインとおなじように、お客さまをそんけいするかたです。お近づきになったら、きつと身内の人のようにおもてなしするにちがいありません。もしそのおつもりなら、さっそくおともをしたてておむかいにあげます。」

「ありがとうございます！　すぐにもおやしきへうかがいしましょう！」と、アフタンジルはこたえた。庭師は汗をふき、ファチマのところへとび帰り、かの女をよろこばせた。

「いいおしらせを持ってきました。まるで太陽のようにまぶしいばかりの美しい人が着いたので。どこか遠い国の商人で、キャラバンの隊長です。じゅすの上着に、むらさきの巻きずきんをしていましたね。私に品物のことや国の習慣のことを聞きますので、くわしくお話ししました。」

女あるじは船へむかえのものたちをおくった。うわきは八方へひろがった。市民たちは店も役所もほうりだして、広場へ集まった。かれらはこんなに美しい人をまだ見たことがなかった。ねたましい気持で見おくった。客はウセインのやしきへ着いた。

ファチマはアフタンジルを門口にむかえた。客を見たたん、かの女は急にのぼせたような気分になり、胸がどきどき鳴った。たがいにあいさつをかわして、すずしい庭にはいった。女あるじはばらのようなほおをそめ、とろりとした微笑をかくすことができなかった。そんなに若くはなかったけれど、まだ胸もまるく、顔もまるく、ぶどう酒のように水々しいからだには、耳輪、首かざり、腕かざりが無数にかがやいていた。

アフタンジルはかの女におくりものをわたした。そのおくりものがまたやしきの人々をおどろかせた。かの女のさしずで宴会がひらかれた。たくさんのお客が集まって、飲んだり食ったりした。宴会がすむと、アフタンジルはいとまをつけて船へ帰った。

あくる朝、かれは商売の話をする商人として、ふたたびファチマのもとをおとずれた。値段のお

りあいがついた貴重品や織物をかの女に売り、

「ありがとうございます。おかげでいいもうけをさせていただきました。」と、おせじをいった。船にもどると、商人たちに行った。

「さあ、こんどはあなたがたがいくらでも商売しなさい。ただし、私の秘密はぜったいにもらしてはいけませんよ！」

アフタンジルはどこまでも商人のていで、たびたびファチマをたずね、ファチマもまたかれのところへきて、空に星が光りだすころまで話しこんだ。いろいろな話が、あとからあとからとつきなかつた。ファチマはそれが心から楽しかつた。

やしきに帰つてねると、アフタンジルのゆめを見た。

——あたし、いったいどうしたんだろう？ ——と自分ながらふしぎだつた。なみだが雨のように降つた。——この気持をうちあげようかしら？ ——でもおこられたら、もうそれきり会えなくなる！ かくしていたら？ 胸がはりさけそう、とてもがまんできない。そうだ、いつそ手紙に書こう！ ほかにもう、しようがない。傷を見せなければ、お医者さまでも薬のつけようがないのだから。ファチマは手紙を書いた。

「あなたは花の中でお生まれになったかたです。あたしは自分がどうしてこのような気持になった

のか、自分でもわからないのです。あなたのやさしい光に照らされていないと、いまにもしぼんでいきそうです。夜の星々でさえあなたには心をひかれるでしょう。神はこれを知って、あわれんでくださるにちがいありません。あなたもきつとあわれんでくださるでしょう。さもないと、あたしは気がいになるばかりです。この手紙にご返事があるまでは、あたしの魂の呼び声におこたえがあるまでは、黒雲に光をのぞむように、のぞみをすてないでいます。生きるか、死ぬか？ 一刻もはやくおしえてください！

アフタンジルはファチマの手紙を兄弟のたよりのようにしずかに読んだ。そして考えた。

——なるほど、これはすこし気が狂っているようだ。まさかファチマが自分をアラビアの王女と同列に考えているわけでもあるまいが、ずいぶんむてっぽうなことをたくらんだものだ。ばかばかしい！

いったんはおこって、手紙をすてたものの、しばらくたって、また考えなおした。

——ここは外国だ。だれが私を援助してくれるだろう？ かどわかされた姫君のゆくえをたずねるためには、どんなことでもしなければならぬ。いやも、おうも、いってはいられない！ 見たところ、ファチマはこの国にきた人、通っていく人を、みんな自分にひきつけ、気にいった旅人には、どんなサービスをもおしまないらしい。だからことによると、姫君のことも知ってるかもしれ



ない。これは私にとっていちばんたいせつな点だ。だいたい女というものは、ちょっとした気まぐれでだれかがすきになると、すぐむちゅうになって、どんな秘密でもうちあけてしまうものだ。よし、たしかな見当をつけるために、その気まぐれにこたえてやろう。おたがいにゆるしあわなければ、なにごとでもできやしない。あるものは冷えてしまふし、のぞみのものは見つからない！ どうせ世の中なんて、うす暗いかげにくるまれた夕がたみたいに、たよりないものだ。ひしゃくからは、その中にあるものしか流れ出はしない！

アフタンジルは返事を書いた。

《あなたは私のさきを越しました。じつは私もほのおにつつまれていたのです！ すこしでも会わずにいてつらいのはおなじことです。心と心が一つ調子でひびきあつたら、どんなにか楽しいことでしょう！》

この返事はファチマをとてもよろこばせた。かの女はまた手紙を書いた。

《あたしはやっと生きかえりました。はやくお目にかかりたく、日が暮れしだい、すぐおいでくだ

さい！》

入江やしきの殺人

アフタンジルは女あるじのやしきへむかった。すると、かの女の召使いが息せきききつてかけてきて、呼びとめた。

「ファチマのおねがいで、お目にかかる時間をすこしのばしていただきたい、とのことです！」
アフタンジルはおこつて、しかりつけた。

「なにをばかなこというか！」

そのまま足をはこんで、もうようすがわかっているやしきの中を、さつさとファチマのへやへすすんだ。へやの中はうす暗かった。女あるじはあおい顔色をして、おどおどした目でアフタンジルをむかえたが、かれにすぐ帰ってくれ、とはどうしてもいい出しかねた。

アフタンジルはまだ口をきかないうちにファチマをだいた。このとき、いきなりドアがあいて、いまを盛りりの若い男がはいってきた。すぐそれにつづいて強そうなひとりの従者があらわれた。若い男は岩につきあたたつたように、客の前でたじたとあとしぎった。ファチマは男を見て、ふるえあがった。

「見つけたぞ！ いまなにをしていたんだ？」と、男は低い声でどなった。「このいたずら女め！ 突んと楽しむがいい。そのかわり、夜があげたら、うんと後悔しなければならぬぞ！ けがらわしい！ はじ知らず！ あしたはおまえの不貞が百倍になっておまえにむくわれるだろう。おれはおまえの子どもたちをおまえにかみつかせてやるんだ。ざまあみろ！」

怒りにひげをかきむしりながら、若い男は消えた。ファチマはほおをつめでひっかき、気が狂ったように身もだえして、泣きさげんだ。

「みんなは石であたしを打つでしょう！ だんなも子どもたちもあたしをかわいそうとは思わないでしょう！ やしきも財産もあたしにはもう灰とおなじです。あたしは地獄の責苦にあたいする女です。あたしのおかげでだんなの名は永遠にけがされたのです！」

アフタンジルはこのさわぎにあっけにとられた。

「なんだってそんなに泣きわめくのです？ はずかしめられたからですか？ なぜあの男があんなにおどしたんです？ それともあなたにそれだけのわけがあるのですか？ いったいどうしてかれがいきなりこの家にふみこんできたのか、泣かないで、話してごらんなさい。」

「もうおしまいだわ！ そのわけは、とてもお話できません。またお話してもおわかりにはなりません！ このはずかしいおこないで、あたしは自分の子どもたちをほろぼしました。またあなた



の愛は、するどい剣のように、あたしの心をさしつらぬきました。いくら神のお慈悲をねがって
も、もうおそい！ 自分の血を飲んだものには、お医者も助ける力はない！ ふとしたことで、あ
なたに愛を感じたのがいけなかったのです。あしたになれば、あたしの名譽をはずかした男と対
決しなければなりません。おねがいです。あたしと子どもたちを救ってください。あの乱暴者をか
たづけてください。そのあとなら、どうしてこんなにとりみだしたのか、そのわけを聞いてもいた
だけでしょう。でなければ、すぐに荷物をまとめて、このグランシャロをひきあげ、海路をお帰
りください。このままでは、あなたにもたいへんごめいわくかけることになります。なによりもあ
の悪者が、うちのだんなとあたしの子どもたちにはじをかかせることを思うと、ほんとにぞつとし
ますわ！」

アフトンジルはファチマがかわいそうになった。目を光らせて立ちあがり、手ごろの棒をつかん
だ。

「そんなに悪いやつなら、おのぞみどおり、罰してやりましょう。ご安心なさい。生かしてはおか
ないから！ すぐ召使いを呼んで、用心してやつの家まで私を案内するよう、いいつけてくださ
い。なに、私ひとりでじゅうぶんです。たぶん、今夜じゅうにかたをつけます。それまで、さわが
ないで、しずかに待っていてください。」

「復讐がうまくいったら、あたしはふたたび自由に息をつくことができます。ただ一つ、あたしの指輪がかれの手にあるのが心配です。どうかそれもとりかえしてきてください！」

この家の召使いひとりをつれて、アフタンジルはそとへ出た。町はあらかたねしずまっていた。通りぬけて、入江の方にむかうと、海ぎわにエメラルド色の美しいやしきが見えた。テラスの上にテラスをかさね、設計でも装飾でも、おどろくほどこつたものであった。アフタンジルは召使いにあいずして、へいのかげに身をひそめた。

「どなたにご用があるのでですか？」と、召使いはささやいた。「あるじでしたら、ほら、あすこにらんかんが黒くつき出てるでしょう。あすこにねてるか、ひまをもてあましてるか、どっちかですよ。」

門のわきには門番がふたり、いねむりしていた。アフタンジルは音をたてずにしのびより、いっぺんにふたりの首をつかんで、目よりも高くさしあげると、ふたりの頭と頭をかちあわせた。頭はたちまち粉になった。

ドアをあけて、家の中にはいり、見当をつけていたへやへ急いだ。かえり血をあびたので、気が荒くなり、力がもりあがっていた。乱暴者はベッドにねていた。アフタンジルはかれをたたきおこすと同時に、床になげつけ、剣をぬいて胸をつきさした。友のためには太陽のようであったが、戦

いにはとらのように荒々しかった。ファチマの指輪がはまっている指をきりおとすと、つめたい死体をテラスから海へほうり投げた。こんな不名誉ななきがらの上に墓をきずくのはもったいないと思つた。

夜のとぼりのしずけさの中で復讐はおこなわれた。ばらは死のとげを犠牲者につきさした。アフタンジルはぶれいな若者のかたをつけて、すぐそのやしきを去つた。足はかるく地面をふんでいった。ファチマのへやにもどると、かれはいった。

「あの無礼者は私の手で罰をうけました。私を案内した召使いは、神かけて他言はしないことをちかいました。これがあなたの指輪です……さてこんどはあなたから、あの無礼者がなんでそんなに危険だったのか、そのわけをはじめからくわしく聞く順番になりました。」

ファチマはかれのひざをだいて、しずかにこたえた。

「あの人のいのちをたちきつてくださったおかげで、あたしは苦しみからのがれることができました。あたしばかりか、どんな子どもたちも、きょうから生まれかわつたようになるのです。復讐の名で、今夜かれの血が流された！ もうお礼のことばもございません。ではこれから、くわしくいっさいのお話をいたします。どうか同情をもつて聞いてください……。」

ネスタンが商人の妻に救われたてんまつ

この国には、つぎのような習慣がある——新しい年がはじまるその日には、だれも旅だちしない、商人も取引をしない。人々はおめかしをして、新しい服を着る。主人はめいめいのやかたにけらいたちを招待する。商人はお年玉を持って、じかに王さまのお城へあがる。すると王さまは商人のよろこびそうな品物でお返しをする。十日のあいだ、ハーブの音はなりやまず、うれしそうな底ぬけさわぎがつづく。競技場ではボール遊びや競馬がもよおされる。

グランシャロの大商人ウセインは商人たちの頭目として王さまのもとへあがり、その妻ファチマは商人のおかみさんたちを集めて後宮へあがる。これは長年まもられてきたウセイン夫妻の義務である。ファチマにひきいられた女たちは、金持のおかみさんも、びんぼう人のおかみさんも、それぞれに応じたお年玉を王妃にさしあげ、後宮でおまつりのような一日を楽しくおくって家に帰る。さて、ある年の元日のこと、ファチマは首都の商人のおかみさんたちをぜんぶ集めて王妃のもとへお祝いにあがった。ごちそうもようやく終つて、楽しい一日も暮れようとするころ、一同は王妃にいとまをつげ、ふたたびファチマの前に集まつた。

ファチマは名のある商人のおかみさんたちをまねいて、海岸の庭園におりていった。そこには楽士や歌い手がおおぜい待っていて、たくみな歌と演奏で客たちをうっとりさせた。ファチマは衣裳をかえたり、髪のかたちをかえたりして、はしゃいだ。木々のあいだでは、あちこちにかけておしゃべりがはずんでいたが、遠くは空と木とが紺青の色にとけあって、ひっそりとしずまっていた。すずしい、さわやかなゆうべであった。

ところがどうしたわけか、ファチマはにわか気分がわるくなつた。口をきくのもおっくうで、むっとりしてしまつたので、仲間はそつとかの女から離れていった。気がついてみると、庭にはかの女ひとりしか残っていなかった。なんだかみようにうら悲しかった。

見るともなしに、海の遠くをながめているうちに、結ばれていた心がほどけて、しだいに気分がなおつてきた。するとこのとき、紺青のひろがりの中に、なにか一点のひらめくものが目にうつつた。見わけることはできなかった——鳥か、それとも海のけものか？

だがそれはすさまじいはやさでみるみる近づいてきた。ファチマは一そうの小船が岸に着いたのを見た。船人たちの顔は炭のようで、からだは夜のやみよりもお黒かった。かれらの中に捕虜の娘のすがたがくつきりとうかびあがった。あまりの美しさに、ファチマはその顔から目をはずすとがでなかつた。やがて庭のかげになつて陸地に、船人がふたりあがって、人がいないこと

をたしかめるかのように、きよろきよろ見まわした。しんとした岸べには、かれらをおどろかすよなもの、なんにもなかった。ファチマは息をころして、じつとようすをうかがった。

黒人たちはかごをすばやく岸に移した。かごから娘がおりてきた。その瞬間、金色の光で岩が照らし出されたように思われた。ふっくらしたほおは燃えるようにかがやいていた。みどりの服を着て、すらりと立ったすがたといい、ま昼をあざむくばかりの顔だちといい、この世にこれにまさる美しい人を見つけることができるだろうか？

ファチマはものかげに召使いを四人呼びよせた。

「あの美しい人は、おそらく、インドからきたのにちがいない。」と、ファチマはいった。「おまえたちは黒人たちのそばへそっとしのびよって、娘のことを聞きただし、ぜひとも買い取るように話をつけておいで。お金はいくら高くてもかまわない。山ほど金貨をつんだって、とてもあの娘のねうちにはおよばないのだからね！ もしどうしても売らないといったら、力づくでもうばっておいで。娘の顔をしげしげと見ないことには、あたしの虫はおさまらないよ！」

召使いたちはひそかに岸べにおりていき、捕虜の娘を売ってくれるようにたのんだ。しかし黒人たちは、頭からこの話をうけつけなかった。もたもたするばかりで、とうてい話はまとまらないとみてとったので、ファチマはかんしゃくをおこしてさげんだ。



「殺しておしまい！」

召使^{めいし}たちは命令^{めいれい}をはたした。首^{くび}のない死体^{したたい}はぜんぶ海^{うみ}へ投げこまれた。捕虜^{とらわれ}の娘^{むすめ}はファチマの前^{まへ}につれ出^でされた。ファチマはうっとりとして見^みとれた。どんなすぐれた画家^がだって、この娘^{むすめ}の顔^{かほ}やすがたをさながらに描^かく筆^{ふで}をもたないだろう！ この娘^{むすめ}のためなら、自分^{じぶん}のいのちをささげてもおしくはない、とまで感動^{かんとく}した。

わが娘^{むすめ}のようにやさしくいたわって、ファチマはかの女^{むすめ}を自分^{じぶん}のやしきの寢室^{ねしつ}に案内^{あんない}した。人目^{ひとめ}につかないように、との心^{こころ}くばりからであった。ファチマは聞いた。

「あなたはどうなつた？ どこのお国^{くに}のおじょうさん？ やんごとなきおかたのように見^みうけられますが、どうして、こんなめにおあいなされたのでしょうか？」

だがかの女^{むすめ}はなみだでほおをぬらすばかりで、かたく秘密^{ひみつ}をまもり、なんにもこたえなかった。ファチマはいくぶんでもその悲^{かな}しみをやわらげてあげようとほねおつた。そのかいはなかったけれど、かの女^{むすめ}は運命^{うんめい}をなげいてはいなかった。ただ泣^なくばかりであった。ファチマはかの女^{むすめ}がかわいそうで、胸^{むね}がいたみ、夜^よもろくにねむれなかった。

それでも、ある日^ひ、かの女^{むすめ}はいった。

「ごしんせつなおばさま！ あたしの不幸^{ふこう}の物語^{ものがたり}は、うそつきの作者^{さくしや}でも考^{かんが}え出^でせないほど、きび

しいものですわ！ 天はあたしを見知らぬ土地をさまようように運命づけたのです。そのいきさつをお知りになったら、あなたもきつと神にもんくをつけたくおなりでしょう。」

そういわれてみると、なおいつそうそのいきさつを知らないではすまされない気持ちになった。

ファチマはいいおりをみて、秘密のヴェールを引きのけてみようと決心した。

娘を人の目からかくすためには、ずいぶん心をくだいた。まどには厚いカーテンをおろした。それでもまちがいがあつてはいけないので、ごく忠実なアラビア人のボーイをひとりつけた。こうしてときどき見まわっているうちに、ファチマはますます娘にひきつけられ、いまではもうかの女がいないと自分の生活がまるきりつまらないもののように思われてきた。

「お顔色のわるいこと、そしてそのなみだ——どうしたわけなのでしょうね？」

どうせ答はないと知りながらも、そう聞かすにはいられなかつた。娘の衣裳がまたファチマをおどろかせていた。めずらしいものは、いくらでも見なれていたはずなのに、このようなふしぎな織物はまったくなぞであつた。絹よりもかるく、しかも鋼鉄の板よりもじょうぶであつた。

ファチマは娘をずっと離れた一室にかくして、だんなにもないしよにしていた。だんながおしゃべりだということを知っていたからであつた。うっかり王さまにでもしゃべられたら、このうえまたどんなさいなんがふりかかるともしれなかつた。

——あの娘の不幸のわけを知って、助けてやれるものなら、なんともして助けてやりたい——とファチマは考えた。——それにしても、うちのだんなにたよらないで、だれにたよることができよう？　しかたがない、ともかくだんなにうちあけて、助けてだてを見つけることにしよう。けっして人には話さないと打ちあけて、あの人だって、地獄で苦しむのがいやなら、ちかいを破りはしないだろうから。

そこである日、なにげなく、だんなにいった。

「ちよつとお話があるんですけどね。ただ首にかけて秘密をまもることをちかつかってくださらないと、申しあげられませんか。」

「ちかいを破れば地獄におちるさ！」と、ウセインはこたえた。「ちかいます——悪魔にも、子どもにも、老人にも、兄弟にも、敵にも、けっして秘密はもらしません！」

ファチマはだんなに知っていることをのこらず話し、

「ではその娘をあなたに見せてあげます。」と、道をひらいた。

ひと目見て、ウセインは電気うたれたようにふるえあがった。こんな美しい人を夢にも見たこととはなかった。まぶしくて、思わず目をふせた。

「これは奇蹟だ！　どこの国のお姫さまだろう？　もしほんとうに人間の娘だとしたら、私はこの

場で死んだっていいよ！」

「ほんとうに人間の娘かどうか、もしそうだとしたら、なんでそんなに悲しんでいるのか、なぜちっともうちとけないで、なんにもあたしたちに話さないのか、それを聞いてみようじゃありませんか？」

ふたりはひそひそ相談した。ファチマはだんながかたくちかったことに安心して、娘にむかっていった。

「あなたはどうしてそんなにあたしたちをやきもきさせるのでしょうか？ なおすお薬があることをごぞんじなら、うちあけてくださってもいいと思うわ。ごらんなさい、ルビーのようなほおが、サフランのようにだんだん黄ばんでいくではありませんか。」

娘はだまってファチマをにらんだ。やさしくちびるのぼらの中で、へびのようにちらりと白い歯がのぞいた。胸の上にたれさがった黒髪のかげが、日の光をさえぎるりゅうのように、ほおをかげさせた。なんでそんなにふきげんになったのか、ファチマがわけもわからずおどおどしているうちに、めすのとらのように怒りにぎらぎらしていた目から、にわかになみだがあふれおちた。「あちらへいってください、おねがいです。」と、しずかに娘はいった。

ウセインもファチマもいっしょになつて泣いた。もうかさねて聞きただすことはできなかつた。

娘をなぐさめ、サービスにつとめたけれど、かの女はごちそうのさらには目もくれず、くだものに手もふれなかった。

「あの人をいらいらさせることはもうやめたほうがいいよ！」自分たちのへやへもどつてから、ウセインはいった。「どうもあれは人間の子どもではないね。だって、別れたあと、しきりに胸がいたむじゃないか。天があの人のかわりに子どもたちをめしあげるといっても、もんくはいえないような気がするよ！」

まったく、かの女のそばにいれば楽しいのに、そばを離れるとも悲しくなった。商談などでつかれたあとは、すぐかの女のへやをおとずれた。まるでわなにかかったように、ふたりはこの素性の知れない娘にむちゆうになった。

ウセインのうらざりとネスタンの逃走

夜は日にかわり、日は夜に移りながら、時はながれていった。

ある日、だんないった。

「おくりものをさしあげなければならぬので、ちょっと王さまのところへいってくるよ。」



「さぞおよろこびなさるでしょうね。」と、ファチマはこたえ、だんなを手つだつて、いれものに真珠や宝石をいっぱいつめた。「でも気をつけなければいけませんよ。なぞの奇蹟のことを、ひと口でももらしたら、たいへんですからね。」

「だいじょうぶだ。この首をきられたつてしゃべりなどするもんか！」

ウセインはしたくをととのえて王宮へあがった。王さまはかれを親友のようにむかえ、みごとなおくりものをうけとつて、自分のとなりへまねいた。ウセインは王さまといっしょにさかずきをほした。するとまた新しい酒がめがテーブルにはこぼれた。ウセインはいい気持によつてきた。舌がむずむずしてきた。ちかいを忘れ、メッカとコーランの神聖をわすれた。そこへまた王さまがかれをうちようてんにするようなことをはいた。

「おまえのおくりものはまったくすばらしい。いくら見てもあきないよ。いったいこんな大きい真珠やルビーをどこで手に入れたのかね？ 私にはとうていこれに相当するお礼はできないよ！」

「王さま！ あなたは黄金の光で地上のものすべてをやしなつておられます。」と、ウセインは調子にのつてしゃべりだした。「私の財産もあなたのおかげです。私が生まれたことだつて、やはり王さまのおめぐみによるところ、このご恩をなんでおかえしできるでしょうか？ 宝石などはどこにもありません。ただ王さまでなければお持ちになれないような、とうといおくりものがあつたら、どん





なにしあわせかされません。じつはてまえにそういうおくりものの心あたりがございます。ひと目ごらんになれば、美しい天上の花よめにびっくりなされて、それこそてまえに感謝されるにちがいございませぬ。」

このふしぎな話に王さまは胸をときめかせて、すぐその花よめをつれてくるようにといいつけた。侍従長がやりもち五十人をつれて、ウセインのやしきへむかった。

「ただちに美しい娘をうけとり、保護するため王宮へつれきたるべし！」

この命令書を見て、ファチマはきもをつぶした。

「なんですか、この娘というのは？ なにかのおまぢがいではありませんか？」

「いや、おまえのところにいる地上の太陽のような人のことだ！」

王さまの復讐は神の怒りよりもおそろしかった。ファチマはこしをぬかした。はうようにして娘のもとにかけつけ、涙をぼろぼろこぼしながら、ささやいた。

「おじょうさま、もう運命もこれまでです。神はあたしにおめぐみをたまわらず、またむごいめにあわせようとしています。ただいま兵隊どもがきて、あなたを王宮につれていく、と申しています。」

「不幸にはもう数知れず会ってますわ！」と、娘はこたえた。「神はどこにでもさいなんをふりま

「いっているのです。これにぶつかったがさいご、もうめつたに幸福にはお目にかかれません。あたしにはかくごができています。どんないたでも、あたしをおどろかすことはできないでしょう！」

危険な瞬間に力がみなぎるめすのとらのように、娘は立ちあがった。知らぬ国々をひきまわされつつかはてた、とらわれ人とも見えず、頭を高くあげ、ヴェールで顔をつつんだ。

ファチマは地下の宝庫へおりて、真珠や寶石をたくさん持つてきた。それを娘の帯の中へぬいこみながら、聞えるか聞えないかの声でささやいた。

「なにかの場合にお役にたつでしょう！」

それからやりをかまえないかめしい兵隊たちに娘をひきわたした。

往来にほこりをあげて、やじうまたちが走りまわった。かれらはふしぎな天女を見ようとしてひしめいた。警官もこの群集をせいりすることができなかった。

娘の到着をつげるドラの音で、王さまはむかえに出た。

「おっ！」とさげんだまま、王さまは目がくらんで、しばらく立ちすくんでいた。「いままで見えてきたものは、すべてなんとくだらないものだったろう！でも、これは夢じゃないかしら？この人のためなら、なにもかもふりすてて、地のはてまでもかけていくだろう！」

王さまは娘をわがへやへみちびいて、となりにすわらせ、

「おまえはだれだい？ 山の娘かね、谷の娘かね？」と、いろいろ問いただした。

しかしなぞのような悲しみの色をたたえた顔はつめたく沈んで、口は眞珠のかがやきをかたくとぎしたままであつた。娘はどんな人に会つても心を動かされなかつた——尊敬などはかの女には用がなかつた！ 過ぎ去つた遠いむかしのことが思い出されるばかりであつた。

王さまはひそかに考へた。

——どうしても秘密をさぐり出さなければならぬが、それには二つのかぎがあるようだ。見たところ、愛する人と別れ別れになつて、なお愛し、そして苦しんでいるらしい。そのために悲しい目をして、口をとぎしているのではないか？ でなければ、世の常の娘とちがつて、生活の楽しみを知らず、またおそれということも知らないのだらう。不幸と幸福とは入れかわるものだ、といつても、それはでたらめなおとぎ話としか思わぬ。つまり、はとみたいに、ぜんぜん自分たちの知らない世界に住んでいるのではないか？ とにかく、いま戦争にいつているわが子が帰ってくるのを待とう。それまでこの王宮でたいせつにもてなしておこう。わが子と夫婦になれば、いまわからないことも、わかってくるにちがいない。

王子は勇敢な騎士として名を知られていた。軍隊の指揮官としてもりっぱな才能をあらわし、敵におそれられていた。いまも遠い戦場にあつて、いく年も長びいた戦争のしまつをつけようとして



新編 小説 全集
第 一 卷 第 一 章

る。王さまはこの王子の花よめに、とらわれの娘を選んだ。

娘のために宝石まばゆい衣裳がしたてられた。娘のあたまに、光りかがやくかんむりがのせられた。水晶がばらのように赤くきらめいた。この娘にこのかざり——星をちりばめた空もその光を失うであらう！ かの女を保護するために、おとなしいけらい九人がつけられた。

王さまはいつものように、宴会をひらいた。ウセインにはめずらしいおくりもののお札に数々の宝物をたまわった。客たちのテーブルにはドラやらっぱの音がにぎやかに鳴りひびいた。客たちはみなよっぱらって、なかなか帰っていかなかった。

とらわれの娘は、つまりダレジャン・ネスタンは、ひとりわがへやでわが身の不幸を案じていた。

——あたしはどれいよりもまだふしあわせだわ！ いったい、だれと結婚させようとするのだから？ ここはどこだろう？ どうしたらいいのだから？ なにを決心しなければならぬのだから？ でもあたしは苦しみにたえてみせるわ！ どんな人だってあたしをつかまえることはできやしない。迷って、わが身に手をあげるものはみじめじゃないの？ 人間は重い試験のときこそ、知恵にたよるもんだわ！

かの女は番人たちにいった。

「わるいたくらみが成功するわけはありません！ あなたがたの王さまが、どんなにあたしを結婚

させたが、その前にあたしは死んでしまいます。これはあたしのかたい決心です。あんなにらっぱを鳴らしたり、さわいだりして、それがなんになるでしょう？ 権力や玉座がなんでしょう？

う？ あたしの道は別です。たとえ王子さまがどんなにりっぱなかたであっても、あたしにとって敵とかわりません。王さまの命令がなんでしよう？ あたしの心配は別のところにあります。あたしはこんな王宮でくらすことはできないのです。いまにもこの短剣で胸をさせば、あたしはもう永遠に安らかになれるでしょう。そのかわり、あなたがたは王さまの怒りにふれて、首きり役人の手にわたされます。そのくらいなら、この帯にしまつてあるあたしの宝物をおとりになつたほうが、どんなにいいかしれないじゃありませんか。あたしが逃げるのを助けてくださるか、それとも首をきられるか、おきめになつてください！

ネスタンは番人たちに真珠と宝石を手わたした。

「さあ、逃げ道をおしえてください。あたしが自由になつたら、あなたがたはきつと神に祝福されますよ！」

高価な宝石は番人たちの知恵をくもらせた。目に目がくらんで、おそろしい罰のことをわすれ、さつそく逃走の相談にとりかかった。黄金は、見た目にはきれいだけれど、人によるこびをあたえない。それはなみだには無関心で、死ぬほど欲で苦しめる。しかも増えても減つても心配で、魂

にふかくくい入つて、天国への道をとぎす!

番人たちはかの女に忠実をちかい、そのうちのひとりには服をぬいでわたした。ネスタンはいままで服をぬいで、それに着かえ、宴会の広間の前をこっそり通りぬけて、門へむかった。こうしてかの女は大蛇の口をのがれた。番人たちもかの女につづいて王宮から逃げ去った。

あわただしくドアをたたたく音に、ファチマは目をさました。

「ファチマ!」

声をころしてそう呼ぶ声が聞えた。

ファチマは娘を強くだきしめた。だが娘は危険をおそれて、この古いなじみのやしきの中へははいらなかった。

「いただいた宝石のおかげで助かりました。」と、娘はいった。「あなたのごしんせつは生涯わすれません。でもここにいてはきけんです。すぐ追つ手がきて、あたしを王さまのそこへつれもどすでしょう。どうか馬を一回あたしにおめぐみください。」

ファチマはうまやから馬をひき出して、娘を助けのせた。娘は感謝のなみだをうかべて、馬にひとむちあてた。そのあとを見送つて、ファチマは泣いた。せつかくいいたねをまいておきながら、収穫をかりとることはできなかつた!

まもなく、狩りでもはじまったかのようななさわがしいもの音が聞えてきた。兵隊たちは都の出入口をげんじゆうにかため、一部はウセインのやしきへおし入った。

「この家で逃げた娘が見つかったら、王さまにあたしの首をさしあげますよ！」と、ファチマは兵隊たちにいった。

かれらはすっかり家さがししたあげく、から手でひきあげていった。その日から、王さまはむらさき色の喪服を着て、ふさぎこんでしまった。太陽が雲にかくれば、光を楽しむことはできなくなる。

その日から、ファチマはウセインの顔を見るのもいやになった。そのうらざりをゆるせない気がした。そこへつけこんだのが、王宮の宴会係の役人である。かれはファチマのごきげんとりに、しばしかの女をおとすれた。かの女もわるい気持ちでなくかれをむかえた。ファチマがおろかなやぎだとすれば、これはずるいおすのやぎであった。男にとって、はずべきものがひきようなら、女にとって、はずべきものはむら気である。ファチマはつい口をすべらせて、逃げた娘に馬をやって助けたしだいをこの男にもらした。こうしてかの女はたいへんな秘密をかれの手にぎられた。

アフタンジルがこの都にきた時分には、その宴会係の役人は旅に出ていた。ところがついきのうのこと、アフタンジルがファチマの手紙を見て、そのやしきをおとすれるというその日、ふいに役

人は旅から帰ってきた。それを知ると、かの女はあわてて、

「お目にかかる時間をすこしのばしていただきたい。」と、アフタンジルにたのんだ。

アフタンジルはかまわず、ファチマのへやへすすんだ。とたんに、役人があらわれて、すぐくおどした。かよいい女性をはずかしめ、おどしたひきようなふるまいが、ついに自分を滅ぼすことになつたのである……。

……ファチマはここまで物語つてきて、ふかいため息をついた。

「あの男が生きていたら、娘の一件をのこらず、ばらしたにちがいありません。そうすれば王さまはかんかんにおこつて、もちろんこのやしきをとりこわすばかりか、あたしを死刑にし、また子どもたちをも生かしてはおかなかつたでしょう。あぶない毒蛇からのがれたのはまったくあなたのおかげです。あたしの不幸は終つたのです！」

「そういうえば、どこかで読んだおぼえがありますよ——《親しい人が敵になったら、ほんとの敵よりもっと危険だ。》ってね。」と、アフタンジルはこたえた。「分別のある人はやたらに秘密などしゃべらないものですが、ともかくあの乱暴者のことは、もうなんにも心配はありません。海の底でねむつてますからね……ところで、その娘はそれからどうなつたのでしょうか？ なにかお聞きになつたことはありませんか？」



「それがやはりたいへんなたよりでしてね……。」と、またファチマは話しはじめた。

摩天城のとりこ

ウセインはちかいをやぶった罪人であり、不信心なうらぎりものである——そう考えると、ファチマはかれのそばにいるのがけがらわしいように感じられ、ウセインもかの女がなんとなくけむつたくて、よりつかないようになった。やしきにいても、ファチマはすこしも楽しくなかった。昼は消え去った娘のことを思い、夜はかの女をゆめに見た。

ある日の暮れがた、さびしさにたえかねてかの女はやしきを出た。宿場のやどやに立ちよって、いく人くる人の話でも聞いていたら、すこしは気ばらしになるかもしれない。

するとひとりの旅人が、つづいて三人づれが、やどやの土間にはいつてきた。はじめの男は低い身分のけらいらしく、あらいあさの服を着ていた。四人はかたすみの台の前にこしをおろし、てんでに古ぼけた包みをひらいて、べんとうをたべはじめた。食べる口もいそがしかつたが、しゃべる口もそれに負けなかつた。

「ここにとまりあわせたといいものなにかの縁さ。」と、はじめの男がいった。「旅は道づれといっ

ね、おたがいになじみになったが、あしたのことはわからない。だからここでおれたちがなにものなのか、どこからきたのか、ぜびとも知っておく必要がある！ めいめいがそれぞれ自分のことを話してみようじゃないか。」

ファチマはかれらの話を興がって聞いていた。いちばんおしまいが、はじめの男の話す順番であつた。

「おまえさんたちの話は、だいたいきまりきつたようなものだが、そこへいくと、おれの話はまず大つぶの真珠だね。ただで聞かせてはおいしくらいのもんだ……。」

そうまえおきして、かれがしゃべりだした話は、しだいにファチマの注意をひいていった。

——かれはカジエツチ城の王さまのけらいでもあり、兵隊でもあつた。王さまは長いこと、わずらっていたあげく、ついにこの世を去り、あとにふたりの男の子をのこした。おばがこの子たちの養育にあつた。城の全権は女王ズラルズフトの手に移つた。女王にはおそろしいものがなかつた。戦えばかならず敵をやぶり、まもつては部将たちが鉄壁のようにそなえをかためていた。ふたりの兄弟——ローサンとローリはいつしかりつばな若者に成長していた。

外国にいる女王の姉が死んだ、という知らせがきた。高官たちは集まって相談した。

「どういふふうに、この悲しい知らせを女王さまに伝えたものだらうな？」

千人部隊の総大将ロシャークはいった。

「私にはめそめそ泣いているひまはありません。そのひまには、街道に出て、幸福をさがしたほうがましです。神が私たちを助けて、どっさり獲物をさずけてくださったなら、それをおみやげとして、この私が女王さまのところへおくやみにまいます。いかがですか、みなさん？」

かれは強い兵隊百人をよりぬいて、街道に待ちぶせした。そして夜になると、通る人々をおそい、キャラバンを略奪した。キャラバンの護衛隊などは、かれに手も足も出なかつた。

ある夜、一隊はもの音に聞き耳たてながら、草原を進んでいった。すると、ふいに、はるかかなたに、なにか光るものが見えた。

「おやっ！ 太陽が地面におちたんじゃないのか？」

一時はそう考えたが、まさか！ では月か、空あかりか？ そのどちらでもないらしい。いろいろな意見が出て、けつきよくなんにも見当がつかないまま、おそろおそろ、あたりのやみを照らしている、その光の方へ近づいていった。一隊は用心ぶかく、ふしぎな光を遠巻きにとりまいた。このとき、おもいもかけず、なにもものかの大きな声がひびいた。

「おまえたちはなにものです？ なんのために武器を持ってかけていくんです？ 私は沿海国の王さまの使者として、カジエツチ城へむかうものです。」

一隊は遠巻きの輪をだんだんにちぢめていった。光のものは馬にのっているひとりの人物であることがわかった。その顔からまぶしい光がさして、野づらをあかあかと照らしていた。目も怒りにもえて、しかるように一隊をにらんでいた。兵隊たちは足がすくみ、息が止まった。

だがさすがにロシヤークは大将だけのねうちがあった。馬上の人が若い女性であることを見てとった。それに、王さまの使者だというのに、ひとりも従者がついていないのはおかしいとらんだ。かれは兵隊たちに逃げ道をふさがせておいて、娘をつかまえた。

「おまえはどこの国の生まれだね？」

「どこへいくつもりなんだい？」

兵隊たちは口々に聞いたが、娘はなみだをながすばかりで、なんにもこたえなかった。

「なにか深いわけがあるのだろう。」と、ロシヤークはいった。「いくら聞いたって、こんなところで秘密をあかすはずもあるまい。ともかく女王さまにおまかせしよう。こんな世にもめずらしい宝物がさずかったというのも、女王さまがえらいおかただからだ。きつとおよろこびになって、たんなりごほうびをたまわるだろう。この獲物をわれわれがかくしてみる。それこそ、どんなおとがめをうけるかもしれないからな。」

大将の命令にそむくことはできない。一隊は娘をたいせつにいたわりながら、道を引返してカ

シエツチ城へまっすぐにもどった……。

「そのとちゆうで、おれは大将に休暇をねがい出たのさ。」と、旅の男は話をむすんだ。「ちよつとおもわくがあつたのでね。この沿海国のグランシヤロをのぞいて、品物をかき集め、それから大急ぎで大将に追いつくつもりなんだよ。」

旅の男の話は聞き手をうならせた。ファチマもひそかによろこんだ。娘に会えるのぞみが見えてきたように思った。一文なしのびんぼう人が金貨をひろつたような気持であつた。ファチマはその旅の男を呼んで、ふしぎな娘を見たいを、もつとくわしく話すようにたのんだ。男はその話をくりかえした。ファチマはいままでのうら悲しい気分がとけ散っていくことを感じた。

ファチマの召使いの中に、忍術のうまい黒人がふたりいた。かれらはまっ昼間でもぞうさなく自分のすがたを消すことができた。ファチマはふたりを呼んで、

「とらわれの娘のところへしのでいき、そのようすをさぐっておいで！」といいつけた。

三日待った。四日めに帰ってきて、くわしく報告した。その話によると――、

ふしぎな娘は遠くからでも太陽のようにかがやいて見える。女王ズラルズフトはかの女を王子の花よめにするにきめた。ただよその国々へ戦争に出ていく前なので、

「娘はローサンの妻ときまつたけれど、式をあげるひまはありません。帰ってから、ゆっくりやり

ましよう。」といひのこして、忠実なけらいを番人につけたまま、出発してしまった。

こんどの戦争の相手はかなり遠くにある強い国で、長い年月がかかるらしく、女王は魔法の名人たちをみんなつれていった。そのるすは武装した軍隊がまもっている。

カジュツ城というのは、カッジ人の都のことで、岩のかたまりのような要塞である。矢もとどかない高さに、歯形のかべがとり巻いていて、その中になんじょうな城が立ち、岩をくりぬいて四方に地下道が通じている。娘はこの城の塔の中にとらわれている。城の外側には戦いに経験ある一万の軍隊が配置され、城壁の三つの門はそれぞれ三千人の部隊でかためられている……。

「……ほんとに、なんというむごい運命なんでしょうね！」と、ここまで話してきて、ファチマはまたふかいたため息をついた。

空飛ぶ使者

アフタンジルはファチマの物語をいりくんだ気持ちで聞いた。悲しいというか、うれしいというか、その色をおもてにはあらわさなかつたけれど、それでも思わず、

「ふしぎな話を聞いて、私にのぞみが帰ってきたようです！」とさげばずにはいられなかった。

「あなたはまれにみるしんせつな人です。きっといいむくいがあるでしょう。ところで、そのカッジ人のことですがね。なにやらないそうおもしろい話のようですから、くわしくおしえてくれませんか？ いったいかれらは人間なのか、魔物なのか、どっちなんです？ 魔物だとすると、なぜ人間の顔かたちをしてるんです？ そんなところにとらわれている娘の苦しみはどんなでしょう！ 魔物にまたどうして人間の娘が必要なんでしょう？」

「そんなにあおい顔なさらなくてもいいですよ！」と、ファチマはいった。「カッジは人間なんです。ただかれらの岩のとりでがだれにも破られないので、そこにカッジの力のもとがあり、とかれないなぞがあるのです。魔法をつかう、ということは有名です。うわさによると、いくら戦ってもカッジには勝てないで、みな殺しになるのがおちだそうです。つまり、人の目を見えなくしたり、海にあらしをおこしたりする力があり、相手の船は沈没しても、自分たちはへいきで波をのりこえていくし、ときにはまた海をほしあげることでもでき、また昼間をやみにすることも、夜をあかるい光で照らすこともできるといわれています。この魔法をつかうという点が人間とちがっているところで、あとはふつうの人間の間だけだそうです。」

「おもしろいお話のおかげで、心の重荷がとれた気持ちです。神は不幸にかわって、いよいよこんどはよろこびをさずけてくださるのかもしれない！」



そういつてアフタンジルは天に感謝のいのりをささげた。

長い物語のあいだにいつしか夜はあけていた。かれは水浴してきようと思つた。ファチマはあかるいぬいとりのある上着や香油やターバンをさし出した。

「どうぞ、これでさっぱりしていらっしやい！」

水浴しながら、アフタンジルは考えた。

——もういいだろう、自分の正体をあらわしても！

いままで着ていた商人の服をぬぎすて、武装した騎士のすがたになって、ファチマのへやへもどつた。顔つきからすがたまで、まるで別の人のようにかわつていた。

「まあ、なんてりっぱな騎士におなりでしょう。これではますますあなたがすきになるわ！」と、ファチマはうっとりで見とれた。

この騎士がじっさいはなにものなのか、ファチマにはまだわからなかつた。アフタンジルは笑いをこらえるのに、ほねがおれた。食事をともにしてから、いとまを告げた。

いくらか酒を飲んで、かれはぐっすりねむつた。夕がた、ベッドから起きあがると、「すぐこちらへおいでください。」と、ファチマのもとへ使いを出した。

ファチマはとんできた。アフタンジルは女客を自分のそばのじゆうたんの長いすにまねいて、



「まあもっておことわりしておきますが、私の話はもしかすると毒蛇がかんだように、毒になるかもしれません。」と話しました。「あなたには、まだ私の胸のいたでについてお話しませんでした。」

あなたに心をひかれたようにいったのは、じつはほんとはなかつたのです。商人でキャラバンの隊長といつわって、自分がエジプトの軍部大臣と呼ばれ、強大な軍隊の総司令官として、ロステワン王のささえとなつておこなうことを、かくしていたのです。私には宝庫がひらかれていません。私の財産はかぞえつくされません。あらためておねがいます。ファチマさま、南の国からきた旅人を助けてください！ 私にはふかく愛する人がいるのですが、ただ友だちの不幸をすくいいたいためばかりに、国をすて、愛する人をあとにして、さすらいの旅に出たのです。たずねる人は、あなたがお話になった、そのかがやく顔の持ち主にちがいありません。かの女のために、重い苦しみを負っているのはインドの騎士で、やりにつきさされたライオンのように、力なく首をたれているのです。……」

肩にとらの皮をまとっている親友のことを、アフタンジルはくわしく物語った。

「あなたは、あなたがまだ知らないその人にいい薬をあたえ、同時にとらわれの娘にもよろこびをあたえることができるたいせつな人です。あなたのお力がなければ、かの女を幽閉からすくい出すことはできません。運命の手できりさかれたふたりが会えることになったら、人々はどんなに私た

ちに感謝することでしょう。とりあえず、忍術の名人をカジエッチ城につかわして、タリエールのことをすっかり王女に知らせてやってください。ネスタンが返事をくれれば、その中から、カッジたちの弱みをさぐり出して、一気にそのやみの王国をつく手段を考えることもできると思います。」

「あなたの強いご決心には、ほとほと感じいました。あたしもできるだけのことはいたしましたしもう。」

そういつてファチマはすぐ色の黒い忍術使いを呼んだ。

「いま手紙を書くからね。それをカジエッチにとどけておくれ。ずいぶんほねもおれると思うが、おまえは忍術の名人、きつとうまくやりとげるだろう。長いあいだ待っていた救いの手がきたことを、よくあのかたに申しあげるんだよ。」

「あすじゅうにはご返事をいただいてまいります。」と、忍術使いはたのもしげにこたえた。

ファチマは書いた。

「あなたはいままで不幸についてお話を聞きませんでした。ところがあたしはぐうぜんに、あなたの道がどんなにつらいものであるかを知ったのです。またあなたにもおとらず、どんなにタリエールが苦しんでいるかを知ったのです。すぐタリエールになぐさめの手紙を書き、なにかおくりものをあげてください。さもないとあのかたのばらの花はしぼんでしまいます！」

あなたをとらわれからすくい出すために、アフタンジルという勇士がお見えになりました。エジプトのロステワン王の総司令官で、いままで戦いにやぶれたことを知らないという人です。なにごともうちあけて、この人にご相談なさい。きつとお力になれると思います。

あたしたちはいろいろのことを知らなければなりません。外国へ戦争にいったカジジたちはいつごろ帰ってくるのか？ 城壁のそとにいる部隊の数はどのくらいか？ 守備ふりは？ 部隊の隊長たちはだれだれか？ そのほかカジエツチ城についてごぞんじのことを、くわしく、すぐお知らせください。

不幸はもうおわすれになって、勝利が近いことをお信じなさいますように。あなたが愛するかたのごいつしよになる日が一日も早くくるよう、おたがいに全力をつくしましょう。色いろの黒くろい忍術にんじゆつ使つかいは女めあるじから手紙てがみをうけとった。

「じかにあのかたに手わたしするんですよ！」と、かの女は念をおした。

使者はみどりのマントをひろげたかと思うと、まるで鳥のようにまいあがり、高いやねを越して、矢のように飛んでいった。あつというまに、もうそのすがたは空のどこかに見えなくなった。使者は道をいそいで、まだ夜のやみがたちこめているうちにカジエツチ城に着き、目に見えないかげとなって、番兵たちがまもっている城門をくぐりぬけた。塔までにはまだいくつもがんじよう





なドアがあつたが、使者が近づくと、ひとりでにかんぬきははずれた。

とらわれの王女は使者を見て、身ぶるいした。こんどはどんな不幸がくるのか、と心をひきしめた。すみれは青くなり、ばらはサフランのようになつた。

「長いあいだのごしんぼうはむだにはなりませんでした！」と、使者はいった。「私はファチマの召使いで、そのことづてを持ってあがつたのです。私のいうことは、この手紙が保証するでしょう。」

王女は使者のことばをじつと聞きおわり、それから手紙をひろげた。読んでいくうちに、水晶となつてなみだがあふれてきた。

「でもあたしがこの城にとじこめられて苦しんでいることを、だれがその勇士に話したんでしょね？」と、ネスタンは聞いた。

「私はくわしいことはぞんじませんが、知つているかぎりのことは申しあげます。」と、使者はこたえた。「あなたが立ち去つたあと、私たちのところは火が消えたようになり、ファチマは毎日泣きくらしてました。そのうちあなたがカジュッチ城にいることを耳にし、私どもがようすをさぐつてあるじにお知らせしたのです。あるじはますますなげいておりましたが、そこへ樂園のボブラのようにすらしとした外国の旅人があらわれ、この人にファチマはあなたの悲しい運命のことを

うちあけました。この人はあなたをたずねて、もう長いあいだ世界じゅうをめぐりめぐって来たのだそうです。おふたりのおいっつけで、私は矢のようにここへ飛んできたらしいです。」

「よくわかりました。」と、ネスタンはいった。「ただファチマがだれからあたしがここにいたことを聞いたのか、そこがまだはつきりしませんが、でもあなたのおことは信じていいと思います。すぐ返事を書きます。たりないところは、あなたからもよく話してあげてください。」

三つの手紙

ネスタンはファチマに書いた――。

「あなたはあたしにとつて母親よりもなおありがたいかたです？　もうごぞんじのとおり、あたしは悪魔のわなにおちて苦しんでいます。あなたのお手紙は自由へののぞみをあたえ、あたしの悲しみをやわらげてくださいました。」

この城はけわしい岩山の上に立っています。門にも通路にもいく千という守備兵がかたまっています。要塞のげんじゅうなことは、とうていおつたえすることはできません。女王ズラルズフトはカッジどもをしたがえて、遠い国へいらっています。もうずいぶん長くなりますが、いつ帰るかはわか



りません。しかし塔も城壁も数知れない兵隊でまもられていますから、どんな勇士でもここからあ
たしをつれ出すことはできないでしょう。アフタンジルというかたは友情のちかいをまもるばかり
に、お苦しみになっているのだと思います。おひとりでは、とうてい、あたしのもとまで近よれな
いでしょう。どうしてもタリエールとご相談なさる必要があります。あたしも愛する人がいなけれ
ば、よろこびはありません。

いままであたしはあなたになに一つ申しあげませんでした。苦しみにうちひしがれて、自分の悲
運をかこつていたばかりでした。いまはじめて、真剣におねがいます。あたしの愛する人がいの
ちをぎせいにしないよう、ぜひ書きおくってください。ふいの死によってあたしのいたでをさらに
うずかせないよう、よくいい聞かせてください。あの人に万一のことがあったら、あたしはどうな
るでしょう？ もうこれいじょうたえる力はないのです！

タリエールになにかおくれ、とあなたはお書きになりました。ごしんせつをうれしく思います。
あたしがいつも愛用しているヴェールの一片をおとどけます。あたしにとつても、かれのおくり
ものがただ一つのなくさめでした。それはあたしの運命のように、いまは色あせてしまいました
が、それでもはだ身はなさずたいせつにしております。▼

ネスタンはタリエールに書いた――。



この手紙をもらへば、いままでのことがよくおわかりになるとぞんじます。あたしにとつではからだかペン、生活がインク、心が紙でした。この心はあなたの心と永遠のくさりによって結びつけられているのです！

いったいなにごとがおこったのでしょうか？ やりきれない世の中！ 日は照つてもあたしにはあたりません。あなたのお顔を見なくなつてから、どれほどの年月が流れたことか！ いまこそ、だれの前にもかくしていた秘密をあかすときがきたようです。

あたしはあなたがもはやこの世にいないのではないかと考へて、心をいためていました。そのためぐつたりと戦う力を失つていたのですが、いま、運命のはかりの上で、悲しみはもう重たくはなくなりました。あなたの愛によつてあたしは生きていきます。ほかになんののぞみもありません。不自由なとらわれの中で、あなたただひとりがあたしのよろこびであり、愛は心の中でくちない花のように花をつけています。

長い年月の不幸について、どうあなたにお話したものでしょう？ だれだつてこの物語を信じることはできませんわ。あたしははじめてファチマのやしきで、やすらかなくれ家を見いだしました——神がかの女におめぐみをあたまますように。ところが世の中はまたいつもの悪事をはたらいたのです。まもなくあたしはカッジ人のとりこにされました。かれらの力には敵するものがありま



せん。運命はあたしたちに致命的な打撃をくだしたのです。

あたしは城の中にいます。城の高さはどのくらいか、とてもそこまでは目がとどきません。出入口は地下にあつて、昼も夜も数知れない兵隊たちがげんじゅうに見はつています。近よる敵は火に焼かれて全滅します。カッジたちの魔法の力は底知れないくらいです。かれらを攻めふせることはおもいもありません。あなただって、まきのように火に焼かれて、たちまちその場で死んでしまふでしょう。

どうかあたしをおわすれになつて、心を岩のようにじょうぶにおもちください。あたしはよその庭ではけつして花を咲かせません。あなたなしでは生きてかいたなき生涯ですから、この高い塔から身を投げるなり、剣でさすなりいたします。もし天に三つの光があつていいものなら、あたしはあなたの月になりましょう。もし空気が火や土や水とのつながりからのがれて、つばさがあたえられるものなら、あたしは昼も夜もかがやくお顔を見るために飛んでいきましよう。あたしはどこまでもちかいを忘れません。あたしのためにゆるしを神にいのつてください。

あなたの心を信ずるからには、死の苦しみもおそろしくはありません。お墓にはいつてからも、魂の火は消えないでしょう。ただこうしてお別れしているあいだの傷のいたみにはたえられませぬ。かさねておねがいたします。あたしのおなげきにならず、あたしをお忘れになります

ように！

さしあたり、インド平野へいそぎお帰りください。あたしたちと別れてから、父はすっかり氣をおとし、敵のかかるとにふみつけられているそうです。敵軍をうちやぶって、父に王冠をとり返してやってください。

あたしはもうこれいじょうあなたにおなげきをかけたくありません。心は運命に屈服しない心に通ずる道を見つけています。死の床にあつて、からすのなき声を聞くだけのあたしを、そのままにしておいてください。生きていれば、それだけあなたを苦しめるばかりなのですから。

あなたはあたしにシヨールをおくりものにくださいました。知らぬ国々にいても、たいせつにつかっていたこの織物を、いまひもとしてお返しいたします。あたしたちの過ぎし楽しい日の思い出として、お納めください！

愛する人への手紙は書きおわつた。シヨールのひもで手紙の巻きものをていねいにしばつた。ネスタンはこれを色の黒い使者にわたした。

使者はカッジに負けない速さで空を飛んだ。ほどなくこの手紙はファチマにとどけられた。アフタンジルは手をあげて、神に感謝した。

「これが奇蹟でなくてなんだろう！」と、かれはファチマにいった。「運命はたしかにいい方へま

「あつたのです。これもみんなあなたのおかげ、なんでお礼したらいいのでしよう！ いよいよそのときがきました！ さっそく友だちを呼んで、カジエッチ城をたたきやぶります！」

「それでは、これでお別れですね？ どうしましょう。あたしはかれ木みたいになっちまいますわ。」と、女あるじはいった。「でも、あたしのためにおくれてはなりません。はやく王女をたすけてあげてください。カッジどもが帰ってきたら、もう敵の要塞はおちませんからね。」

アフタンジルはフリドンからつけられた従者たちをそばへ呼んで、いった。

「私たちは、まるで元気がなかつたが、たずねる人の消息がわかつたので、これでいっぺんに生き返つたよ。もうじき敵に大きい傷口をあけてやるのだ！ フリドンと会って、よくうちあわせたいのだが、私は別にいくところがあつて、そちらにはまわれぬ。おまえたちから、これから大戦争にかかるといふことをよく王さまにつたえてくれ。おまえたちは私に忠実につかえてくれた。それだけでもじゅうぶんほうびをあげるねうちはあるのに、さらにこんどの大役だ。ただ私の財産は遠くにあるため、いまここで分けてやることができない。けちんぼうと思うかもしれないが、さしずめ、あの海賊からぶん取つた品々でがまんしてくれ。もちろん、船も一そうつけてあげる。自由におまえたちのものにしていい。そのかわり、いま手紙を書くから、それをかならずフリドンにわたすように。」

アフタンジルは兄弟に書くような気持でフリドンに手紙を書いた——。

「へ、弟よ！ その後かわりはないかね？ 私はつらいこと、悲しいことをずいぶん経験したが、いまは大きいのぞみをもって、目的に近づこうとしている。ふかいあなにおちたライオンのように苦しんでいる男の愛する人をすくい出すたしかな道を見つけたのだ。かの女は魔法使いの摩天城に幽閉されている。これから決闘にのり出すわけだが、道はけつしてたいらではない。さいわい、敵の要塞にはいまカッジどもはいないけれど、おびただしい軍勢がまもりをかためている。

私には元気がもどってきた。心はよろこび勇んでいる。おまえと組んだら、だれがこれをうちやぶることができよう？ 思いついたことはすぐ実行する。ゆくてにあるじゃまものはたおれ、岩もろろのようにふみつぶされるだろう。

遠い旅へいそがなければならぬので、いまおまえに会うことはできない。とらわれの王女の苦しみを思うと、とちゆうの時間が一時間でも一分でもおしい。勝利の上は手をたずさえて帰りとともに幸福をわけあおう。そこでおまえにたのむことにした——兄弟として、たすけてくれ！

おまえがつけてくれた従者たちはまことに賞識にあたいする。私に忠実で、たてのようにたのみになった。もつともおまえの召使いたちには私のほめことばなどは必要がないだろう。むかしからことわざにもあるとおりだ。

——すぐれた人はすぐれた人を生む。♡

アフタンジルはこの手紙を従者たちにわたし、くわしいことは口づたえするように、念をいれて
いいつけた。

かれは別にかいでこぐ船を手に入れた。ファチマは声をあげて泣いた。かれもさすがに胸がせ
まった。ウセイインも、家の子たちも、みんな涙をながしてさげんだ。

「あなたは私たちを火であたためてくださいました。いまお別れしては、まるで生きながらお墓に
はいるような気持です。どうしてなくさめたらいいんでしよう！」

なみだで見送られて、アフタンジルは、いつもばらの花が咲きにおっている都、グランシヤロを
あとにして、海へ出ていった。

五、 キャラバンの道

洞窟宝庫

海をわたって上陸すると、アフタンジルはただひとり海岸づたいに馬をとばした。もう春風がそよそよとふいていた。草木はみずみずしくなっていた。かに星座が高くのぼってきた。ばらはばらの上に重そうに首をかしげた。春のやわらかいかおりは騎士をうっとりときさせた。初雷が鳴り、それとともに水晶のようなにわか雨がしぶきをあげた。

荒地のやぶの中ではとらやライオンと戦いながら、砂漠を過ぎ、知らぬ国々を越えていった。はるかに、洞窟のある岩山が見えてきた。アフタンジルはつぶやいた。

「さあ、もうじき会えるぞ！　さんざ苦しみぬいてきた兄弟があすこで待ってるはずだ。うれしいたよりでよろこばせてやりたいが、もしいかなかったらどうしよう？　世界じゅうたずねまわったこ

「それが、むだになっちまうじゃないか。そうすると、なにかもおしまいだ！ タリエールはいるかしら？ 私を忘れないかしら？」

タリエールの馬の足あとを見つけようと、たえずあたりに気をくぼりながら、草地を進んでいった。くらい森に近づいたところで、大声あげてタリエールの名を呼んでみた。するとこのとき、森の中からぴかりと一条の光がさしてきた。おどろいてふりかえると、かがやく剣をぬきはなつたすがたで、そこに兄弟が立っていた。

足もとには一びきのライオンがたおれていた。馬は見えなかった。剣からは血がしたたりおちていた。アフタンジルの呼び声を聞いて、タリエールは用心して身がまえたが、声の主が兄弟だとわかると、飛ぶようにかけてきた。

剣をなげすて、一語をも発せず、ただうれしさがいっぱい、かれはアフタンジルにだきついた。「もう運命の前にひれふしはしないぞ！」と、かれはさけんだ。

「とらわれの女王のゆくえがわかったんだよ。」と、アフタンジルはいった。「いったんはかれたように見えたが、ばらはまた花をつけたのだ！」

「おまえにまた会えただけでも、どんなにうれしいか。」と、タリエールはこたえた。「そのよろこびはとうてい口に出してはいえないくらいだ。もう私には薬はいらぬ。いっぺんで全快したよ！」



声はふるえて、ことばはとぎれた。王女のたよりはちよつとは信じられない、といった調子に見えたので、アフタンジルはいそいで王女の手紙をわたした。タリエールは手にとって、それにくちびるをおしつけた。

シヨールのひもに見おぼえがあった。タリエールはまっさおな顔になり、目をとじて、地面にたおれた。まるで雷にうたれたかのように、そのまま身動きもしなかった。

アフタンジルはおどろいてかれの顔をのぞいた。あまりのうれしさに息がたえたのだらうか？
にがいなみだにむせびながら、アフタンジルは頭をかきむしった。

「友をこんなめにあわすとは、ばかでなければ気がいだい！」と、かれはさげんだ。「よく燃えて
いるまきに水をはねかければ、ほのおはいっそう強くなるにきまつてるじゃないか。よろこびにさ
いげんがなければ、心はそれにたえることができないわけだ。いきなり本すじの話をもち出したば
かりに、友の傷口に焼きごてをあててしまった。まったくまずいやりかたをした。むずかしいくふ
うにはまるでなれていなかったからだ。いそがずに、すこしずつはしから話を低くしていけば、こ
んなことにはならなかったものを。」

タリエールはあしの葉かげに、じっとたおれている。アフタンジルは水をさがしにかけずりま
わった。水はない！もとへもどってきて、ライオンの死体から血をすくい、それをタリエールの



はだかの胸にかけ、それで口のあたりをしめしてやった。

タリエールはからだを起こし、目の前に友を見た。その目はあかるい光でかがやきはじめた。ア
フタンジルはほっとした。

春咲くばらも冬の霜にあえばしほみ、ひでりにあえばかれる。うぐいすのあまい声が、その上で
歌っていても、はなびらは寒さにくずれ、暑さに散る。人の心もちょうどそのようにたよりない。
よろこびの度合も悲しみの度合も知らない。幸福をさいなんでもくもらせて、生活はその心に傷をつ
ける。世の中を信ずる人は、自分に敵を見ているその人だけである！

タリエールは手紙をひらいて読んだ。かれはおそろしさに身ぶるいし、なみだでほおをぬらし
た。

「いまとなつても、まだおそろしいことや悲しいことがあるのか？」と、アフタンジルは友をしか
りつけた。「笑え！ 笑って王女をとらわれからすくい出すのだ。ぐずぐずしているひまはない。
道は私知知っている。よろこび勇んで、カジエツチ城へ馬を飛ばそう。剣にものをいわせて、カッ
ジどもにおもい知らせるのだ！ 敵をふみつぶして、ようしゃなく復讐してやるのだ！」

タリエールは王女のことをいろいろ聞きはじめた。かれの目の中で、光がやみにかわった。ほお
に赤みがさしてきた。



3610367030
302200101033

「私はおまえにたいへんなかりができた。とても私には返せない。神がおまえにじゅうぶんむくいてくれるだろう。おまえのおこないをほめることも私にはできない。聖者がおまえの徳をたたえてくれるだろう。泉の水が花をよみがえらせるように、おまえは泣きぬれた私の目をかわかしてくれ
た。」

アスマートがどんなにかはればれすることだろう、と語りあいながら、ふたりは岩窟へと馬を走らせた。

岩窟の前では、ひとりアスマートが、下着だけのすがたで、もの思いに沈んでいた。かの女はふとひばりの歌のようなほらかな歌声を聞いた。顔をあげると、タリエールがその友とつれだつて馬を走らせてくる。服を着ていないことも忘れて、かの女はふたりの方へかけよつた。いつもタリエールのなみだばかり見なれているので、このゆかいな歌にはひどくびっくりした。だから、よつばらいのように足がもつれて、うまくかけられなかった。うれしいたよりを聞かされても、それを信ずることができなかつた。

ふたりの友は笑顔でいった。

「ずいぶん長いあいださがしまわつたが、やつととらわれの王女のゆくえをつきとめることができ
たんだよ。運命は私たちの苦しみをやわらげ、不幸から私たちをとき放してくれたのさ！」

アフタンジルは馬からとびおりた。アスマートはやなぎの枝よりもしなやかな手をのばして、なみだをほろほろこぼしながら、かれの顔に、首にキスした。

「はやく、はやく、王女さまのことを話してください！」

アフタンジルはネスタンの手紙をわたした。アスマートは王女の筆蹟をなつかしくたどっていった。だが、これがいいたよりだとは思われなかった。かの女はおそろしげに巻きものをながめながら、つぶやいた。

「こんな悲しいことが、ほんとにあるのでしょうか？」

「このたよりはよろこんでいいのです。」と、アフタンジルはこたえた。「太陽は私たちを照らし、空には雲もない。善はいつまでもさかえるが、悪の寿命は長いだけがあります！」

神に感謝のいのりをささげてから、一同は洞窟の中へはいった。アスマートのつくった食事をしながら、またひとしきりネスタンの話はずんだ。だきあつては、うれしなみだにむせんだ。

「おどろいてはいけないよ、これはほんとの話なのだから。」と、念をおして、タリエールはアフタンジルの顔を見た。「いつかもいったとおり、私は怪物デフどもを退治して、この洞窟を占領した。ところが、ここには数知れない宝物がかくしてあった。いままで、そんなものは一つもいらなかったから、手をつけたこともなかったが、これからはなにかの役にたつかもしれない。持てるだ



古今東西の
名作を
読む

け、持っていこうじゃないか。」

アスマートもつきそって、ふたりは洞窟の奥へは行っていった。がんじょうなとびらがいくつもあった。つきつきにこじあけた。へやは四十あった。どのへやもまぶしいばかりきらきら光っていた。うず高い宝石の山がやみにかがやいていた。真珠、金、ダイヤモンド——どの一つもボールくらいの大きさがある世にもまれなものばかりであった。

そこにはまた兵器庫のように、数かぎりもない武器が集められ、かぼちゃの山のように、積み重ねてあった。なかで、とりわけ大きい一つの箱が目についた。近づいて見ると、そのふたにこう書きつけてあった——。

「この中には、よろい、かぶと、きれあじ無類の剣など、特に選ばれた武器がはいっている。その所有権についてカッジとデフとのあいだに争いがあったが、裁判はデフの勝ちになった。いわれなく、この書きつけをやぶるものは敵罰に処せられるであろう。」

かぎをちぎりすてて、一騎討ちでも、戦闘でも、敵の刃がたたないような、みごとな武装品三組をえらびとった。かぶと、剣、くさりかたびらなど、いずれもローマの神々が身につけていたようなものばかりであった。武勇においてかれらにまさるものがあるだろうか？ かれらの肩あてやよろいをきりさくものがあるだろうか？ その反対に、かれらの剣はわか紙のように鉄をたちきる

であろう！

「悪人どもがその息の根をとめるのも、もうじきだ。神は正しい道を私たちにさししめすだろう。」
そう決心して、ふたりはすっかり武装をととのえた。あとの一組はフリドンにわたすために、つなで荷づくりした。

金貨や寶石をすこしずつ身につけてから、とびらにはみんなかぎをかけ、入口を密閉した。

「これでよし！」と、アフタンジルはいった。「今夜はゆっくりやすんで、あしたの朝、みんなそろって出発だ！」

三騎士の顔あわせ

夜明けとともに二騎士はフリドンの国へと旅だった。はじめはアスマートをかわるがわるめいめいのくらへへのせていたが、とちゆうで、金貨ひとつかみをはらって、第三の馬を手に入れることができた。アフタンジルはその幸運をよろこんだ。

見ると、放牧しているらしく、馬のむれがかけまわっている。もうここがフリドンの領地だとすれば、馬の持ち主はフリドンその人にちがいない。タリエールは友に相談した。

「ひとついたずらしてみようじゃないか。馬どもを追いかけてつかまえる。そのさわぎにおどろいて、おっとり刀で、部下をひきつれてフリドンがかけつける。ところが、くせものは私たちだとかって、大笑いになる。うまくいったらおもしろいぜ。」

なるべくいい馬をえらんで追いかけて、なげなわをかけた。牧人たちにおおいそぎでまきの山に火をつけ、煙をあげて、さげびだした。

「いのちしらずめ！ おれたちの王さまの強いことを聞いていないのか？ たちまちまっ二つにされるんだぞ！」

騎士たちは、矢をはなっておどしながら、なおも馬どもを追いかけてまわした。フリドンは信号の煙を見、つづいて遠くのおわただしいさげび声を聞いた。身じたくしているところへ、牧人たちがかけこんだ。

「たいへんです。馬どろぼうがおそいました！ とても、強いやつらで、私どもの手におえません！」

フリドンはすぐ馬にまたがり、つむじ風のようにかけ出した。おともの部隊はともかれに追いつけなかった。だがフリドンは、かぶとのひさしにかくれて、ほとんど顔が見えないにもかかわらず、もう遠くから、馬どろぼうがなにものであるかを見やぶった。



「ごきげんよう、兄弟！」と、まずタリエールの方から声をかけた。かれはかぶとをぬいで、にこにこした。「そのけんまくでは、私たちにひと太刀あびせるつもりと見える。お客のもてなしかたを知らない、けちな主人もあればあるもんだ！」

「そうおどかすもんじゃありませんよ。」といいながら、フリドンは馬をおりて、低くおじぎしやうとした。

しかし二騎士はそうさせないで、かれをあたたかくだいた。かれのけらいたちは二騎士にキスした。

「とても胸がいたんで、別れているにはたえられません。」と、フリドンはさげんだ。「なんとかして、私のいのちを役だててください！」

三人はよろこびに顔をかがやかせながら、部隊をしたがえて、フリドンの城に着いた。かれはアファンジルを自分のとなりになねき、いちばんとしようえのタリエールをきんらんまばゆい玉座にすえた。フリドンには洞窟から持ってきた武器ひとそろえがわたされた。

「おまえにはもっとじゆうぶんなお礼をしなければならぬのだが、デフの宝物をとり出すひまがなかったのね。いまは一刻もぐずぐずしてはられないから。」と、タリエールはいった。

「とんでもない、私になんのおくりものがいらましよう！」と、フリドンはこたえた。

夜よになつた。つかれた旅人たちのまぶたは重おもくかぶさつた。

あくる朝あした、客人たちを浴場に案内した。フリドンははりっぱな衣裳いさまをかれらにおくつた。

「たいせつなお客さまを朝あさはやくから起おこして、さぞ氣きのきかないあるじだと思おもいでしよう。」

と、フリドンはいつた。「しかし、おかれては一だいじです！ カジエッチ城しろまでは遠とほい道みちです。

カッジどもが帰かへつてきたら、もう私わたしたちに勝かちみはありません！ 私わたしはえりぬきの部隊ぶたいをつれてい

きます。城しろを占領せんりやうするには戦士せんし三百名ひゃくさんめいが必要です。黒雲くろぐもからいなすまがほとぼしるように、守備兵しゅびへいを

おそつて、王女おうむすめをつれ出ださなければなりません。私わたしはその城しろのようすをよく知しっています。みかげ

石いしでたたまれた要塞ようさいで、その城壁じやうへきはまだ一度も敵てきにやぶられたことはありません。近ちかづいたことを

ととられて、野戦やせんになつたら、こつちの負けです。だからあまりたくさんくんとくの軍隊ぐんたいではかえつて不利ふり

になります。小さい部隊ぶたいで、かれらに感かんづかれないように、こつそりとしのびよることがかんじん

なのです。」

フリドンはアスマートにも衣裳いさまや真珠しんじゆなどをおくつて、ここに残のこっているようにすすめ、すぐ三

百人ひゃくにんの騎士隊きしたいの武装ぶさうにとりかかった。いずれも名なのある勇士ゆうしばかりで、どんなことにぶつかつても

さわがず、しんぼう強たかくそれをきりぬける腕うでをもっていた。この三百人さんひゃくにんがまるでひとりのように、

フリドンの指揮しきのもとにすばやく行動こうどうした。

部隊は出発した。海をわたって上陸すると、人里はなれたうらさびしい裏道を、ひるとなく夜となくすすんでいった。

ついにある日、フリドンは二騎士にいった。

「カジエツチ城はもうすぐです。ただ、日が暮れるまで、待たなければなりません。敵に見つかってはたいへんですから。」

すっかり暗くなつてから、休みなしで急行した。これを見たものもなく、聞いたものもなかつた。けわしい岩山のいただきに、ものすごい城のそびえているのが目にはいった。がけの上から、番兵どもの呼びかわす声が伝わってきた。

地下道の入口は一万の兵隊でまもられていた。月があかるく要塞を照らしていた。騎士たちは身づくろいしながら、ささやいた。

「進退のかけひきがうまければ、どんなむずかしい仕事にも負けやしない。大将の指揮がよければ、十万人だって圧倒してしまふよ。」

摩天城の戦い



「私の考えはこうです。」と、フリドンは二騎士にいった。「ふつうのやりかたでは、この小部隊で城を攻めおとすことはできません。いくら勇気があってもだめです。また兵糧攻めなどの手ぬるい方法では、いく年かかるかしれません。私は子どものときから、軽業師のようななかるわざをおおいにけいこしました。とんだり、はねたりはひじょうにとくいです。ぶらぶらゆれている綱をへいきでわたることもできます。この技術は仲間からずいぶんうらやまれたものです。あの城壁のてっぺんのぎざぎざの一つになげなわをかけて、するするとよじのぼることができるのは、おふたりではなくて、この私でしょう。そうして密林の中に、一本の通路をあけます。そこでたてをかまえ、じゅうぶんに武装して、城壁の上から中へとびおり、野原のつむじ風のように番兵をおそいます。番兵どもをかたづけ、城門をひらく。あいずののろしをあげますから、それを見たら、すぐかかってください！」

「おまえの剣ははずかしめられたことがない。おまえの腕は手傷ひとつうけないだろう。だが：。」と、アフタンジルはいった。「そのやりかたはひじょうにあぶないよ！ 要塞を注意してごらん。番兵どものたえず呼びかわしてる声が聞えるじゃないか。すこしでもあやしいものを音に耳に入れたら、すぐそこへかけつけて、おまえがかけた綱をたちきるにきまつてる。こちらのたくらみは見やぶられ、退却しなければならなくなる。おまえの考えが悪いというわけではないが、もっとほ



かにうまい方法がありそうなものだ。」

「そんな方法がありますかね？」と、フリドンは聞いた。

「ないこともないよ。」と、アフタンジルはこたえた。「いちばんいいのは、しばらくのあいだ、そっと部隊をふせておくことだ。番兵どももふつうの旅人には気をゆるして、べつに手出しもしないだろうから、私が商人にばけて、らばを引いて城壁にむかう。荷物の中には劍その他の武器をかくしておく。もちろん、三人そろって、いつてはまずい。うそがばれたらたいへんだからね。こうして市内へもぐりこんでから、身じたくしてやつらをきりまくる。神の助けがあれば、血は川となつて流れるだろう。門をまもっている兵隊をかたづけ、門をあけると、そこへ、さいごの打撃をあてるために、おまえたちがおしよせる。これならうまくいくと思うが、どうだろう？ 賛成してもらいたいね。」

「ふたりの考えはじつに見あげたものだ。知恵といい、勇氣といい、それいじょうのものは人間にのぞめないよ。だが……。」と、タリエールはいった。「かんじんなときには第三の友がおまえたちにも必要だ、ということを考えてもらいたいね。どんな場合でも私は役にたつはずだ。それに、戦いのもの音があの塔の上まで伝わったらどうだろう？ 塔から下を見おろして、いきましく戦っている人々の中に私を見つけることができなかつたら、かの女は私のことをへなんてひきょうな！」

と思うにちがいない。そこで私の考えだが、これはまず成功うたがいなしだね！ 夜あけとともに、めいめいが百人ずつをしたがえて、正面から堂々とおしよせるのだ。敵は小人数とあなどつて、城門から討つて出るだろう。戦いがはじまる。私たちはすばやく敵を半円形にとりかこみ、同時に一部が三つの城門へ殺到する。こうして道がひらけたら、あとはもう、いつものとおりに、勝利はこっちのものになるよ。」

「よし、それにきまった！」と、フリドンはこたえた。「こうなると、あの足のはやい馬をあなたにおくつたのは、大失敗でしたよ。カジエッチ城攻めに私に加わると知っていたら、あの馬はまずあなたの手にはいらなかつたでしような！」

騎士たちは顔を見あわせて、大笑いした。じょうだんをいったり、まじめな相談をしたりしているうちに、夜はあけてきた。勇気と決意がもりもりともりあがった。攻撃のためにいちばんいい馬をえらんだ。三人はそれぞれ百人ずつの騎兵をしたがえた。かぶとのひもをしっかりむすびなおすと、すぐ城壁めざして軍をすすめた。

金色の朝日にはえる三騎士のすがたは、世にも美しく、りっぱなものであった。とりわけ《黒》にまたがったタリエールの顔からは、いまにも火花が発するばかりに見えた。この進軍をなにしたとえることができようか？ 山間の急流は千年の巨岩をもつきくずす。だが海に合すると、その軽快





な歩みは重く、おごそかになる。

戰場を三つに分けた。それぞれの部隊の前には目的とする城門がある。夜のあいだに偵察兵を出して、ようすはすっかりさぐつてある。城門に近くなると、みんな武器やたてをかくして、旅行隊のふうをよそおつて、列もばらばらにゆつくり馬を進めた。番兵どもはねほけまなこでそれを見て、別にあやしみもせず、さわぎもしなかつた。城門のすぐ前にせまつたところで、騎兵たちはいっせいにかぶとをかぶつた。

かれらは馬に拍車をあてて、いきなりとつかんに移つた。城門の前が大さわぎになつた。剣のひびき、さげび声。番兵どもはふいをつかれて、やたらにうろたえ、門をしめるのも忘れて、たいこをたたき、らっぱをふいた。

この朝、カッジどもにはもう一つ、おそろしい災厄がおちた。土星が太陽をかくし、地上にやみがおりてきた。まがつた玉のように空は重々しくかたむいた。

みるみる死体は山をきずき、山の上にまた山がかさなつた。タリエールのものすごいかけ声は敵をふるえあがらせた。かれは敵のたてをきり、よろいをきり、くさりかたびらをきつた。みかたの部隊はときの声をあげて三方から市中になだれ入つた。城壁をこわし、上から大石をつきおとした。アフタンジルは破壊された場所をつきぬけて、フリドンに合体した。どこもかしこも血の海で

あった。敵は全滅した。友のすがたが見えないので、ふたりは要塞じゆうを大声あげて呼びまわった。

「タリエール！ どこにいる？ 返事しろ！」

だがこたえはなかった。もとへもどって、こわされた城門のあたりをさがした。きりさかれたかぶとやよろいが散らばり、一万近い敵兵が冷たくなつてたおされていた。のびた死体にはきり傷が見え、くさりかたびらは寸断されていた。重い城門はちようつがいから引きぬかれ、がんじょうなかんぬきはこなごなになっていた。そこにも、ここにも、タリエールの大きい手のあとがしるされてあった。

二騎士は地下道をくぐつて塔の方へすすんだ。《月》は自由になり、もはや悪龍の手にはかからないだろう！ タリエールはかぶとなしで、胸を胸に、首を首に、やさしく王女をだいて立っていた。天で木星が土星と相会うときは、ちようどこのようなものであるうか。うれしなみだがあふれ、太陽の光の中で、ぼらはあざやかに燃えていた。悲しみをふかく知つた心の中で、よろこびの火はもう消えることがないようにかがやいていた。タリエールは王女の上にかたむいて、くちびるをくちびるにかさねた。

アフタンジルはフリドンとともにネスタンにおじぎした。王女は感謝のことばをのべて、たいへ

H. Tadevishi





369
369

んな力になつてくれたふたりに、兄弟のようにキスした。フリドンもアフタンジルもかの女とよろこびを分けあつた。

たがいに、泣いて勝利を祝つた。ライオンのように強くはあつたが、よろいもかぶともよくかれらに奉仕した。一カ所もきられたところがなかつた。敵はまさにライオンの前のやぎであつた。

要塞に攻め入つた三百人のうち、半数以上が戦死した。勝利のはなばなしは別として、フリドンもその他の人々もかれらの死を悲しみ、しばし黙祷した。城兵の生き残りは首をはねられ、おびただしい戦利品はみかたの手にはいつた。大つぶの真珠やルビー、またこはくやサファイアやエメラルドの山を、いく千という包みにして、らばやらくだの背につんだ。カジュッチ城の見はりのために、戦士六十名が残ることになつた。

「この勝利もまつたくファチマのおかげだ。会つてよくお礼をいわなければならぬ！」
そうきまると、ネスタンをかごにのせ、大キャラバンは沿海国の都をさして出発した。

沿海国の会合

タリエールは沿海国の王さまに手紙を書いた。

へカジエツチ城を占領し、長いあいださがしていた王女をつれもどすことができずしたのは、あなたのおかげです。あつくお礼申しあげます。とりわけ、王女を母のように、またきょうだいのようにかばってくれたファチマの恩にたいし、なんでもむくいることができましょうか？ ただむなしのことを書きつらねることは、私はこのみません。それよりも、一日もはやくあなたにお会いしたいと、父のもとへいそぐように、いそいでいます。とてもお国の都へ着くまで待ちきれない気持ちなので、とちゅうでお目にかかりたいとねがっています。

カジエツチ城はおくりものとして、あなたにさしあげます。信頼されるごけらい衆を城うけとりにおつかわしく下さい。

それから商人ウセイにその妻を私たちのところへ旅だたせるよう、おことづけねがいます。ネスタンはかの女との再会をどんなによろこぶことでしょう。毎日、ファチマのことばかり話しては、待ちこがれています。

使者はタリエールの手紙を沿海国王スルハフ・メリクのもとへとどけた。王さまはこれを読んでよろこんだ。すぐ旅のしたくをととのえて、馬のくらにまたがった。ファチマも王さまのおともをした。王女へのおくりものの織物や寶石をつんだキャラバンがあとにつづいた。

十日の旅の後、メリクの一行は三騎士の部隊に出会った。たがいに親しいあいさつがかかわされ

ファチマはネスタンをみると、むがむちゅうらになって、なにやらさげびながら、雪のほおに、手に、足にキスした。

「やみを照らすおかた！ どうかあなたの召使いにしてください！ やっぱり悪いものはほろびて、善がさかえるんだわ！」

ネスタンはファチマをだいた。

「神は悲しみで消えていた心の火をまたともしてくださいました。」と、感謝をこめていった。「あたしはとらわれの身でしたが、いまはまた月となって光りはじめました。春の日にあたってばらが花咲くように。」

人が目をまわすような祝宴がひらかれた。うたげは一週間つづいた。部隊にかぞえきれないほどのおくりものが分配された。兵隊たちは砂利道を歩くように、金貨の上を歩いた。絹とビロードが山のようにつまれた。メリクはタリエールにほのおのようにきらめくバミール産のルビーでつくられた王冠をおくった。これは世界で一、二を争うほどの貴重なかんむりであった。それに金色にかやく玉座がそえられた。

ネスタンにはめずらしい服がおくられた。かの女のからだだからトルコ玉とギアチント石のにじが



発するように見えた。にじの中におうばかりの顔を見て、だれもかれも人知れずため息した。ア
フタンジルとフリドンには、それぞれ別の型のすばらしいくらと、寶石をつらねた金糸ぬいの上着
がえらばれた。人々はこれをほめることばを知らなかった。

タリエールはメリクにいった。

「あなたのごしんせつなもてなしとみごとなおくりものは、私たちをこのうえなくよろこばせまし
た。この出会いは生涯わすれないでしょう。あなたも末長く幸福でおくらしなさいますように！」
「私のことを思い出して、お近づきの機会を与えてくださったことを感謝しています。」と、沿海
国の王さまはいった。「それにしても、この国をおたちになつてから、なんで私をなくさめてくだ
さいますか？」

タリエールはファチマにいった。

「あなたはネスタンときようだいになりました。私はどうしてもあなたからかりたものをすっかり
お返しすることはできません。せめて、キャラバンではこんできたこの戦利品をぜんぶおさめてく
ださい。あなたのごしんせつにたいしては、もちろん、とるにもたりないものですけれど。」

「それはつれないおことばです！」と、ファチマは低くおじぎをしていった。「それはあたしと別
れるという意味でございましょう。あたしをそんな不幸におとさないでください！ 目さきのよろ

とびがなんになりましょう。あなたにはあたしの心の悲しみがお見えにならないのです！」
タリエールはメリクにいった。

「私たちの運命はまたしてもきびしいものです！　ここでお別れしては、ふえもことももう楽しくはありませんが、私たちはあなたのあたたかいお国を立ち去らなければならぬのです。さいごに一つだけ、おねがいがあります。あらしにも波にもなれている船を一そう用だててください。」

「戦場でこの首をさえさしあげるつもりでいるものを、船などとはおやすいご用です！」と、王さまはこたえた。

こうして遠い航海にたえる船はしたてられた。タリエールの一行は船出した。人々は海岸に立つて、悲しみに胸をかきむしりながら、いつまでも船のあとを見送っていた。

海はファチマのながす涙ですつと深くなったように見えた。

ムリガザンザリの相談

たえずにぎやかな笑い声があがり、水晶にばら色のさんがまじったような楽しい歌声が海のはてまでひろがっていった。三人の義兄弟は海をわたってフリドンの国に着いた。さつそく、やみの

本城をおとし入れたことを報じる使者がアスマートのもとへおくられた。

「……王女は私たちといっしょです。おたがいにずいぶんきびしい寒さを味わってきたが、いよいよこれからは新しい生活をたのしむことができます！」

ネスタンは長い道をかごにゆられていった。いうにいわれない不幸のあとで、騎士たちは子どものようにはしゃいでいた。ついにフリドンの領地へはいった。勇敢な戦士たちをかんげいする声は天地にとどろいた。

王宮の人々もこぞつて出むかえた。アスマートは気もそぞろにかけだして、ネスタンにだきついた。もはやおのをふるってもふたりのあいだをたちきることはできないだろう。まったく、このようにあるじにつくした侍女がどこにいることか！

ネスタンはアスマートを離さないで、口に口を合わせた。

「あたしはまるで敵のようにおまえを苦しめました。」と、王女はいった。「これからは天の加護もあると思うけれど、おまえの愛情としっかりした心のもちかたにたいして、あたしとしてなんでむくいることができるだろうか？」

「この奇蹟を見ただけで、あたしはもうじゅうぶんです。」と、アスマートはこたえた。「王女さまが幸福なら、あたしもまた幸福なのです。召使があるじを愛することが許されるなら、世の中に



「どれいじょう、とうとい愛はございませぬわ！」
フリドンはため息していった。

「私の部下は戦場にたおれて、神の国へと去った。みんなおしい勇士たちであった。かれらを失つて心の悲しみはかぎりない。しかし天上の樂園でかれらは高いおめぐみを受けることだろう！」

フリドンのほおをなみだがぬらした。戦士たちも泣いた。勝利の日のほの暗い思い出がよみがえってきた。

「悲しみを忘れよう。苦しみにたえてきたまままでのことをいっさい忘れよう。」と、アフタンジルはいった。「タリエールが王女をとらわれからすくい出して、すべてのなやみは終わったのだ。なげきよ、去れ！ もうなみだには用がない！」

フリドンの都、ムリガザンザリに着いた。音楽が広場いっぱいには鳴りわたっていた。らっぱの音にシンバルがこたえた。それらを圧して、いく万という市民のさげびが耳をつんぼにするばかりに高くひびいていた。警官たちは力づくで群集をおしもどして、道をあけた。王宮のとりでにおしよせて、ひと目でも勇士たちを見せてくれと役人に談判している連中もあった。

金色の帯をしめた衛兵たちが出てきて列をつくった。遠くにフリドンの一行をみとめると、道にじゅうたんをしき、金貨をあられのようにまき散らした。群集は金貨をひろった。

フリドンの城の中に、エメラルドとルビーをちりばめた一對の玉座がもうけられた。そのとなり
にアフタンジルの玉座をおいた。人々はうつとりとして八方からこの美しい客たちをながめた。

婚約者——タリエールとネスタンのために歌い手たちはあまゝ調子の聖歌を歌った。おくりもの
を持つてほうぼうから人々がお祝いにやってきた。そういう人々のためにフリドンは豪華な酒宴を
はった。

フリドンは婚約のひとつ組に、あひるのたまごほどの大きさがある真珠を九つおくれた。昼をあざ
むくほどあかるい光をはなっていた。その前では、夜でも画家は人の顔を描くことができるであ
う。また燃えるほのおのような寶石でつくられた首かざりもおくられた。

アフタンジルの前には、数名の召使いがやつとはこべるような大きいおぼんが持ち出された。お
ぼんの上には真珠のつぶが山のようにもりあげられてあった。

広間はピロドと絹でいっぱいになっていた。そこでお祝いの宴会が八日間つづいた。昼も夜
も、ハーブ、ふえ、シンバルの音はたえなかつた。

タリエールはフリドンにいった。

「兄弟として天からさずかつたように、おまえはおしみなく私につくしてくれた。おまえは私の心
のいたでをなおす薬を手に入れてくれた。もし必要なら、私はいつだっておまえにこのいのちをさ



さげることを持ちかうよ。アフタンジルは私の苦しみをかき消してくれた。きたえられた友情には、二倍にも三倍にもしてむくいなければならぬ。かれの秘められたのぞみがあるか、おまえから聞いてみてくれないか？ かれが私のささえであったように、私もかれのささえとなるだろう！ 兄弟の役にたたないくらいなら、宮殿も牧場のこやも用がない。どうしたらかれの手助けができるか、まえもって知っておきたいのだ。私はかれといっしょにアラビアへ行って、どんなことでも、かれのねがいをかなえてやらなければならぬ。万一かれが結婚式をあげないとすれば、私だって自分の妻の夫ではない！」

フリドンはアフタンジルにこのことばをそのままつたえた。アフタンジルはにっこり笑っていった。

「病人でもないのに、薬のいるわけはあるまい？ チナチンはカッジどもにつかまりもしないし、かくべつの不幸も知らない。アラビアの王女として、なんの不足もなく暮らしている。人々のかの女をそんけいしている。カッジであろうが地獄のおにどもであろうが、かの女を害する力はない。だから私には友の援助はいらないわけだ。タリエールによくつたえてくれ——長いあいだ待ちのぞんでいた会合のよろこびを私に一日もはやくあたえようとする気持はよくわかる。私のなやみに感じる友の心は目に見えるようだ。しかし、剣も必要でなく、雄弁も無用だとすれば、あとはただ神

のお心にまかせせるほか、なんにもすることはないじゃないか。それよりも私はかれが一日もはやくふるさとへ帰ることを助けてやりたい。インドの玉座にのぼり、そばにネスタンのかがやきをえて、そねむものの息の根をとめることを助けてやりたい。そういうかねてのぞみをすっかりはたしてから、私はアラビアへ帰ろう。たぶん、王女の胸のほのおはそのときすこしはしずまるだろうが、これとても一日をあらそう必要はないのだ。」

フリドンからアフタンジルのことばを聞くと、タリエールはいった。

「どんな魔法でも私をひきとめることはできないよ。いったん死んだものを、生き返らせてくれたのはアフタンジルだ。友情をたいせつに思うかぎり、かれをささえずにはいられない。アフタンジルにそういつてくれ——私にさからつてくれるなど。ロステワン王と会わないうちは、私はけつして友とは別れない。まえに私はけらいたちをきりすてて、インド王の怒りをつかした。だからそのおゆるしを得ないうちは、インドへは帰れないのだ。あしたは朝はやく出発する。私の決心はてこでも動かない。王女の手をもとめるために、かれと王さまとのあいだにいざこざがおこつたらたいへんだ。それが心配だから、私はなこうどのつもりで、王さまに会いに行くのだ。」

フリドンはタリエールの決心をアフタンジルに告げた。アフタンジルはこまった。どぎまぎして、タリエールの前にいき、悲しげな目をしていいだした。

「新しい罪でロステワンをまたおこらせたくないんだよ。私を養育してくれた人の気持をそこねることはできないのだ。おまえはだいぶ思いすごししてやしないか？ へたにたのんだら、かえって王さまにそつばをむかれるよ。かれはおそらく私のことを案じているにちがいない。帰ったら、すなおにあやまるのがいちばんだ。けらいが主人に剣をふりあげていいはずはない！ それにまた軍の大將が王女の手をもとめることは、あまりふさわしいことではないのじゃないか？ 王女だって、はずかしめられたように感じないものでもあるまい。そうなると、私はまた火の中になげこまれ、私の生涯はまっくらになる。こんどはだれが私をゆるすようにねがってくれることだろうか？」

タリエールはしずかに友の肩をたたいていった。

「私はおまえの大きい心づくしにむくいる自分の順番がきた、と思っているだけだよ。不幸におちた人を見ずてるようなものは隣人ではない！ 運命にめぐまれない人から遠ざかるようなことは、人の道ではない。友としていつまでもおまえのことを心にかけさせてくれ。さもなければ、いつそ別れて、自分の道へいくほうがましだ。私はおまえの心と王女の心とが結ばれていることを知っている。私は王さまにも王女にも会いたくてたまらない。会ってもけっして遠まわしに話す必要はない。だって、お客として私をむかえたいじょう、すこしくらいのいい過ぎをとがめるわけではないじゃないか。私はロステワンにざっくばらんにいうよ——美しい王女は強い勇士と結ばれるのがあ

たりまえだと。このような愛は、はなればなれになるべきではない！」

アフタンジルはついにタリエールの決心に負けた。かれは友の正しいことをみとめた。そこでフリドンはすぐにキャラバンの用意を命じ、これをまもる部隊の選抜にとりかかった。

キャラバンはアラビアに着く

不正を正し、悪の芽をかりとって、

神は世界に善をしめしたまう、

私たちの心にはやさしく、まっただすがたもて、

かれは栄光の栄光にてかがやく。

聖ジオニシウスはこのようにおしえている。

キャラバンはすすみ、ネスタンはあたりをあかるく照らしながら、かごにゆられていった。いきさきさきで騎士たちは狩りをもよおした。どこかの町にはいると、人々は騎士たちの美しさに目をみはり、かんげいの声をあげて、あらそっておくりものをさし出した。



いく日もいく日も平野の道がつづいた。やがて水のない砂漠にさしかかった。眠りもせず、休息もしないで、砂漠を通りぬけて、山道へとまがった。けわしい岩がそそり立っていた。

「ここだ、私が死を待っていたところは。」と、タリエールはいった。「むこうに、私がなやみ苦しんでいた洞窟がある。立ちよって、アスマートに、とくいの野獣料理をごちそうしてもらおう。私はデフの宝物をみんなに分けてやるよ。」

騎士たちはおそろしい巨岩のかけにある洞窟へはいった。アスマートはしかの肉でごちそうをしらえた。かれらは過ぎし日の不幸をしのび、今日の成功を語って、たのしい休息のときをすごした。

やがて三人は洞窟の奥へすすんだ。タリエールの案内にしたがって、金鉱をでも掘りだすようにして、宝庫をひらいた。その富はともかぞえつくされるものではなかった。これを手に入れた人は自分の運命を祝福しないではいられないだろう。

宝庫のかがやきは人々のきもをうばった。タリエールはフリドンの部隊におしみなく分けてやった。それでもまだいくつかの宝庫は手もつけられないで残った。

タリエールはフリドンにいった。

「おまえからかりたものはとうてい返せないが、さいわいこの戦利品がある。私にはもう用がない

ものだ。きょうからはこれをおまえのものにしてくれ！」

フリドン是非難するようにタリエールの顔を見た。

「欲ばりは大損といえますからね。まあえんりよしておきましょう。あなたに見すてられたら、私ひとりでは心細い。敵が、たとえかしの大木のようにであっても、あなたなら、もみがらみたいに吹つとばすんですからね。」

けつきよく、宝物はタリエールの庫におさめられることになり、それをほこぶためにらくだの大群が集められた。こうして大キャラバンはまたアラビアへの旅をつづけた。

暑さが旅人たちを苦しめた。多くの日数がたつて、やがて遠くに建物や塔が見えてきた。青やみどりの服を着た人々がアフタンジルを見て、むちゆうになつてかんげいした。だれもかれも泣いていた。急使がロステワンのもとへおくられた。タリエールは書いた。

「遠いインドの国から偉大なお国へやってきました。私はいつぞや、心ならずもあなたを苦しめたものであります。あるとき私はわるいわなにかけられたように考えて、いっさんに逃げだしたのでした。追いかけたごけらい衆は私のために傷つき、あるいはたおれました。どうかおじひをもつて、むかしの私の罪をおゆるしくださいますように、心からおねがいます。私には特別のおみやげもございません。そのかわり、あなたの愛するアフタンジルを名譽においてお返し

たします。』

アラビア王はこの手紙を読んでたいそうよろこんだ。チナチンはまつげに水晶の玉をきらりと光らせた。

たいこの音が鳴りわたった。けらいたちは戦士の部隊といっしょになって、出むかえに急いだ。戦士はいずれも戦場で名をあげた人々であった。呼びだしに応じて、四方から完全武装した部隊が集まった。神の栄光をたたえて、声をかぎりにさげんだ。

「地上の悪をほろぼして、神意は勝った！」

アラビア王は馬をすすめた。

アフタンジルは不安のおももちでタリエールをかえり見た。

「遠くに、雲のようにほこりがまいあがったじゃないか？ 私は気おくれして、だんだん胸さわぎがひどくなる。あすこには私の養い親の王さまがいるはずだ。むかしの罪がおそろしい。どんなふうにして王さまの前に出て、その足もとにひれふしたらいいのか？ おまえなり、フリドンなりの考えを聞かせてくれ。」

「それではまず私が王さまに会おう。おまえはしばらくここにひかえていろ。」と、タリエールはこたえた。「おまえがはずかしがっていることを、私から王さまに申しあげる。なに、おまえはもう



すぐチナチンといっしょになれる。案じることはない！」

その忠告にしたがって、アフタンジルはネスタンとともにその場に残り、タリエールはフリドンとともに馬を走らせた。

馬上の人を見て、ロステワンはすぐさとった。

「おや、あれはインドの王さまではないか！」

アラビア王はよろこんで、父がわが子をむかえるように、あたたかくかれをむかえた。タリエールはうやうやしくおじぎした。王さまはかれをだいて、キスした。

「見れば見るほどごりっぱだ。あたりがあかるくなったような気がするよ！」

フリドンとおなじようにあいさつした。だがアフタンジルを待ちかねていることは、そのようすからも察しられた。

「失礼ですが、王さまにはなにかものたらないうに見うけられますよ。」と、タリエールはいった。

「おそらくアフタンジルがまだすがたをあらわさないからではないでしょうか？ それでしたら、もうじき部隊をつれてやってきましたよ。私が罪のある総司令官といっしょにこなかったことをとがめないでください。私はほんのなかだち役なので、けっして敵の使いではないのですから！ むこの草原の方ばかりごらんになっていないで、すこし休みましょう！」

軍隊にとりまかれて、かれらはこしをおろした。タリエールはあらためて王さまの顔を見た。

「アフタンジルの使いとしては、私はふさわしくないと思いますが、ただかれの罪をよく知るものとして、おわびにあがったわけでございます。私はかれのおかげで命を助かりました。このフリドンともども、かれのために王さまにおねがいたします。アフタンジルは私の薬をさがそうとして、世界じゅうをめぐり歩きました。その苦しみはどんなにつらかったでしょううか？ 長い不幸の物語はとも話しくせるものではありません！ そのあいだ、かれのささえとなっていたものは、王女さまとの心のむすびつきでありました。しかし、火と燃える心を抱いて、別れ別れにならなければならぬとは、泣いても泣ききれないものがあつたでしょう。いまこそ王女さまを強きことライオンのごとく、意志のかたきこと岩のごときその人に、さしあげてください。私のことばがたりませんところは、いくえにもお察しくださいますように！ ……」

肩ぎぬをほどいて、首にきつく巻きつけ、子が父にたいするよう、ひざまずいた。かれのことを聞いていた人々はふかく心を動かされた。

ロステワンはタリエールをじろりと見た。その目にはにがしい色があらわれた。

「インドの王さま！」と、かれはふきげんな調子でいった。「せつかくのよろこびにかげがさしたよ！ あなたはのっぴきならぬまわつた戦法で私をくるしめる！ こうなれば、あなたのことばに

したがって、なにがおころうとも、たとえ私の娘が死ぬようなことになろうとも、あなたのたくらみをもんくなしに承認するよりほかはない。なるほど、司令官と肩をならべるような男は、娘には見つかるまい。いや、世界じゅうをさがしても、かれよりりっぱなむこはあるまい。娘はいまアラビアを支配している。チナチンは美しいばらだが、私は夏を過ぎた花だ。勇敢な騎士が娘のためにたしかなたてとなることはわるくはなからう。ただ、かりに、あなたがどれいをむこにすすめたとしても、私としてはことわることができないのだから、ほこりの感情を重んじれば、アフタンジルにそつぽをむかないわけにはいかない。アフタンジルはきらいです、会いたくもありませんよ、といわなければならぬ。なんにしても、ことがきまつたらうえは、さつそく結婚の勅令を出すでしょう！」

タリエールは王さまの足もとにひれふして、感謝のことばを述べた。王さまはかれの礼儀正しさをほめた。

アフタンジルのよろこびを胸にえがきながら、フリドンは吉報を持って引返していったが、まもなく、かれをともなつてもどつてきた。アフタンジルはロステワンの前に出ると、きまりわるそうに目をふせた。王さまはかれの方へ歩みよつた。感動をかううじておししずめながら、口をかれに近づけた。アフタンジルはなみだをはらつて、王さまの足もとにびついた。

「起きろ！」と、王さまはいった。「目的を達し、名譽をもつてもどつてきたのに、なにをはずか



「しがることがあるか！」

王さまは兄弟のようにアフタンジルをだいた。

「おまえはあらゆる障害をこくふくして、私のなやみをとりのぞいてくれた。王女もおまえを待っている！ いけ、おまえの太陽のところへ！」

王さまは帰ってきたアフタンジルがまるでわが子のようにかわいかった。娘の美しさと権力はこれの威厳をかざるにふさわしいだろう。不幸をなめつくした後の楽しさの味はまたかくべつである。

ややあつてアフタンジルはロステワンにいった。

「私は月のようにかがやく人をつれてまいりました。なぜはやくごらんにならないのですか？ インドの王女をおまねきになれば、王宮の広間もま屋のようにあかるくなりますよ。」

王さまはネスタンのかごへ近づいて、おじぎした。王女はかごをおりながら、王さまのほめることばを耳にした。

「この光りかがやくおかたをたたえることばはどこにもない。私は、頭がぼうつとしちまったよ。太陽と月の前には星々も光を失うが、もうきょうからは、ばらもすみれも見える気はしなくなつたね！」

人々はネスタンを見ようとして、大波のようにおしよせた。

アフタンジルとチナチンの結婚

客たちもあるしも王宮へ着いた。チナチンは玉座をおりて、客たちをむかえた。めいめいはかの女に礼をして、服のはしにキスした。タリエールはチナチンにいった。

「アラビアの玉座に強いライオンと太陽がごいっしょになるところを、私は、ぜひ拝見したいのです！」

王女の手をとって、玉座へみちびいた。アフタンジルもつれていかれた。愛のほのおが燃えていることが、だれの目にもあざやかにうつった。

アフタンジルとならんで、チナチンはひどくどぎまぎした。心臓の血がつめなくなり、顔がまっさおになった。

「これ、そんな気の小さいことでどうする！」と、父親はかの女をしかった。「愛は悪を正して、幸福へみちびくものだ、と聖者のおしえにもあるではないか！ 私はおまえたちの生活が千年ものさしではかられるように、といのっている。苦しみの順番がこないように、天が沈まない光でお

「まえたちを照らすように、といのつている。私に灰になったときには、おまえたちの手で地面にまいてもらいたいのだ！」

王さまはけらいたちにむかい、アフタンジルをゆびさしていった。

「きょうからはかれがおまえたちのあるじだ！ かれがこの国をおさめるのだ。私にはもう老いと病気がない。それが運命のさばきなのだ。戦士たちよ！ いままで私につかえたとおりに、かれにつかえてくれ！」

指揮官と部隊は声をそろえてロステワンにこたえた。

「王家に忠誠をちかいます。うらぎりものには復讐します。私たちにはおそろしいものがあります。危険とみたら、すすんでこれをとりにしめます！」

タリエールは王女にお祝いのことをさしのべた。

「長くごいっしょにおくらしなさいますように！ もろもろの悲しみはけむりのように消え失せました。あなたのだんなさまは私にとつてきょうだいよりも近い人です。ですから、あなたとも私はきょうだいなのです。あなたに敵対するものがあれば、私はいつでもこの剣で制裁してやります！」

玉座にはアフタンジル、そのとなりタリエールがすわった。チナチンとネスタンは人々の目をうばった。二つの太陽が天から地上におりてきたかのように思われた。

祝宴がひらかれた。いく千という牛やひつじが料理された。料理のほかに、おわんにもさらにも燃えたつ寶石が山のようにもられた。

「えんりよなしに楽しむように！」

音楽がたえまなしに演奏された。あな倉からはこび出された酒は川のようにながれた。昼も夜もなかった。不具者たちには、太陽のようにおしみなく、大つぶの真珠がばらまかれた。ふつうの人人には高価な織物や金貨があたえられた。

結婚を祝う人々があとからあとときりもなく王宮にやってきた。おくりものの山々はますます高くなっていた。ロステワンはまるで召使いのように客たちをむかえ、客たちにサーヴィスした。王さまからのおくりものはその豪華さで人々をおどろかせた。

タリエールとネスタンには世界じゅうの宝物をささげてもおしくない気がした。だつて、きょうからは、自分の生みの娘とそのむこのきょうだいになったのだから。いく千という熟したすももの大きさがあがる真珠、いく千という山の斜面のような横腹をもつりつばな馬……とうていここには書ききれない。

フリドンには寶石入りの箱九つ、くらつきの黒馬九頭がおくられた。

新夫婦のテーブルはひとときわにぎやかであった。人々がよつたあとに、また別の人々がかわつて

よった。タリエールもずいぶん飲んだが、ほかの人のようにはよいつぶれなかった。かれはロステ
ランにいった。

「いつまでもおそばにいて、幸福を分けていたいただきたいのですが、もうお別れしなければなりません。インドは敵の手に落ちて、その牧場にされているとことです。これから帰って、勇気と知恵をふるって、敵を追いはらわなければならぬのです。ぐずぐずしてはいられません。神の加護があれば、またお目にかかることもできましょう！」

「ためらいは人々に光榮をもたらしさない！」と、王さまはいった。「お考えのとおりにやりなさい。ハタイ人を罰するために、アフタンジルをつけてあげる。名剣とじょうぶなたてもさしあげよう。」

アフタンジルはタリエールに愛と友情をちかった。

「その心ざしはありがたいが、おまえはチナチンに誠実でなければならぬ。」と、タルエールは友にいった。「おまえはかの女と別れてはならないのだ。仲よく、いっしょにくらしなさい！」

「そのことばには承服できないね！」と、アフタンジルはこたえた。「もしおまえがひとり出ていくとすれば、それは女にひかれて、友情のちかいをやぶった！」と、私を非難するにひとしい。不幸に友を見ずてるものは、自分が不幸になげくだらう、といわれてるじゃないか。」

「友と別れて、なんで楽しいことがあるう？」と、タリエールはいった。「私は心からねがって



たことを口に出したのだが、それほどまでにいうなら、また長い道をとみにいくことにしよう。」
アフタンジルはすぐ出陣の命令を出した。八万の騎兵が集まった。戦士も馬もホラズムの武器で
かためられていた。

ネスタンはチナチンをだいた。ばらのはなびらのような口と口と口とが合わさった。それを見て、人
人は運命のせつなさに泣いた。

「おたがいによるこびの中でお会いすることができませんでしたわね！」と、ネスタンはいった。
「愛する人をあなたから引きはなして、遠い国へいかなければならないことになりました。あたし
の手紙にはきつとご返事くださいね。あなたのことはいつまでも忘れませんわ。あなたもあたしの
ために心の火をともしてくださいますように！」

「あなたがここからお立ちになるときが、あたしの不幸な生活がはじまるときですわ。」と、チナ
チンはこたえた。「お墓がひらいてもいい。あたしにはこの世の楽しみなど用がないのです。ただ
なみだがかれないかぎり、あなたのおしあわせをいのつておりますわ。」

まだきあい、またキスした。チナチンはネスタンから目をはなすことができなかつた。その目
を見ると、ネスタンの胸はいたましくしめつけられた。

ロステワンはふかい悲しみにとぎされた。いくらがまんしようとしても、ついため息がもれた。

お湯がわいてふきこぼれるときのように、なみだがほおをつたわってながれた。王さまはタリエールのほおにやさしくキスして、別れのあいさつをのべた。

「もう二十年若かつたらねえ。私もあなたといっしょにどんな遠くのはてまでもいくんだがな！ 私たちによるこびをもつてきてくれたその同じ人が、私たちをこのようなげきに沈めるとは、さてさて世の中とはわからないものさ。」

タリエールも泣いて王さまに別れをつげた。見送りの人々も泣いた。かれらのながす涙でゆうだちのあとのように野原はしめつた。

インド平定

大軍は動いた。そのあとに荷物をいっばいつんだ車隊がつづいた。八万の騎兵部隊の先頭に立つのはフリドンとアフタンジルとタリエールであった。三つの心臓は一つのように鼓動し、三人の前に目的もまた一つであった。

十三週間戦った。世界じゅうに三騎士に敵するものはいなかった。相手はすくなくならぬいたでをこうむった。そのあいだ三騎士は野にテントをはり、谷に休息し、食事のときには乳ではなくて、

酒を飲んだ。

目的ははたされた。七つの領土はタリエールとネスタンの手にもどつた。不幸は忘れられて、よろこびがそれにかわつた。いのちのにがさを知らない人は、いのちのあまさのねうちがわからないだろう。

結婚式と戴冠式とがいっしょになった。このことを告げるらっぱの音は、国じゅうに鳴りひびいた。

「わがきみに光栄あれ！」

いたるところで、そういう声があがつた。宝庫のかぎはタリエールに手わたされた。

アフタンジルとフリドンには二つの玉座がもうけられた。人々はかれらをほめたたえ、また過ぎ去つた日々のできごとについて話を聞いた。

数知れぬ召使いたちはごちそうのしたくをととのえた。王さまとしての結婚式があげられた。その盛大なもようは後の世までも語りぐさになっている！ いたるところから集まつた人とおくりもので、広大な王宮もうずまつた。貧しい人々や不具者たちのためには宝庫がひらかれた。王宮の高官たちはテーブルの前でさかずきをあげて、アフタンジルとフリドンに感謝のことばをのべた。

「私たちに生活のよろこびがもどりましたのは、すべておふたりのおかげです？ どんなおことば

でも、私たちはそれをあるじの命令として聞くでしょう。」

タリエールはアスマートにいった。

「おまえは私たちのなやみをなやんでくれた。おまえは世界のどんな人でもなし得ないようなことを、よくなしとげた。私はせめてものお礼として、インドの七分の一の領地をおまえにおくりたい。私のけらいではあるが、おまえはその領主さまだ！ 気にいった人をだんなにえらんで、長く栄えておくれ！」

アスマートはひれふして、涙にむせんだ。

「なんという身にあまるしあわせでしょう！ 私はいつまでもあなたのどれいですわ！」

三人の義兄弟は客たちにかこまれて楽しい毎日をおくっていたが、タリエールはアフタンジルがしだいに沈みがちになってきたことに気づいた。かれはそのわけを察した。

「なんだって兄弟にかくしてるんだね？」と、タリエールはいった。「七つの悲しみというが、八つめの悲しみにとりつかれたんだらう？ 私たちの友情に運命がやきもちを焼いてきたのさ。えんりよしないで、チナチンのもとへ帰るがいいよ。」

ロステワンへのおみやげとして、金糸縫いの上着と、ねうちをはかることもできないほどの宝石入りの箱がさし出された。

「王さまによろしくいってください！」

アフタンジルは心細そうにこたえた。

「いよいよお別れかね！」

ネスタンはチナチンにめずらしいヴェールをおくった。それは世界の人がまだ一度も見ることがない織物でつくられていた。また、それを身につけている人の名譽をまもるといふ大つぶのダイヤモンドをおくった。それは夜になると太陽のようにかがやいて、どこからでも目につくであろう。

別れはつらかった。火よりもあつい苦痛が三人の胸を焼いた。アフタンジルはふかいたため息を吐いて、

「生活は、私にとっては地獄だ！」とさげんだ。

フリドンとつれだって同じ道を帰ったが、それも長いことではなかった。やがてめいめいはめいめいの道へと別れていった。

こうして、多くの苦しみも悲しみも成功によって終りを告げ、アフタンジルはその故国で、人の世の花を咲かせることができた。

タリエール、アフタンジル、そしてフリドン——この三人の主人公は三つのめぐまれた国をまもり、たがいにいたりきたりして、その親交をあたため、ときには力をあわせて、そむくものを必

殺の劍でこらし、敵の領土をめしあげて、国のさかいをひろげていった。そしてその財宝を、雪あらしが粉雪をふりまくように、やもめにも、みなし子にも、貧しい人々にも、おしみなく分けあたえると同時に、一方では、国の中でも、ずるいおおかみやぎとなれあって、小さいこひつじにさえ母親の乳をすわせないのを見ると、そういう敵をようしやなくうちほろぼした。

むすびのことば

夜のねむりのゆめのような、

物語のひとまきは終った。

その王さまたちは世を去った。

これが世のうつりかわりである！

永世を考えれば、

地上のいのちはみじかい。

ルスタヴィの名もないメスフ人、

私がこの歌をつくった。

いつも太陽を道づれとする、

グルジアの王、ダヴィドのために、

その宮廷のおきてを重んじながら、

私はこの賛歌をつづった。

つむじ風のようにかけめぐって、

かれは東をうち、西をしたがえ、

不信のともがらをはき清めて、

新しい国土をかためる。

ダヴィドの大きなはたらきについて、

よく歌いあげることができるだろうか？

遠い国々の、よその王さまたちについて、

ほめたたえられる強い王さまたちの、

その大きなはたらきについて、

私はこの物語をくみたてた。

それが歌いこまれているとしたら、

私はいささかのほこりをもつだろう。

この世界はたよりない、

地上のみちはけわしい。

ほんのまばたきのように、

いのちはかない。

なにをあわててさがすのか？

どんなかべをも運命はつきやぶる、

天の世紀も地上の生涯も、

すなおな人にはつらくはない。

ホネリはアミランをうたい、

たくみな筆をふるって、

世よにきこえたシャフテリは

アブドル・メシヤの功績こうせきをうたい、

つかれを知らぬツモグヴェリは

ジラルゲートの光榮こうえいをうたった。

なみだにぬれてルスタヴェリは

いまタリエールの歌うたをうたった。

シャフテリ——十二世紀じふにせいきのグルジアの詩人しじん、その作「アブドル・メシヤ」は断片的だんぺんてきに今日こんにちに伝つたわっている。

ダヴィド——(ダヴィド・ソスラニ)グルジア女王じゆうおうタマラの第二だいにの夫むと、一二〇七年せんじゅうにじゅうななねん死しす。

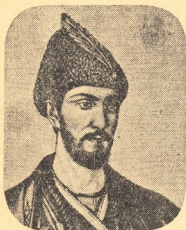
ツモグヴェリ——十二世紀じふにせいきのグルジアの作家さか、その作「ジラルゲチアニ」は伝つたわっていない。

ホネリ——ルスタヴェリの先輩せんぱいで、「アミラン・ダレジャニアニ」の作者さくしや。

メスフ人——ゲルジア南部の一地方メスヘチアに住むゲルジア民族の一つ。
ルスタヴィ——メスヘチアの村。古代ゲルジアのもっとも文化のひらけたところ。

「虎の皮を着た勇士」

おわり



ルスタヴェリ

この世界名作全集のために袋先生が、シヨター・ルスタヴェリの「虎の皮を着た勇士」をお訳しくださることにになりました。この全集によって、わが国では初めて紹介される作品なのです。

この「虎の皮を着た勇士」(Vitvazi v bar-sovoi shkure) は、ロシアのむかしの作品で

解

説

原作者と作品について

那須辰造

す。一一八七年ごろに作られたということですから、おおよそいまから七百七十年もむかしだと思えばよろしい。作者は、シヨター・ルスタヴェリ (Shota Rustaveli) で、グルジアという国の詩人でありました。袋先生がまえがきの中にお書きになっているとおり、この人のことは、くわしいことはわかりません。

グルジアという国は、いまのソヴィエト連邦では、グルジア共和国とよばれています。地図をひらいてごらんなさい。ソヴィエトは、ヨーロッパの東に、ひろびろとひろがっていますね。その南には、大きな二つの海がありますね。一つは黒海、一つは裏海。この二つの海にはさまれて、ロシア大平原とアジアとをつないでいる地方が、グルジアなのです。ここは、またコーカシアともよばれています。

グルジア人は、ロシア人とおなじスラヴ民族なのです。なにしろロシアはひろいので、東と西と、北と南とでは、すこしずつ人種的にも、使っていることばもちがっていて、ずっと古い時代には、いくつかの国に分かれていました。グルジア国は、紀元前数百年もむかしからつづいていたのだそうですが、ルスタヴェリが出たところに、コーカシアぜんたいを統一して、たいそうさかえました。

地図を見てもわかるとおり、この地方は、アジアとヨーロッパのあいだにかけられた橋のようなところですから、たえず異民族の侵入をうけて、苦しみつづけました。イランや、アラビアや、インドの文明が、ロシアのどこよりも早くグルジアにつたわってきました。

七百七十年まえといえ、ヨーロッパでは、騎士が活躍していた時代です。十字軍の遠征がたびたびおこなわれていた時代です。ヨーロッパを中心にして書かれた歴史の本を読むと、なんだかヨーロッパが世界でいちばんすすんでいたような感じをうけますが、十字軍の時代には、いまのスペインにあったサラセン国（アラビア人の国）や、アジアのアラビアなどのほうが、ヨーロッパ諸国よりも文明がすすんでいたものです。

また、ローマのキリスト教会が二つに割れて、その一つは、黒海の出入口にあるビザンチン（いまのイスタンブール）にあって、ここでも高い文化をもっていました。

で、グルジアは、そういうひらけた国の文化や文明をどしどしとり入れて、りっぱな国になっていたのです。

ルスタヴェリは、グルジアのメスヘチア地方に生まれ、ビザンチンにいつてギリシアの哲学や詩をまなびました。そして、そのころグルジアを治めていたタマラ女王につかえ、女王のい





いつけで、この「虎の皮を着た勇士」を作ったということです。ルスタヴェリがこの作品の中に、どういう精神をもちこもうとしたかについては、袋先生はまえがきにくわしく書いておられます。

「国の中がもめて弱くなり、外国のあなどりをうけてはだめだ、ということが、グルジア復興のおしえでしたから、物語はそれを反映して、国を愛する精神と、ひろく外国に目をむけて、いろいろな民族と手をつなぎあうという精神とに——つまり愛と友情という考えにつらぬかれています。」

さあ、考えてみてください。この作品が生まれたころは、わが国では、源氏と平氏が戦って、氏族がちがえば、まごや、ひまごまでも殺さずにはおかないという時代だったのである。またヨーロッパ諸国でも戦争ばかりしていて、そして、キリスト教を信じない民族は悪魔だといつて、どこまでもにくんでいたものです。そのときに、グルジアのルスタヴェリが、じつに高い友愛精神をいだいていたのです。

袋先生は、またこうも書いておられます。

「中世は宗教的にやかましい制限のあった時代ですが、それにもかかわらず、この物語が、の

びのびと人間みたつぷりに書かれていることは、注目されていいと思います。とりわけ、女性を自由な、意志の強い人としてはたらかせ、女性への尊敬、男女平等をうたっているのは、当時としてはめずらしいことでした。」

かんたんにいうと、中世のキリスト教は、こう教えたものでした。「人は死ぬと神の国にいて、そこでほんとうの生命がはじまるのだ。だから、この世に生きているあいだ、神のことばどおりいっさいの欲望をしりぞけて、清く生き、地獄におちないようにしなければならぬ。」と。この考えかたにたいして、「この世に生きているあいだこそ、ほんとうの生命だ。だから、ゆたかな心を持って、知識を愛し、人間の自然さを愛し、生きることがをたのしむべきだ。」と目ざめたのが、あのルネッサンスの時代です。それは、いまから五百年ぐらいまえのことでした。そしてそれは、古代のギリシアの精神からおしえられたものでしたが、どうでしょう、ルスタヴェリは、ルネッサンスより二百年もまえに、ルネッサンスの精神をしっかりと身につけていたのです。

それにしても天才は、文化のまずしい社会からは生まれません。グルジアのむかしの国は、ルスタヴェリを出すくらい文化が高かったものにちがいません。自分を愛するとともに人



をも愛し、自分の国を愛するとともに世界の国々と手をつなぐ、というひろい心があったからこそ、世界の国々がまだ人間性や国際性に目ざめない時代に、グルジアはルスタヴェリのような大詩人を生むことができたのでしよう。

みなさんはやがて、十九世紀からさかんになったロシアの文学をお読みになることでしょう。プーシキンや、ツルゲーネフや、ドストエーフスキーや、トルストイや、ゴーゴリや、チエーホフなどの作品を読んで、むねをうたれるにちがいありません。ロシアの文学は、世界のどこの国の文学にも見られないくらい深刻です。たましいの問題、生命の問題、社会を立てなおす問題に、ロシアの作家たちはしんげんに苦しみ、しんげんに悩んでいます。ロシアの小説や戯曲にえがかれているロシア人は、生活になんの希望もなくあきらめきっていて、そこぬけのお人よしかと思うと、たちまちものすごい残酷性をあらわし、神を信じ人を信じるのものがけ、そのかわり人を憎むのものがけ、というふうにあらわされています。

こういう国民性になったのも、長いあいだ異民族に支配されて、いじめつけられたからだといわれています。ルスタヴェリからいくらかのちに、東洋の蒙古の大軍がロシアを征服し、都会も村もたたきこわして、荒野にしてしまいました。さらにそののち、やはり東洋のタタール



人がロシアを征服して、二百年あまりも支配をつづけました。タタール人の支配は、それはそれはひどいものでした。ロシア人は、自由をうばわれたばかりか、生きる希望もなく、まっくらな気持ちで生きつづけました。文化もうしなないました。みじめな生活をつづけました。

だが、ほんとうのロシア人は——いやスラヴ人は、とても明かなくて、強くて、心はやさしく、若い力にみちているのです。無智な農民のあいだにつたわってきた民謡のうつくしき、民話のゆたかさは、世界一といってもいいくらいです。また、「バイリーナ」という古代の歌物語もありました。これは、フィンランドの「カレワラ」や、ノルウェーの「サガ」や、イギリスの「ベオウルフ」のように、じつに雄大な叙事詩なのです。また、中世には、ちょうどドイツの「ニーベルングンの歌」や、フランスの「ローランの歌」のような、「イゴリー侵入の歌」があつて、これは「ローランの歌」(第九巻)にまさるともおとらない大叙事詩なのです。

でも、中世の騎士物語はたいへい、だれが作ったともわからないのですが、ほとんどおなじ時代に「虎の皮を着た勇士」ほどの作品を、ひとりの力で作りあげたルスタヴェリは、じつにたいした詩人だったといつていいでしょう。

グルジア人は、この歌物語を心から愛しました。蒙古人の軍隊がグルジアに侵入したとき、

国内はすっかり荒され、都も町も村もぜんぶ焼きつくされ、グルジア人はみじめなありさまになつてしまいました。そのうち数百年間、暗い時代がつづきました。が、グルジア人は、自分たちのいちばんの宝である「虎の皮を着た勇士」を、口から口へと歌いつづけてきたのです。どんなに苦しいときにも、この作品は、グルジア人のたましいを護り、勇気づけました。生きる力をあたえました。この歌の中のいろいろなことばから、人々は生きる知恵をおしえられ、愛と、友情と、勇氣と、忍耐と、人間らしさとを守りつづけました。

この作品がずつとの中に本になったとき、教会ではきびしい命令を出して、すっかり川に投げこんだことがあります。それでもグルジア人はこの作品を語りつたえたのです。ほんとうに、こういう作品こそ、民衆とともに生きた文学だといえましょう。

世界名作全集 (113)
虎の皮を着た勇士

N. D. C. 929



お願い
この本をお読みになつた感想や、希望をお知らせください。いろいろの参考にしたうと思ひますから。
講談社編集局児童部

<p>著者 袋 一平 発行者 野間 省一 印刷者 高橋 武夫 印刷所 大日本印刷株式会社 東京都新宿区市谷加賀町一ノ二</p>	<p>昭和三十四年九月二十日 発行 © 定価 1100円 発行所 株式会社 講談社 東京都(小石川局区内)音羽町三ノ一九 振替口座 電話(94) 大塚(94) 大代表三一一一 東京三九三〇</p>
---	--

(阪井製本)

落丁本・乱丁本はお取りかえいたしません。

PRINTED IN JAPAN



(さしえ・池田和夫)



(さしえ・斎藤五百枝)

世界
 名作
 全集 (101) **日本神話物語**

原作・日本 古典
 佐藤 一 英 編著

これはわれわれの祖先がえがいた大きな夢であり、美しく勇ましい神々の物語である。七色に輝く天の浮橋に立つイザナギ、イザナミの二神の国生みにはじまり、童話のように明かるく楽しいオオクニヌシの話、あらあらしいふるまいのなかにもどこかさびしく涙ぐましいスサノオの一生。海の宮殿へ釣り針をさがしに行く海彦山彦の兄弟など、だれもが一どは読まなければならない神話物語。

世界
 名作
 全集 (102) **ジェイン・エア**

原作・プロンテ
 阿部 知 二 訳

イギリスの片いなか生まれの少女ジェインは、幼いころ父母をうしない、金持のおばりード夫人の家にひきとられたが、いじめられてこの家を追われ、孤児学院に入れられる。しかしここでも悪校長に苦しめられるが、ジェインは同じような境遇の娘たちの友情や、天使のようなテンブル先生によって、しだいに温い心をとりのどし、やがて自分の道を求めて社会へ出て行く。清純な香り高い名作。



(さしえ・関川まもる)



(さしえ・古賀亜十夫)

世界
 名作
 全集 (103) **ポンペイ最後の日**

原作・リットン
 白川 暹 訳

ヴェスヴィアス山の大噴火によって、百年の栄華を一しゅんにして、地下数十尺の下に埋没されたポンペイ市を舞台に、エジプト生まれの怪僧アルバセスと、ギリシア貴族のグローカスが、かれんなイオーネをめぐるのあらそいをえがく。それにめくらの花売り娘ニディアの純情をちりばめ、背景にあらたに起ったキリスト教と、偶像崇拜との宗教闘争をおりませた興味あふれる名作。

世界
 名作
 全集 (104) **砂漠の女王**

原作・ブノワ
 小宮 尊 史 訳

神秘と恐怖の国、サハラ砂漠の探検にでかけたフランスの二将校が、ふしぎな男にみちびかれて、砂漠の美しい女王アンチネアのとりになる。女王は白人への復讐として砂漠を旅する白人の男を誘惑し、死体をミイラにして、秘密の広間にかざっている。女王に心ひかれて同行の大尉を殺した中尉が、女王の侍女に助けられ死の砂漠を脱出するまで、ふしぎな魔境を舞台に息づまる冒険の連続！



(さしえ・谷 俊彦)



(さしえ・松野一夫)

世界
名作
全集 (105)
ジキル博士とハイド

原作・スチブンソン
岩田良吉訳

医師ジキル博士は、自分の性格に善と悪との二重性があるのを意識し、ある日、ふしぎな薬を調合する。その薬によって紳士ジキル博士は、みにくい悪人ハイド氏となり、夜の町をさまよう。つぎつぎにおこる怪奇な事件。善人ジキル博士と、悪人ハイド氏とのふしぎな同一人物。だが、その結果はどうなっただろうか。他にロンドンを舞台にフロリゼル公子の冒険をえがく「自殺クラブ」を収む。

世界
名作
全集 (106)
ベン・ハー物語

原作・ウォレス
松本恵子訳

ローマ帝国の圧制下、暗殺者の罪に問われて、財産をとりられ、どれいにされたユダヤの貴族ベン・ハーが、ローマ人への復讐に燃えて同志を集め、ローマをたおそうとくわだてる。しかし、予言者の告げによってあらわれた新しいユダヤの王イエスに会い、やがて精霊の王国にはいり、キリストの教えに生きるようになるまで、圧制、復讐、栄光の道を行く青年の活躍！



(さしえ・沢田重隆)



(さしえ・松田 穂)

世界
 名作
 全集
 (107)
海の勇者

原作・ユーゴー
 斎藤正直訳

波荒い英仏海峡の一孤島、「魔法使いの家」とよばれる一けん家に、どこからともなく移住して来た少年ジャリアットは、たくましい漁師として成長するが、たまたま密輸業の悪船長のたくらみによって、魔の暗礁に衝突した蒸気船デューランド号の機関ひきあげに単身のりこんで、大暴風雨や、大だこと戦う。そしてみごとに成功するが、しかし……。大自然の中に展開する愛と冒険の物語。

世界
 名作
 全集
 (108)
ハジババの冒険

原作・モリヤ
 宮本哲訳

主人公ハジ・ババは、ベルシアの理髪師のむすこであるが、生まれつき勇気に富み、人情にあつく、しかもやさしい心の持ち主。強盗に捕らわれてその道案内をさせられるとちゅう、脱出し、あるときはたばこ屋に、あるときはたぐはつ館に、また悪兵になつて戦争に出て大活躍する。エキゾチックなベルシアを舞台に展開するユーモアとスリルにあふれた傑作。総天然色映画化。



(さしえ・矢車 涼)



(さしえ・西村保史郎)

世界名作全集 (109)

ローランの歌

原作・フランス古典
鈴木力衛 訳

いまから二千年ほど前、ヨーロッパに君臨し、キリスト教を保護した英雄、シャルル大王は、スペイン遠征の帰途、ただ一つ残ったサラゴッサのとりでにこもる異教徒マルシル王と講和をむすぶが、重臣ガヌロンのうらぎりによって、勇将ローランの軍は、ピレネー山中でサラセン軍におそわれる。角笛を吹いて急を大王に告げ、壮烈な戦死をとげるローランの活躍をえがく、中世の叙事詩の傑作。

世界名作全集 (110) 膝栗毛物語

原作・十返舎一九
西山敏夫 編著

強がりのくせに臆病で、そのうえ、みえぼうで、いつもまのぬけたことをして失敗ばかりしている彌次郎兵衛、喜多八のふたり、根はいたって善良な江戸っ子です。長年住みなれた裏長屋をあとに、京・大阪への旅にのぼり、とちゅう、ごまのはえに胴巻の金をとられたり、ふろのかまをわったり、読みはじめたらおなかの皮をよじらずにはいられない、大笑いの東海道膝栗毛。



(さしえ・山中冬見)



(さしえ・高島華宵)

世界名集 (111) **失われた世界** 原作・ルブラン 保羅龍緒 訳

フランスの西の端、シュルプール港を頭とした大きな湾があり、この中にサレク島という島がある。この島に昔から伝わる「生と死をつかさどる神の石」の伝説を利用して、つぎつぎに島人を殺し、宝物をうばおうとする殺人鬼。この悪人に苦しめられる、少年フランシアとその母親を救うために、この島にのりこんだ正義の紳士ルパンの活躍をえがいた大探偵小説。

世界名集 (112) **怪盗ルパン** (5) 原作・ドイル 塩谷太郎 訳

南米大アマゾンの奥地に横たわる人跡未踏の秘境、そこには、すでにほろびきさったと考えられている巨大な恐龍や翼手龍や類猿人などが住んでいるという。白人画家の遺品のスケッチ・ブックからこれを知ったチャレンジャー教授をはじめ、探検家、青年記者の一行が、いくどか死地をさまよいながら、恐怖となぞにつつまれたこの魔境の真相をさぐりだすまで、息もつかせぬ科学冒険小説。



(さしえ・嶺田 弘)



(さしえ・林 唯一)

世界名作全集 (113) **虎の皮を着た勇士** 原作・ルスダザエリ 一平 訳

「虎の皮を着た勇士」タリエールは、インド七王のひとりむすこで、バルサダン王の武將をつとめ、力と美をかねそなえた勇士である。物語は、アラビヤ、インドの二国を舞台として、さらわれた王女ネスタンをさがしに出る勇士の大冒険にはじまる。素手で猛虎と一騎打ちするかと思うと、難攻不落の魔城を占領するなど、ロマンチックな伝説物語として、日本にはじめて紹介される名作である。

世界名作全集 (114) **地底旅行** 原作・ベルヌ 村上啓夫 訳

リーデンプロック博士とアクセル青年は、ある日、町の古本屋から手に入れた一枚の羊皮紙に書かれた暗号文のなぞをといて、アイスランドのある火山の噴火口から、太古以来だれにも知られなかつた地球の中心へ達する道のあることを知り、その探検にのりだす。地底には、まだ中世代の動物が住み、はてしない迷路があり、ぶきみな海が横たわって……。



(さしえ・木俣清史)



(さしえ・三芳悌吉)

世界
名作
全集 (115)

トム・ソウヤーの牽弩

原作・マーク・トウェイン
白木茂訳

おなじみのトム・ソウヤー、ハックルベリー、黒んぼジムの三人が、また新しい大冒険に出かけた。こんどは、きちがい博士の作った新型気球に乗りこんで、あらしの大西洋を横断し、アフリカのサハラ砂漠のまん中で、土人や猛獣たちと戦うすばらしい冒険だ。アメリカの国民文学をうちたてたトウェインの少年小説の傑作で、他に謎の紳士をめぐる「トム・ソウヤーの名探偵」をおさむ。

世界名作全集 (116) 平家物語

原作・日本古典
高野正巳訳

平清盛をはじめ一族みな高位高官をしめて、おごりにおごった平家が、平家討伐にたった藤原氏や、南部の僧兵たちの陰謀をほうむったのを機として、治承四年、まず源頼政がたち、ついで頼朝、義仲、義経が兵をおこし、史上かずかずの合戦に利あらず、やぶれて壇の浦にはろびるまで、はなやかなうちにも悲しい物語のかずかずをちりばめて、さながら一巻の絵巻物を見るようである。



世界名作全集

続刊

講談社

(158) (157) (156) (155) (154) (153) (152) (151)

フランケンシュタイン	宇宙戦争	くり毛のバレアナ	黒い海賊	少女レベッカ	名犬ラッシー	八十日間世界一周	坊っちゃん
シエリー夫人作 塩谷太郎訳	ウエルズ作 代山三郎訳	ポーター作 村岡花子訳	サルガリーリ作 安藤美紀夫訳	ウイギン作 山本藤枝訳	ナイト作 白木茂訳	ベルヌ作 江口清訳	夏目漱石作 福田清人編

(165) (164) (163) (162) (161) (160) (159)

ゆうかなな船長	少女グレートヘン	偉大ななる王	サラングの冒険	テレビ少女	サーカスの少年	デヴィッドの冒険
キップリング作 大木惇夫訳	ザッパ作 植田敏郎訳	バイコフ作 富沢有為男訳	ガッティ作 飯島淳秀訳	ブラウン作 高野弥一郎訳	オーティス作 土居耕訳	ステブソン作 持丸良雄訳

近刊のお知らせ

十月二十日発売予定

定価各二〇〇円

講談社



ს. 129/115

ეროვნული
ბიბლიოთეკა

